といふこと、若しも悟性のすべての基本的法則が我々の思惟の法則である主觀的條件をなすものであつて、かゝるものとしての自然ではないといふことを注意するならば、若しも根本的にすべてこれらの命題を吟味し眞面目に彼等の內容に沈潛するならば、然らば不可避的にかういふ問題が起らなければならない、すなはちこれらの諸命題と並んで、我々の感情に對して印象を惹き起しそして我々の表象を喚起しなければならない物の存在を前提することが出來るかどうか。[1]』

註1 Jakobio Werkk, II Band, I. 303.

こゝで貴下は、シュミット博士よ、かくも烈しく唯物論者たちの著作において貴下に氣に入られなかつたところの、その同じ『非論理』を見るのである。それは貴下を驚かすか？　も少し我慢なさい、貴下は尙ほ一層驚くべきことを聞くであらう。

私が既に指摘したやうに、對話『理想主義と現實主義』はすでに一七八七年に世に出た。一七九二年には當時ヘルムシュテツト大學の教授であつたゴトリーブ・エルンスト・シュルツエが、自己の著書『エネジスムス』において、カント及び彼の弟子ラインホルド自身は、如何なる結論が論理的に彼等の教義から流出したかを理解しなかつたことを立證した。

『物自體は、——と彼は言つてゐる、——經驗の必然的條件として現はれてゐる、しかもそれと同時にそれは全く不可知的なるものとして止まらなくてはならない。しかし若しも物自體が我々に知られてゐないならば、我々は同樣に、彼等が現實の中に存在するかどうか、また彼等がそれが如何なるものであらうともその原因たりうるかどうかを知ることは出來ない。我々はそれ故に彼等を經驗の條件と看做すべき如何なる根據をも有しないのである。更に、若しもカントと共に原因および結果の範疇が經驗的對象にのみ適用されることを承認するとすれば、我々の表象の外に存在するところの物が、これらの最後のもの、內容たりうることを主張することは出來ない[1]』云々。

註1 シュルツエの著作を手に入れることが出來なかつたので、私はツエルラーによつて引用する、『Geschichte der deutschen Philosophie, München, 1873, 五八二—五八四頁。

又しても同じ『非論理』である！　『エネジデムス』の著者は、——今日私が考へてゐるやうに、——カントに據れば物自體は我々の表象の原因であると考へてゐる。彼にあつてもまた私にあつても出發點は同一である、しかし相違は、ゲー・エー・シュルツエが懷疑的な結論へ到達しようとしてカントの非連續性を利用してゐるに反して、私の結論が唯物論的性質を持つてゐることである。この相違は、疑ひもなく、非常に大である、しかしそれは物自體に關するカントの教義の理解だけを問題にしてゐる場合、我々にとつて何等興味あるものではない。

當時カントをさういふ風に解してゐたのは單にシユルツエ及びヤコービのみであつたのではなかつた。

『エネジデムス』の出現の後五年を經てフイヒテは書いた、ケーニツヒベルグの哲人をすべてのカント主義者たちは……バークを除いて、この意味に解してゐた、と。そしてフイヒテは、エンゲルスがそれに批判哲學の自己の反駁の基礎を置いたところの、その同じ矛盾の故にカントの通俗家達を批難した。『諸君の地球は象の上に支へられてゐる、が象は、こんどは、地球の上に支へられてゐる。純粹思惟であるところの諸君の物自體が、主觀に對して働きかけなければならない。』[1] フイヒテは、『カント主義者たちのカント主義、』それは、彼の意見によれば、最も粗雜な獨斷論と決定的な觀念論との危險なる結合以外の何物でもなく、カント自身のカント主義ではありえなかつたことを固く信じてゐた。彼はカントのカント主義の眞意義は《Wissenschaftslehre》(『哲學』)の中に表現されてゐると斷言した。しかし貴下は、博士よ、その後何が起つたかを知つてゐるか?

註1 最初一七九七年の『Philosophischen Journal』に現はれ、その後フイヒテの著作集の第一卷に收められたところの、《Zweite Einleitung in die Wissenschaftslehre.》

自己の有名な『フイヒテの〔哲學〕に關する說明』(《Erklärung in Beziehung auf Fichtes Wissen

schaftslehre》において、カントは全く偉大なる觀念論者の期待を滿足させなかつた。彼は(一七九九年)に、フイヒテの『哲學』は全く無力なる體系であると考へると書いた、そしてこの哲學との如何なる同意見からも拒絕した。同じ『說明』においてカントは、彼の『純粹理性批判』は文字通りに解釋されなければならない(nach dem Buchstaben zu Verstehen)と言ひ、『神よ我等の親友より護りたまへ、我等の敵とは我等自から勝敗を決せん』といふイタリーの諺を引いてゐる。その當時書かれたチフトルンクへの手紙の中に、カントは自己の思想を尙ほ一層明瞭に表現してゐる。時間の不足から彼はフイヒテの《Wissenschaftslehre》(『哲學』)を通讀しえなかつた。しかし彼はこの書物の『フイヒテ氏に對する絕大の同情をもつて、——とカントは附加へてゐる、——書かれたところの』——批評を讀むことが出來た、——そして彼は、この最後の者の哲學は幻影に類するものであると見てゐる。諸君がそれを把握しえたと考へる時、諸君のところには自分自身の外には何物もなく、しかもこの自分自身には把握せんとして伸ばされた双手の外に何物もないのである。[1]

註1 Kants Werke, Ausgabe Von Hartenstein, X Band, S. 577-578.

かくて問題は永久にまた全く明瞭に解決された。カントは『カント主義者たちのカント主義』が彼自身の『カント主義』と一致してゐることを示した。これは明かであつた、しかしこのことはカント

主義をヤコービ、シュルツエ及びフイヒテが指摘したところの、そしてそれを彼等が自己の批判に附したところの、その矛盾から救助しなかつた。それどころか、一七九九年にカントによつて與へられた說明は、丁度またこの矛盾の存在の事實を是認するものとなつてゐる。

コンラツド・シュミツトは、カントの教義に對する私の解釋はすべての哲學史家が彼を解してゐるところとは異つてゐると考へてゐる。若しもそれがさうであつたにしても、それは少しも私を當惑させぬであらう。上に私によつて引用された爭ふべからざる歷史的事實はカントに對する私の解釋の正しさを確證してゐる。それにも拘らず哲學史家がこの解釋を取らぬと言ふなら、私は、困るのは哲學史家の諸君であると斷言する完全なる權利を持つ。しかしシュミツト博士はこの點において、彼が自己の論文の全部において誤つてゐると同樣に甚しく誤つてゐるのである。

現に譬へばこの點に關して、フリードリツヒ・イベルウエーヒが何を言つてゐるか、お聞きなさい。この哲學史家の意見によれば、カントの矛盾の一つは、『物自體が、一方においては、我々に對して働きかけなければならず、それは時間の內においてまた原因性の法則に從つてのみ行はれうるのであり、しかし、他方において、時間および原因性は先驗的形式として現はれ、單に現象の領域においてのみ、がこの領域のあちら側においてではなく、意義を持つてゐる。[1]』といふことに存する。

註1 Grundriss der Geschichte der Philosophie, III Theil, Berlin 1880, S. 215.

果してこれと全く同じことを私は言はなかつたであらうか？

こんどはエー・ツエルラーの言葉を差上げよう。彼はかう書いてゐる、『我々は、我々の感覺には我々の主觀とは別の現實が相應してゐることを認めなければならない。カントはこのことを『純粹理性批判』の第二版において、バークレーの觀念論と闘ひつゝ、示さうと努めてゐる。』エー・ツエルラーはバークレーに對するカントの論證に滿足してゐないが。しかしそれは彼にカントの教義の眞意を理解することを妨げない。そして彼は言つてゐる、『カントは常に、我々の感覺が思惟體の所產であるばかりでなく、同樣にまた我々の表象から獨立に存在してゐるところの物によつて條件づけられることを主張した。[1]』カント哲學に對する自己の批判においてツエルラーは就中かう言つてゐる、『若しも彼（カント）が、かゝるものとしての現象にのみ適用さるべき、我々の悟性の諸範疇の中の原因性の概念を承認したのであつたら、彼はそれを物自體に適用してはならなかつたのである、換言すれば、彼は物自體を我々の表象の原因と看做してはならなかつたのである。[2]』

註1 《Geschichte der deutschen Philosophie,》 S. 436.

註2 Ibid., S. 514.

こゝでも我々はエンゲルスが依據しまた私が依據しつゝある、カントに對する同一の解釋を見るのである。若しもコンラッド・シュミット博士がそれを我が物としたのであつたら、彼は、勿論、それにはすべての哲學史家が反對してゐるなどとは言はなかつたであらう。

物自體は究極概念に過ぎないと見てゐるエルドマンも亦、やはり、カントの物自體は諸現象の『我々からは獨立な條件』であることを餘儀なくされてゐる。しかし若しもこの物自體が諸現象の條件をなすものであるならば、現象はそれによつて條件づけられることゝなり、そこにまた十九世紀全般を通じて理解ある人々がかくも多く從事したところの、そしてそれを認めないのは唯だわが深邃なる doktor irrefragabilis（頑固な博士）のみがよく爲しえたところの矛盾が現はれる。

私には、云ふまでもなく、或種の哲學史家がカント主義を單純なまた純粹な觀念論に變質してゐることは、極めてよく知られてゐる。しかし、第一に、或種のは未だもつて全部を意味しない、第二に——若しもシュミット博士がこれらの史家に同意するのであつたら、彼は我々に、彼等が正しいことを證明すべく努力せねばならなかつたであらう。彼はより容易い方法を選んだのである、すなはち彼はマルクス及びエンゲルスの依據したカント主義の解釋を、無學者の譯の分らぬ思ひ付であると名付けただけで滿足した。

我々は、コンラッド・シュミットの意見によれば、我々に對して働きかけるのは物自體ではなくして、時間および空間内において規定された物であることを見た。私は、若しも私の反對者がかくの如きは彼自身の哲學の眞意であると言ふのであつたら、それを兎や角言ふことはしないであらう。しかし彼はかくの如きはカント哲學の眞意であると主張してゐるのである、がこれに對しては私は最も決定的な方法で反對しなければならぬのである。

私はコンラッド・シュミットに《Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft》『自然科學の形而上學的原理』を繙き、その第二部において第四の公理への第二の註釋を一讀されんことをお願ひする。カントはそこで一人の幾何學者の見解を叙べてゐるが、それは全く彼によつて分け持たれてゐるものであり、そしてそれは次のことに含まれる、『空間は決して我々の外なる或る何等かの物に屬する性質ではなくして、我々の感覺的知覺の主觀的形式であり、その下において我々は、我々の内的本性の外にあつて、我々が知らないところの、しかしその現象を我々が物質と名付けるところの對象を感受するのである。』[1]

註1 《Kants Werke》, VIII B, § 432.

如何なる物についてこの場合語られてゐるのであるか、物自體についてであるかそれとも空間および時間内において決定された物についてであるか？ 物自體についてであることは明かである。然らば何をわがカントはこれらの物について語つてゐるか？ 彼等自體が如何なるものであるかは我々に

知られて居ない、また彼等は我々に空間の主觀的形式の下においてのみ現はれると彼は言つて居る。が彼等が現はれうる爲めには何が必要であるか？　彼等が我々の感情に對して働きかけてくれることが必要である。『我々に對する對象の働きかけ方に應じて表象を受取る可能性は感性と名づけられる。』[1] コンラツド・シユミツトは、多分、もう一度彼によつて占められた陣地を救ふ意圖をもつて、カントは此場合、空間および時間内において規定された物について語つてゐるのであるといふこと、即ちそれは、――『純粹理性批判』の中に語られてゐる如く、――『それ自體としてではなく、唯だ我々の内部に存在する』ところの現象についてであることを意味するのだと我々を信じさせ始めるであらう。この種の一切の企圖を警戒する爲めに、私は尙ほ一箇所『純粹理性批判』から引用して置かう。彼は言つてゐる、『何となれば我々は唯だ我々は表象だけを問題にしてゐるのであつて、物自體が（それの媒介によつて彼等が我々に働きかけるところのその表象から獨立に）如何なるものであるかといふこと、それは全く我々の認識の領域の外にある。』[2]

註1　《Kritik der reinen Vernunft》, der transzendentalen Elementarlehre, erster Theil der transzendentalen Aesthetik, § 1.

註1　Elementarlehre, II Theil, I Abtheilung, II Buch, II Hauptstück, Zweite Analogie, Beweis.

これは、充分に明瞭であると思はれる、――物自體は我々に對して彼等によつて喚び起される表象を媒介として働きかけるのである。

コンラツド・シユミツトは自己の論文において、『滑稽な誤解』について語つてゐる、彼は全く正しい。しかし唯だ彼は凡てこれらの誤解が彼に歸せられなければならないことを附加へることを忘れた。

コンラツド・シユミツトは、私によつて引用された『プロレゴメナ』の箇所は唯だ一見したのみで、またそれが『全般的な原文から抜萃されてゐる』故にのみ私の命題を確證してゐるのであると斷言してゐる。これに正しくない。讀者自身が判斷されんことを望む、『我々には我々の外部に存在してゐるものとしての物が與へられてゐる、しかし彼等がそれ自體如何なるものであるか、我々は知らない』如何なる物についてこの場合語られてゐるのであるか？　物自體についてである。これは明かである。次を聞かう、『しかし我々が知つてゐるのは唯だ彼等の現象だけである。』何の現象か？　すでに空間および時間内において規定された物であるか、それとも物自體のであるか？　不思議な質問である！　カントがこの場合物自體について語つてゐることを誰が見ないであらうか。尙ほその先き、『これは――我々に對する物の働きによつて喚び起されるところの表象である。』如何なる物が我々の中に表象を喚び起すか？　それについて我々が何も知ることの出來ない物自體である。如何にしてこれらの物が我々の中に表象を喚び起すか？　『我々の感覺的知覺に對する働きによつてである。』

物自體は我々の感覺的感受に働きかけるといふことである。それ『自體』かくも明かである『物』を（語呂合せを許して欲しい！）理解しなくなる爲めには、幾つの博士帽を損ずることが必要であつたか？

が私によつて引用された箇所と全體の原文との『關聯』に關して言へば、それは讀者自身をして、『プロレゴメナ』の第一章と特にこの章への註釋とを通讀したる後に、それについての判斷を下さしめよ。その外に、私は同じ書物の三六章に讀者の注意を促すものである。そこでは我々に讀む、『第一、如何にして自然は質料的意義において、即ち直觀において現象の總和として、如何にして空間、時間、及び彼等を充たしてゐるところの凡てが、一般に我々の感覺的知覺の對象となり得るのであるか？　答に言ふ、自己の特性に相應して、それ自體としては未知的なまた全くこれらの現象とは異れる對象から印象を受取るところの我々の感性によつて然るのである。』今やシュミット博士よ、如何なる對象が我々の感情に働きかけるのであるかを言つて欲しい。

私の反對者は、私が自己の論文において彼を殆ど學校生徒の如くに取扱つてゐると斷言してゐる、個人的には私は彼に對して學校教師たるの役割を演じようとする如何なる希望をも持つてゐない、しかし、それにも拘らず、私は彼に一つのよき忠告を與へずには居られない。Mein theurer Freund, ich rath euch drum zuerst Collegium logicum（私の貴重なる友よ、私は故に先づ學校教育を受けんことを忠告する）。

しかしカントへ戻らう。『物自體の存在に關する前提をカントは、――このことは種々なる但書きによつて彼においては隱蔽されては居るが、――原因性の法則からの結論に、即ち、經驗的直觀、精確にはその中からそれが發生する我々の知覺器官内の感覺が、自己の外的原因を持たねばならないといふことに置いてゐる。しかし彼自身のまた全く正當な發見によれば原因性の法則は我々にa priori に知られてゐる、即ち、從つてそれは――我々の知性の一機能であるといふことになり、從つてまた、主觀的な起源を持つことゝなるのである。』これらの行句の中に含まれてゐる『非論理』はアルツール・ショペンハウエル[1]に屬する、そしてこの『非論理』は我々の博士の貧弱な『論理』が、ガラスが石に當つて碎ける如く碎けるほど岩丈であるのだ。コンラッド・シュミット博士および彼に類似の人々が何と言はうとも、カントの體系の基礎には不思議なる矛盾が横はつて居る。然るに矛盾は基礎として役立ち得ない、それは唯だ無根據を示すに過ぎない。從つて矛盾は止揚されねばならぬ。如何にこれを爲すべきであるか？

この爲めには二つの道がある、その一つは主觀的觀念論への發展の中に含まれ、他は唯物論への發

註1　《Die Welt als Wille und Vorstellung》, Leipzig 1873, Band I, S. 516 餘分なことではあるが、カントの『發見』は私にはショペンハウエルとは全く異つて考へられてゐることを附加へて置く。

展の中に含まれる。これらの道のどちらが正しいか？　こゝに一切の問題が存する。

主觀的觀念論に從へば、――譬へば、フイヒテの主觀的觀念論、――に從へば、物自體は我の中に在る (des im ich gesetzte)。

それは、我々が意識のみを問題とすることを意味する。フイヒテはこのことを屢々かつ明瞭に語つてゐる。『一切の意識、我なる意識は、非我なる意識と同樣に、意識の或る一定の變形であるに過ぎぬ。』しかし若しもそれがさうであるならば、若しも『眞正にして眞實なる實體が精神的である』ならば、――その同じフイヒテが斷言してゐるやうに、――我々は不思議な思ひがけない結論に達する。事實において、かゝる場合私は、私の我の外に存在して居ると私に思はれてゐるすべての人々が、私の意識の變形に過ぎないことを承認することを餘儀なくされる。ベルリンの貴婦人たちは憤怒をもつて、《Wissenschaftslehre》(『哲學』)の著者が、少くとも、自分自身の妻の存在を認めてゐるかどうかを訊ねたことをハイネが語つてゐる。その下に正しい思想が隱されてゐるこの冗談は、我々の前に主觀的觀念論のアキレスの踵を曝露して見せるものである、いづれにしても、フイヒテ自身もこのことを感じてゐた、そして自己の體系の弱點を、力の限り、排除しようと努めて居た。彼は彼の我は個人的なものではなくして、世界的の、絶對的の我であると說明した。「私の絶對我が個人でないことは明かである、――と彼はヤコービーに宛てゝ書いた、――私に利己主義の恥づべき教義を塗り付けようとしてゐる、辱しめられた氣取り屋および執拗な哲學者達が私を理解したやうに。しかし個人は必ずや絶

對我から導き出されねばならない。私の『哲學』は自然法に關する教義においてそれを爲すであらう。しかしながら、自然法に於ては我々は次の如き種類の議論に出遭ふのみである、『理性的な存在はそれだけでは即ち彼の外に存在するところの他の理性的存在の間における個體として自己を考へることとなくしては自己を自意識をもつて、考へることが出來ない。』これは極めて薄弱な「演繹」である。證明の一切の力はそこでは個體なる言葉が强調されてゐることに基づいて居る。理性的存在はそれだけでは自己を同時に非我一般、すなはち人々および物を考へずしては、考へることが出來ない。これはこの理性的存在の意識の外なる物の存在を證明するか？　否？　從つてそれは他の諸個體の存在をも證明しないことゝなる。

人々の存在を『導き出す』(deduzieren) 代りに、フイヒテは彼等の存在を道德律に作り上げて居る。しかしこれは障礙を克服することではなくて、それを回避することを意味する。が我々が障礙を克服しない限りは、我々は矛盾から免れることが出來ない、我々の外部の物の存在と我々の外的感情に對する彼等の作用とを否定する一切の哲學體系は不可避的にそれに導かれる。若しも他の諸個體の存在が精神的に過ぎないならば、私の母親は――現象であるに過ぎず、しかも現象として彼女は私の中に存在するに過ぎない[1]。從つて、私を產めるは女であると斷言するは無意味である。同樣に私は、早かれ晩かれ死ぬるであらうといふことを確信を以ては言ひえない。私は唯だ他の人々が死ぬることだけ知つてゐる、しかしこれらの人々は表象たるに止まる故に、私は私も亦彼等と同樣に死ぬるものであると斷

定する權利を有しない。類推を基礎とする論理的判斷はこの場合何等の力をも有しうるものでない。

註1 ……しかし、現象として、彼等はそれ自體としては存在しえず、唯だ我々の內部に存在するのみである（カント）。

若しも人類および我々の全世界創造の歷史を觀念論の見地から觀察しまた研究し始めるならば、如何なる切抜も出來ない無意味の迷路に我々が迷ひ込むであらうかは知るに難くない。

かくてカント主義から觀念論の方向への發展は、假令私がカントの體系の基礎をなして居る矛盾を揚棄したところで、最も明かなるまた滑稽な無意味に導くのである。

二

今やカント主義から唯物論の方向への發展が我々を何に導くかを見よう。しかし先づ用語を規定して置かう。如何なる唯物論がこゝでは話題になつて居るのであるか？ 曾て存在し尙ほ今日においても哲學的才能をもつてよりも遙かに多く敬虔の念をもつて卓れてゐるところの俗人どもの頭の中に存在して居るところの唯物論についてではないか？ それとも眞實の唯物論について、すなはちその基本的命題が最も重要なる唯物論者たちの著述に含まれて居るところの唯物論についてであるか？ 唯物論は社會主義に劣らず中傷された。それ故、我々が唯物論に關する議論を聞く場合、時々この教義が歪曲されて居ないかどうかを自問しなければならぬのである。

私の尊敬すべき反對者は、それをよく研究し理解する骨折をなさずして、唯物論を反駁すべく企圖しつゝある人々の數に屬する。彼は、譬へば、『唯物論者たちは、この本質（すなはち現象に相應する本質——ゲー・ペー）が現象と同じであることを斷言しなければならない』と言つて居る。これは誤謬であるばかりでなく、誤謬はこゝでは眞に愉快な形態を有つてゐる。

我々、唯物論者たちは、物の本質は現象と同じであることを斷言しなければならない！ 何故に我々はその形式から見てもまたその『本質』から見てもかくも奇怪なることを斷言しなければならないのであるか？ 或は、我々がコンラツド・シユミツト氏の爲めに、我々を反駁するといふ『容易な任務』をより容易にする目的をもつてこれを爲さねばならなかつたのか？ 唯物論者たちは、疑ひもなく、親切な人々である、しかし彼等からかゝる過大なる親切心を要求することは、あまりにも圖々しく過ぎることを意味するのである。

博士は續けて言ふ、唯物論者たちは人間の意識から全く獨立な、自からの中にまた自からの爲めに（？）存在するところの現實の爲めに——必然的に我々の感情によつて、といふよりも寧ろ、我々を圍繞する諸現象を基礎として、感情によつて受取られる印象に加工するところの悟性によつて觀察される、最も一般的な定義を採用してゐる。何よりも先づ空間および時間、及びその中に運動しつゝある

物質が唯物論者たちには人間意識の特性から全然獨立な、それ自から存在する現實であると思はれて居る。でコンラツド・シュミツトは續けて言ふ、

『唯物論は、從つて、同一性の哲學として現はれる、何となれば彼が我々の表象とそれ自から存在する實有との間の相違を認めた場合、かくして素朴な現實主義の限界を越える場合にすらも、彼は依然として諸現象を分析することによつて物自體を認識することが可能的であると考へて居るからである。』

さうであるか？　否、これは如何なる場合にもさうではない。それを信ずる爲めに、ホルバツハの言葉を聽かう。『若しも我々の感情に對して印象を惹き起すところの實體に關する凡ての中から、我々に知られて居るのは唯だ我々に對する彼等の作用、それに基づいて我々が彼等に或る一定の特性を歸屬せしめるところの作用だけに過ぎないとしても、これらの特性は、少くとも、何らか特定のものであり、我々の內部に明確な觀念を發生させるのである。感覺的知覺を媒介して我々に與へられる認識が如何に表面的であらうとも、それは我々にとつて可能なる自然的な認識である、そして我々が與へられた組織を具へてゐる以上、我々はこの認識をもつて滿足しなければならぬ。』[1]

註1　《Système de la Nature》, Londres 1871. 第二部、一二七頁。

私は讀者がこれらの行句を特殊の注意をもつて通讀すると共にその內容をよく玩味されんことを希ふ。それは骨折りに値する、何となればこの箇所はマルクス以前の唯物論哲學の發展における頂點をなしてゐるところの、十八世紀のフランス唯物論が如何なるものであつたかに關する異常に明瞭な表象を與へるが故である。[1]

註1　序でながら、私の前の諸論文において私は多くの唯物論者たちを、コンラツド・シュミツトが唯物論哲學の『本質』に關して全然誤れる見解を抱いてゐることを指摘しつゝ、引用した。自己の解答において、コンラツド・シュミツトは私によつて引用された唯物論者たちを、『啓蒙學者』と定義してゐる。これはまことに要領がいゝ、——若しもそれが衒學的でないとしたら、何となれば哲學史に通曉せぬ讀者はから考へるかも知れないからである、どういふ譯でプレハーノフ氏は唯物論者たちが問題になつてゐる時に、『啓蒙學者』を引證しようと思ひ付いたのであるか！　かゝる讀者を安心させる爲めに、私はホルバツハを、といふよりは寧ろ、デイデロー及びエルヴエシユースを含めての、《Système de la Nature》の著者達を引用したのであることを附加へることを餘儀なくされる。ホルバツハについて言へば、《Système de la Nature》は我々の唯物論の法典であると言はれた（ランゲの『唯物論史』第二版、第一卷、三六一頁を見よ）。がエルヴエシユースについて言へば、この『啓蒙學者』は嘗て存在した最も天才的なまた最も獨創的な唯物論者たちの中の一人であつた。これらの二人の『啓蒙學者たち』を知らない者は、十八世紀の唯物論の發展における最も高い注目すべき段階を知らざる者である。

ホルバッハ、即ちホルバッハ一人が書いたのではない。《Système de la Nature》（『自然の體系』）なる著述の著者達に從へば、我々の外部にまた我々からは獨立に物があり、現實的な、『精神的』なばかりではない存在を有して居る。その本性が我々に知られてゐるこれらの物が、我々の感情に印象を惹き起しつゝ、我々に對して働きかける、そして彼等の作用によつて我々の内部に喚び起される印象に相應して、我々は物に或る何等かの特性を歸屬せしめるのである。これらの印象こそは我々が物自體に關して持ちうるところの、唯一の知識（表面的なまた極めて制限された知識）なのである。『我々は若しも本質なる言葉をこの物の本性を成立てゝゐるところのものと解さねばならないのだつたら、一つの物の本質も知らないのである。我々は物質を唯だそれが我々の内部に喚び起す印象、表象、及び觀念によつてのみ知つてゐるのである。そして我々は我々の器官の本性に相應して自己の正しい若しくは誤れる判斷を構成するのである。』[1]

註1 《Système de la Nature》第二部、九一―九二頁。この箇所とスペンサーが語つてゐることゝを比較することは興味あることである、『物質の、その重力および慣性に至るまでの、諸特性によつて我々に顯はれる現象は、事實において、我々にとつて未知的にまた不可知的にとゞまる客觀的諸力によつて生み出される主觀的の變化以外の何物でもないのである。』（《Principes de Psychologie》, 2 Theil, 3 Kapitl, § 86）。

これは物の本性と現象とが『同一』であることを斷言することを意味するか？ 明かに否。然らば何故にわが doctor irrefragabilis（頑固な博士）はかゝる斷言を唯物論者たちに歸してゐるのであるか？ 何故に彼は、必ずかゝる見解を排除せ『ねばならぬ』と考へてゐるのか？

その限りにおいて、――と我々は更に彼のところで讀む、――即ち唯物論を到る所において自然現象の原因的關聯を發見し、物質的過程からの精神的過程の獨立性を確立しようとする努力とのみ理解する限りにおいては、かゝる『唯物論』は少しもカントの理論哲學に抵觸するものではない。それどころか、それはカント哲學の見地から完全に理解され、また必然的でさへもあるところの目的を立てゝゐるのである。彼等の間の對立は唯だ、この所謂『唯物論』が徹底的な形而上學的なもの、或は、より精確に言つて、超現象論的唯物論となる時、それが現象界の諸要素を『物自體』と宣言する時にのみ現はれる。

從つて、唯物論は或は現象論的であるか、――そしてその時、それはすこしもカントの理論哲學と分離しない、或はさうでなければ超現象論的であるかである。――そしてこの場合には、それは我々形を而上學に導く、何となれば現象の諸要素を物自體と宣言してゐるからである。コンラッド・シュミットが巧妙に表現してゐるかどうかの問題は暫く措き、我々は、この彼の或は――或はは現實との合致のみを除いた一切の卓越をその中に結合してゐると言ふことが出來る。

カント主義も亦、我々に對する物自體の作用を認めてゐるといふ意味において超現象論的である。

眞實のそして純粹な形における現象論的哲學として現はれてゐるのはフイヒテ主義である。しかしカントはフイヒテの哲學に對して鬪爭した。唯物論が超現象論的教義であることは自明である、何となれば彼は意識の外なる物の存在をも、我々に對する彼等の作用をも疑つてゐないからである。しかしそれは同時に、我々が物自體を唯だ我々に對する彼等の作用によつて喚ひ起されるところの、それらの印象のお蔭によつてのみ認識することを認めるが故に、彼には現象を物自體と看做すべき必要も、論理的可能性もないのである。この點においては彼はすこしもカント主義と、自己の超現象論的性質に拘らず、背馳しないのである。唯物論とカント主義との限界はその以後にのみ現はれる。物自體を現象の原因であると認めながら、カントは、原因性の範疇は物自體に對しては如何なる適用をも有しないことを我々に信じさせたがつてゐる。ところが唯物論は、それも亦物自體を現象の原因と考へてゐるのだが、自己撞着に陷つてゐない。これが全てゞある。蓋しも我々が、この相違に依據しつゝ、唯物論は形而上學的教義であると主張し始めるのだつたら、我々は先づ、『批判哲學』の本質はその內的矛盾に存することを認めなければならぬであらう。

しかも形而上學とは何であるか？　その研究の對象は如何なるものであるか？　形而上學の對象として現はれるのは絕對である。それは絕對的なるものに關し、無條件的なるものに關して科學たらんことを欲する。が果して唯物論は絕對的なるものに從事するか？——否、彼の研究の對象として現はれるのは自然である。『人々は常に、幻想によつて創造される哲學體系の爲めに經驗を犧牲にする時、

迷妄に陷いる。』とホルバッハは言つてゐる。『人間は自然の創造物である、彼はその中に存在する、彼はその諸法則に從屬する、彼は思想においてすらもそこから脫出しない。彼の精神が可見の世界の範圍外に出ようと焦慮しても無駄である、彼は常にこの世界に戻つて來ることを餘儀なくされる。』すでに幾度となく私によつて引用された《Système de la Nature》（『自然の體系』）の冒頭のこれの行句は、唯物論の『規準』をなすものであつて、從つて、嘗てこの『規準』と分離したることなき教義を如何なれば形而上學的と名付けうるか、全く解らないのである。

しかし唯物論者は『自然』なる言葉の下に何を理解してゐるか？　彼においては自然は形而上學的概念として現はれてゐないか？　我々は直きにそれを見るであらう。

唯物論者は我々の感覺的知覺對象を成立てゝゐるところの物の總和を自然と呼んでゐる。自然、それは——全體としての感覺的世界である。この感覺的の世界について十八世紀のフランス唯物論者たちは語つてゐたのである。自然についてのこの概念は絕えず彼等によつて『幻想』に、すなはち意想上の超自然的な存在に對置されてゐた。《Système de la Nature》（『自然の體系』）において我々は讀む、『我々の感情は唯だ物の外面のみを感受するの能力を有つてゐるといふことが我々に向つて屢〻繰返される。それがその通りであるとしよう。しかし我々の感情は想像上の存在の外面さへも我々に示さぬのである、所がそれを迷信的な人々は、涯なき論爭が行はれながらも、しかも今日に至るまで彼等の實在そのものが證明されずに終つてゐるところの、かくの如き諸特性をそれに歸屬せし

めつゝ、問題にしてゐるのである。[1]』人間理性は、彼が感覺世界の範圍の外に、或は、それは同じことであるが、經驗の範圍の外に出るや否や、闇の中に自からを見失ふのである。この場合唯物論者たちは經驗を『純粹理性批判』の著者とは少しく異つて解釋してゐる。

註1　第二部、一〇九頁。

カントに據れば、自然は事物の『定有』(dasein)、——それが遍通的な法則によつて規定される限りにおいて、——である。これらの一般的諸法則（或は自然の純粹法則）は我々の悟性の諸法則である。『悟性は自己の諸法則を自然の中から（a priori アプリオリ に）汲みとるのではなくして、その反對に、自然に自分自身の法則を提供するのである。』とカントは我々に說明する。これらの法則は從つて客觀的意義を有つてゐない。換言すれば、彼等は現象にのみ適用されるのであつて、物自體にではない。しかし現象は我々の中にのみ存在するが故に、カントの經驗についての理論は究極において主觀的な性質を持ち、何等フイヒテの觀念論的な理論と異なるところのないことは明かである。[1]我々はすでに、この理論を眞面目にとつて、それから流出する一切の終局的な結論をなすことを恐れざる者が、如何に無意味なる迷路に落ち込むかを見た。今や立ち入つて經驗の唯物論的理論を觀察しよう。

註1　『經驗の組織は必然性の感情によつて伴はれる思惟以外の何物でもない。』Fichtes Werke, Band I, S. 423. カントの經驗論はそれが物自體に對する關係の適用性を主張する限りにおいてのみ主觀的であるといふことは自明である。しかし物自體がカントにおいて我々の感覺の原因として役立つてゐる限りにおいて、その限りにおいてこの理論は——私が一度たらずそれを繰り返したやうに、——絕叫的な矛盾である。

この理論に從へば、自然は何よりも先づ現象の總括である。しかし物自體は現象の必然的條件をなすものである故に、換言すれば、現象は主觀に對する客觀の作用によつて喚び起されるものである故に、我々は、自然の諸法則は單に主觀的のみならず、また客觀的意義をも有つてゐること、すなはち主觀內の觀念の相互關係は——人間が誤つてゐない時には、——彼の外部にある物の相互關係に照應してゐることを承認せざるをえない。コンラツド・シユミツトは、勿論、それは『同一性の哲學である、』またそれは『現象の諸要素を物自體と』考へてゐると言ふであらう。彼は誤つてゐる。彼を迷妄から警戒する爲めに、私は私の反對者に、スペンサーがその助をかりて自己の讀者に『變態現實主義』の理解を容易ならしめようと努めたところの、幾何學的圖形を思ひ起すことを希はう。圓壔と立體とを想像しよう。圓壔は主觀であり、立體は——客觀である。立體から圓壔形の上に落つる陰は、表象である。この陰は全く立體に似てゐない、立體の直線がその上に曲線となつて現はれ、その平面は彎曲して現はれる。そして、それにも拘らず、立體の各々の變化はその陰の變化に照應するであらう。我

々は何等か類似のことが表象形成の過程において起ることを假定しうる。客觀の作用によつて主觀の中に喚び起された感覺は、主觀にも似てゐないと同様に、主觀にも似てゐない、——それにも拘らず客觀内の各變化には主觀に對する彼の作用の變化が照應してゐる。これは決して、コンラツド・シユミツトが我々に歸してゐる、同一性の粗雜なる通俗的な哲學ではない。自然を自己の出發點として持つてゐるこの經驗の理論は、我々にカント主義の非連續性をも、同樣にまた主觀的觀念論の無意味をも免れる可能性を與へる。

或は、ヘルバート・スペンサーの『變態現實主義』は一事であり、唯物論はまた他の一事であると私に反駁するかも知れない。紙數の不足はこゝで、これらの二つの教義の差異が何に存するかを觀察することを私に許さない。この論文において私が言ひうる一切は、——尤も、私の目的の爲めにはそれで充分なのであるが、——正に次のことである。スペンサーの認識論は、——私がこゝでそれを利用するその限界内においては、——十八世紀のフランス唯物論者たちの思想のその後の發展たるものに過ぎない。

『汝なくば我なし』(ohne Du kein Ich) と老いたるエフ・アー・ヤコービは言つた。私はこんどは、汝なくば、或種の極めて强力なる良心の苛責から自由なる、我なしと言はうと思ふ。こゝに確信的な例がある。若しもコンラツド・シユミツト氏が物自體として存在しないのだつたら、若しも彼が唯だ現象、即ち私の意識内にのみ存在する表象に過ぎないのだつたら、私は決して自分に、この私の意識

がかくも哲學的思想の問題にかけて要領の惡い博士を生んだことを許さなかつたであらう。しかし若しも私の表象に現實のコンラツド・シユミツト氏が照應してゐるならば、私は彼の論理上の過誤に責任をとることをせず、私の良心は平靜である、がこれは我々の涙の谷においては非常に意味多いことなのである。

我々の反駁しがたい博士は、彼はカント主義者ではないこと、彼は寧ろカントに對して懷疑的であることを確言してゐる。しかし私は一度も、彼がどんなのであらうとも哲學體系の眞の學徒たることが出來ると斷言したことはなかつた。私は常に、彼は折衷的雜炊を好むと言つた。しかし彼の折衷主義は依然として、カント主義者たちのところから借りて來られた論證を使用して、唯物論と闘ふことを彼に妨げなかつた。尤も折衷主義者は常にさう爲すのである、彼等は他より借用された論證によつて一つの教義と闘ふのである、がこの第二のものに對しては第一のものから借用された論證を對置するのである。しかしシユミツト博士の小論文が『直接の衝動』を與へたところのベルンシユタイン氏(可哀さうなベルンシユタイン氏!)は、やはり自己の到達において後方へ、カントにまで達した。成程、彼は唯だ『或る程度まで』彼に達した。しかし坊主が坊主なら、檀家も檀家、とロシヤの諺は言つてゐる。折衷主義者の教師には折衷主義者の生徒が『相應してゐる。』兎に角、コンラツド・シユミツトの諸論文が或る讀者に或るどんなかの他の哲學者にではなくして、正にカントに歸らうとする傾向を目醒ますその事情は注意に値する。

最後に、コンラツド・シユミツト氏の論文の最も腹立たしげな終結に近付くことにしよう。

私は、ブルジョアジーはカント哲學の復活に興味を持たされてゐる、何となればこの哲學が彼等にプロレタリアートを眠り込ます手傳ひをしてくれることを期待してゐるからであると言つた。コンラツド・シユミツトは彼に特有な優雅な言葉でかう私に答へてゐる、『ブルジョアジーの頭腦に關して如何なる意見を我々が抱かうとも、それは矢張りかゝる愚劣な『期待』を懸けるほどに望みなく愚昧ではないのである。如何なる無際限の圖式主義、一切の批判、現實に對する一切の獨創的なる生きた關係を奪はれた如何なる見解が、かゝる構成方法の背後に隱れてゐることか、etc. etc.』

怒りつぽい博士の言葉を遮つて、彼に二三の質問をなすことを私に許してほしい。

一、ブルジョアジーはプロレタリアートを『道德化し』益々廣汎にこの階級の間に普及しつゝある無神論と鬪爭することに關心を持たされてゐるか?

二、この『道德化』のためと無神論に對するこの鬪爭のための强力なる精神的武器を彼等は必要としてゐるか?

三、カント主義はこの目的のために最も適切な武器と考へられなかつたか、またそれは今日までかかるものとして考へられてゐないか?[1]

註1　ブルジョアジーには直接に勞働者たちにカント主義を提供する必要がないことは自明なことである。それから流出するところの終局的結論を勞働者階級の間に普及する動機を或種の人々に與へる爲めには、この哲學が流行してくれるだけで充分である。

コンラツド・シユミツトは、明かに哲學史に通じてをらない。若しも彼がそれを知つてゐたならば、彼にはカント主義がすでにその出現の當初から、唯物論およびその他の『嫌惡すべき』教義に對する鬪爭のための最善の武器として迎へられたことが知られてゐたであらう。既にカール・レオンガルド・ラインホルド——カント主義の最初の通俗家——は、この體系の主要なる價値の一つは、それが『博物學者をして知識に對する自己の根底なき野望を放棄せしめる』[1]ことにあると考へた。今日『宿命論、唯物論、及びスピノーザ主義の形式の下に』かくも普及してゐるところの根本思想は『惡魔の追放に從事してゐる我々の近代神學もその權利を主張しえぬまでの明確さをもつて、カントによつて、我々の理性を抱擁してゐる妖怪として表象されてゐるのである、若しも今日依然として宿命論者として止まり或は今後かゝるものとして現はれるものがあるとすれば、それは〔純粹理性批判〕を全く研究しなかつたか、さうでなければ全然それを理解しなかつた人々であるであらう。[2]』

註1　《Briefe über die Kantische Philosophie》, Leipzig 1790, I Band, S. 114.

註2　Ibid, S. 116.

絶望的に愚昧である！　否、この場合愚昧であるのは決してブルジョアジーではない。

『若しも私が、間接にゲー・プレハーノフが攻撃してゐる凡ての者達と同様に、ブルジョアジーに倣つてカントの哲學に傾いたとしたら、――とシュミツト氏は言つてゐる、――我々が正に認識論に、すなはち丁度またあらゆる場合においてブルジョアジーの實際的利害と何等共通のものを持たないところの、このカント哲學のその部分に、興味を有つてゐることは驚くべきことであると言はねばならぬ。』

これに對しては私は彼にたつた今私によつて引用されたばかりのラインホルドの言葉をもつて答へるであらう、貴下は『純粋理性批判』を研究しなかつたか、さうでなければそれを理解しなかつたのである。

カントは、彼が自己の認識論をコンラツド・シュミツトがそれを理解してゐるよりもよりよく理解してゐることを期待しなければならないが、『純粋理性批判』の第二版への序文においてかう言つてゐる。『かくて私は、これと共に先驗的理性からそのあまりにも透徹性に對する索引を奪はぬことなくしては、私の理性の實踐的目的にとつて必要なる神、自由、及び不死を假定することさへも出來えないのである……私は、從つて、信仰のために場所を清める意味で知識を止揚しなければならなかつた。』[1]

否、斷然、否。ブルジョアジーは決して魯鈍ではない！

註1　現在カント哲學に興味を感じてゐる人々の間において、この哲學の實踐的『部分』が益〻その理論的部分に對する興味を壓倒しつゝあることを注意しなくてはならない。

尙ほ數言、そして私は終ることにする。

コンラツド・シュミツトは、『哲學の領域において、プレハーノフとは異つて考へてゐる人々の政治的信用を毀損しようとして、觀念の最も出鱈目な組合せをやつてゐるのだ』と言つて、私を批難してゐる。

これは斷然嘘である。

一、凡て上述のことが、私が『やつた』ところの『觀念の組合せ』が、決して『出鱈目』でないことを充分に示してゐる。

二、論爭において私は常に眞理を念頭に置き、全然それ或は他の諸君の政治的信用を氣にしてゐない。コンラツド・シュミツトは私の心の中に讀むところのものを極めて『勝手に』解釋してゐるのである。

三、博士をかくも怒らせた自己の諸論文において、私は『ゲー・プレハーノフの見解』ではなくて、エンゲルス及びマルクスの見解を擁護したのである。ゲー・プレハーノフがこの見解に對する關係において主張しうるところの、また主張しつゝあるところの凡ては、彼の正しい理解に歸着する。私は

この見解を熱烈にかつ確信をもつて擁護するしまた常に擁護するであらう。そして若しも或種の讀者が人間の知識に關する最重要なる問題に關し、そしてそれと共に勞働者階級の最も緊密なる利害に觸れてゐるかゝる論爭において、私が熱烈であるといふことの爲めに『肩をすぼめる』のであつたら、——この階級にとつてはエンゲルスが折衷主義者の貧弱な雜炊と名付けたところのものを排することが極めて有害である故に、——私は、こちらでも肩をすぼめて、言ふであらう、困るのはこれらの讀者である、と。

唯物論再論

ブルードンは何處かで言つてゐる、il faut qu'un professeur parle, parle, parle non pas pour dire quelque chose, mais faur ne pas rester muet（教授は何かを語る爲めにではなく、唯だ默つてゐない爲めに、喋らなくてはならぬ）。コンラツド・シユミツト博士は固くこの規則を遵奉してゐる、尤も、私の知る限りにおいては、彼は教授ではなく、單に私講師に過ぎないのであつたが、それも極めて短かい期間において。《Neue Zeit（ノイエ・ツアイト）》の第二號において彼は Was ist Materialismus?（唯物論とは何か?）と題する覺書の中で——私が既に自己の論文、『唯物論かカント主義か』において解答を與へたところの問題を再び私に提出してゐる。徒に言葉を浪費することを全く欲しないところからして私は最初すでに私によつて斷然たる形において語られたことを繰返すことをしない意向であつた。ところが或る二三の私の親友達が《Neue Zeit（ノイエ・ツアイト）》の編輯局自身が、彼の覺書に對して爲された自己の註解において、シユミツトの終局的意見は『新しい重大な問題』を提起してゐるものであつて、そしてこの意見は、思ふに、或種の讀者が分有つことの出來るものであると言つてゐることに注意を向けた。この點に鑑みて、私は可成りに長い間の動搖の後に、再びコンラツド・シユミツト博士によつて提起された『新しい、重大なる問題』に解答すべく決心したのである。

私の反對者は、私がラメツトリー、ホルバツハ、ディデロー及びエルヴエシュースの如き著者を眞の唯物論者と看做すことが出來るかどうかを自問すべきであつたと言つてゐる。シュミツト博士は彼等をかゝるものとは看做してゐない、彼は彼等を折衷主義者と考へてゐる。これはまことに新しいと言はねばならぬ、何となれば今日まで斷然何人の頭にも、《L'homme machine》(『人間機械』)、《Le Rêve d'Alembert》(『ダランベールの夢』)または、最後に、エフ・アー・ランゲの正當な意見によれば、『屢〻唯物論の法典若しくは聖典と名付けられた。[1]』《Le système de la Nature》(『自然の體系』)を折衷的發生と名付けようなどとは思ひ付かれたことがなかつたからである。

註1 Geschichte des Materialismus, Iserlohn 1873, I, 361.

しかし假令博士のこの見解は『新しい』にしても、それは決して『重要』ではない、何となれば一切の眞面目なる基礎を奪はれてゐるからである。しかも若しも博士がそれを提起してゐるとすれば、それは唯だ極めて困難な立場にあることを感じてゐる原因によるのである。

若しもシュミツト氏が今日、ラメツトリー及びホルバツハは——唯物論者ではないと我々に斷言してゐるとすれば、それは唯だこれらの哲學者の教義が、彼が聞き噛りで作り上げた唯物論の概念にそぐはない故に起つてゐるのである。

私はそれ故、聞き噛りで、彼は、明かに、それに對して彼が自己の驚くべき判決を與へたところの、それらの著者達の著述を考究する骨折りをなさなかつたと言ふのである。

事實に於て、何故にシュミツト氏は十八世紀のフランス唯物論者たちを折衷主義者と考へてゐるのであるか？　何となれば彼等がイギリス哲學一般および特にロツクの影響の下にあつたからである。しかし、第一に、悉くそして直接的にデカルトの教義の唯物論的な部分から出たところのラメツトリーの教義の中には、ロツクの影響は全く認められない。が第二に、ロツクの感覺論はその本質から見てホルバツハ及び『ホルバツハ主義者』によつてそれから爲されたところの、唯物論的結論を排除しないばかりでなく、正にこれらの結論を要求するものである。シュミツト氏はロツクを現象論者と名付けてゐる。何故か？　果して我々を圍繞する物の根元的および第二次的作用に關する彼の有名なる『研究』に基づいてであるか？　しかしこの區別は我々が既に唯物論者デモクリートにおいて見るところであつて、譬へば、有名なギリシヤ哲學の歷史家ツエルラーはシュミツト氏にそれを確證しうるであらう。[1]唯物論者トーマス・ホツブスにあつてはこの區別はすでに極めて重要な役割を演じてゐる、このことは彼の著述『人間の本性について』の第二編第四章、若しくはランゲの《Geschichte des Materialismus》(『唯物論史』)でさへもが明瞭にシュミツトに示すであらう、ランゲは全く正當に、ホツブスの教義によれば、『凡ての所謂感性的特性は、かゝるものとして、物に屬してゐるのではなくして、我々自身の內部に發生するのである』と言つてゐる。成程、ランゲはこの際、『人間の感覺は物

の内的運動と名付けられる、身體的部分の運動以上の何物でもない』といふ、恰も『純粋に唯物論的』なるかに見ゆる思想をホツブスに歸してゐる。これは全く正しくない。ホツブスが既に一六三一年に提起したところの――『如何なる種類の運動によつて生ける存在の感覺および幻想の活動は喚び起されようか?』――といふ根本問題が既に明かに、ホツブスにおいては感覺が運動であるのではなく、運動する物體の内的狀態であるといふことを示してゐる。がこれは丁度また我々がラメツトリー及びホルバツハに見るところと同じものであつて、彼は、序でに言ふなら、上に私によつて述べられたホツブスの人間本性に關する著述をフランス語に飜譯してゐるのである。しかしホツブスも亦『折衷主義者』であるかも知れないと云ふのか? 若しもさうであるならば、果して何人をシユミツト氏は眞實のそして潔白な唯物論者と考へてゐるのであるか、私は非常に知りたいと思ふ。唯だカール・フオグト及び彼の同意見者のみが、また恐らくは尚ほ(それも辛うじて)若干の古代唯物論の代表者達かかるものとして現はれはしないかを私は非常に恐れる。

註1　彼の《Philosophie der Griechen》, Erste Theil, 3 Auflage, S. 705, 註の一を見よ。

兎に角、シユミツト氏の『批判』に附せられたマルクス及びエンゲルスの唯物論が、氏によつて我我に與へられてゐる唯物論の定義に決して當嵌まらないことは疑ひなき所である。

マルクスは『觀念的なるものは人間の頭腦に反映され飜譯された物質的なるもの以外の何物でもない』と言つてゐる。これに基づいてシユミツト氏はマルクスを、人間の精神的本性が唯だ物質的特性によつてのみ、唯だ『物質と力』によつてのみ説明されると考へてゐる人々の列に加へてしまつた。既にこのことが、如何にこの尊敬すべき博士がマルクスを理解しえなかつたかを示すものである。私が譬へばロシヤ語からフランス語へ何かを飜譯する (übersetzte) 場合、この私の行爲は、ブルテールの言語はプーシユキンの言語の特質のみでは説明されえないこと、また一般にプーシユキンの言語がブルテールの言語よりも『より現實的である』ことを意味するだらうか? 斷じて否! それは二つの言語が存在すること、その各々が自己の特殊の構成を有してをり、從つて若しも私がフランス語の文法を無視するなら、私によつて受取られるものは飜譯ではなくして、讀むことも理解することも出來ない唯だもう無意味であるだらうといふことを意味する。若しも、マルクスの言葉に從つて、『觀念的なるものは人間の頭腦における物質的なるものゝ飜譯でありまた變形であるならば』、その同じ意見に從つて――『物質的なるもの』が『觀念的なるもの』と同一でないことは明かである、何となれば、反對の場合には、それを變形することも飜譯することも要せないであらうからである。それ故にこそシユミツトがマルクスに結付けようと企てゝゐる譯の分らぬ同一性は全く無意味なのである。

しかし若しも所與のフランス語の句がそれの飜譯であるロシヤ語の句に似てゐないとしても、このことからしては、まだ第一の句の意味が第二の句の意味と異つてゐなければならないことにはならぬ。

反對に、若しも飜譯がよく爲されてゐるならば、二つの句において、彼等の相違に拘らず、意味は同一であるであらう。

全く同樣に、私の頭腦の中に存在する『觀念的なるもの』はそれからそれが『飜譯された』ところの『物質的なるもの』に似てゐないとは言へ、飜譯が正しく爲された限りは、それは全く同一の意味を有するのである。飜譯の正確性の規準となるのは經驗である。若しも私の頭腦の中に存在する『觀念的なるもの』の、即ち私の頭腦の外にそれから獨立に存在する物の現實的な諸特性に照應しなかつたとしたら、私はこれらの物から彼等との第一の衝突において多かれ少かれの敎訓を受取るであらう、——敎訓、それのお蔭で多かれ少かれ速かに觀念的なるものと物質的なるものとの間の不一致が、言ふまでもなく、若しも私がその以前にこの不一致の犧牲となつて滅亡しないならば、除去されるであらう。この意味において（唯だこの意味においてのみ）觀念的なるものと物質的なるものとの同一性（Identität）について語ることが出來るのでありまた語らねばならぬ、しかしこの同一性に對してはシュミツト的『批判』の武器は全く無力である。

わが doctor irrefragabilis（頑固な博士）は私を折衷主義をもつて責めてゐる。凡て上述のことの故に折衷主義者の數に落ちたことによつて、私が却つてよりよき社會に存することが明かである。それ故シュミツト氏によつて爲されてゐる批難はすこしも私を悲しませない。しかしそれは矢張りこの批難が依據してゐる論證をすこしく立入つて觀察することを妨げないのである。

『何となれば、——と博士は言つてゐる、——若しも原因性の法則の働きが物自體に對する關係によつて眞面目に承認されるならば、その場合には、その中においてのみ原因性が考へられうるところの諸條件、即ち空間、時間、及び物質（若しくは力の中心）も同樣に物自體に關係する諸條件と考へられなくてはならない。が正にこれによつてプレハーノフ的唯物論は再び同一性の哲學の或る古い唯物論に轉化するからである。』

先づ第一に私は次のことを注意して置かう。『唯物論かカント主義か』なる私の論文において、私は、若しも我々に對する（原因性の法則に從つて）物自體の作用を承認しないならば、我々は必然的に主觀的觀念論に到るといふこと、反對に若しも我々がこの作用を承認するならば、我々は同樣に必然的に唯物論に來るといふことを言ひまた證明したのである。コンラツド・シュミツト氏は自分を主觀的觀念論者とも、唯物論者とも認めてゐない。然らば如何にして彼は私の指摘した矛盾から脫出するか？　彼は何事もそれについては語つてゐない、しかし正にかうであるやうに思はれる。彼は我々に對する物自體の作用を承認する、しかしそれを『眞面目に』承認してはゐない。これは——極めて巧妙なる方法である、それはどの程度まで『眞面目に』、學識ある博士の哲學的演習を考へなければならないかを示すものである。

私に關して言へば、私は、云ふまでもなく、全く『眞面目に』我々に對する物自體の、それのお蔭によつて我々が或種の彼等の特性を知りうる、作用を承認する。しかし如何なる『古い』唯物論に私

の承認は私を導くか？　これは不明である、何となれば唯物論一般が――古いのもまた新しいのも――シュミツト氏には不分明であつたからである。

反駁しえざる博士は、我々に對する物自體の作用を承認する以上、私は物質を、物自體の世界への適用において自己の力を保有してゐる條件と思考せねばならないやうに考へてゐる。理解しうべきものをして理解せしめよ、私には解らない、博士自身も解らないのではないかと思ふ。しかし私は、こちらから、簡單に、私においては如何なる概念が物質なる語に結付けられてゐるかを説明しよう。

『精神』に反して、『物質』と名付けられるところのものは、我々の感官に作用して我々の内部にそれ或は他の感覺を喚び起すところのものである。然らば正に何物が我々の感官に作用するのであるか？この問に對して私はカントと共に答へて言ふ、物自體である、と。從つて、物質はこれらの物が我々の感覺の源泉として現はれてゐる限りにおいて、物自體の總括以外の何物でもない。

私は全く『眞面目に』私の意識から獨立な私の外なるシュミツト博士の存在を承認する故に、私は彼を、私の周圍の外界を構成する物自體の數に歸屬せしめざるを得ない。シュミツト博士と名づけられるところの物自體は、私の外的感情に作用する能力を持つてゐる、それは物質である。しかしそれは同樣に哲學に關して愚劣な論文を書く能力を持つてゐる。これは感情し思想しつゝある物體である。かくて意識は（多かれ少かれ高き程度において）、私の内的感情に作用してそしてそれを私が物質と名付けてゐるところの、その實體の一屬性である。この實體『それ自體』が物質についての私の表象に

似てゐないことは、それは既にトーマス・ホツブスも知つてゐた、しかし、このことからは唯物論の如何なる反駁も導き出すことは不可能である。反對に、若しも感覺およびその地盤の上に成長した表象が、それを喚び起したところの、從つてそれ自身は、勿論、感覺でも、表象でもないものに似てゐるとしたら、非常に可笑しなことであらう。存在自體は未だ自己にとつての存在でも、他人にとつての存在でもないことを誰が知らないであらうか？

シュミツト氏はまた、若しも私が『眞面目に』私に對する物自體の作用を承認するならば、私はまた同樣に、時間および空間が、より小ならずまたより大ならざる權利をもつて物自體に對する適用において力を持つてゐるところの條件（多分、彼は――規定と言ひたいであらう？）であることを承認しなくてはならないと言つてゐる。

彼は言ひたいであらう、若しも私が『眞面目』に物自體の存在を認めてゐるならば、私はそれが空間および時間内に存在することを許容しなければならない、と。この點に關して何等かの説明に入る前に、私は讀者が次の一事に留意されんことを希望する。

シュミツト氏にはこの許容が不可能に思はれる故に、彼に殘されたところは唯だ我々の意識から獨立な物の存在を認めないこと、即ちフイヒテ乃至バークレーの見地に立つことである。が我々は既に、如何なる背理にそれが導くかを知つてゐる。

空間および時間が意識の形式であること、それ故に彼等の第一の特殊的な特質は主觀性であること、

それは既にトーマス・ホツブスに知られてゐた、そしてこのことは今日一人の唯物論者も否定せぬであらう。一切の問題は、これらの意識の形式に物の形式若しくは關係が一致してゐるかどうかにある。唯物論者たちは、云ふまでもなく、この問題に對して肯定的より外には答へえない。これは、勿論、彼等が、おせつかいにもシュミツト氏を含めてのカント主義者たちが彼等に結付けてゐる愚劣な（寧ろ、譯の分らぬ）同一性を認めてゐることを意味するものではない。否、物自體の形式および關係についての我々の表象は漢字以上ではない、しかしこれらの漢字は正確にこれらの形式と關係を表徴してゐるのであつて、また我々が我々に對する物自體の作用を研究し、逆に彼等に働きかけることが出來る爲めには、それだけで充分なのである。繰返して言ふが、若しも客觀的關係と我々の頭腦の中における彼等の（『飜譯による』）主觀的な描出との間に正しい一致が存在しなかつたならば、我々の存在そのものが不可能であつたであらう。

これらの考察の正確性の承認は主觀的觀念論の背理と妥協せぬすべての者にとつて義務的である。『すべての者』といふ言葉の下に私が、俗惡なるアカデミツクな習慣の力で、即ち默つてゐない爲めにのみ喋るのではなくして、『眞面目に』哲學しつゝあるすべての者を意味してゐることは說明するまでもなく明かである。

全べて上述のことを注意深く考察する者は、云ふまでもなく、私の見解をヘルバート乃至はロツツエの見解と『眞面目に』比較考量しようなどとは思はぬであらう。しかし私に向つて、『私の』唯物論が譬へばヘルバート・スペンサーの不可知論に酷似してゐることを指摘することは出來る。これに對しては私はエンゲルスの言葉をもつて答へるであらう、イギリスの不可知論は含羞的なる唯物論に過ぎない。

しかし充分である。私の見解はシュミツト氏にとつては分明でない。或は、私が拙劣に叙述してゐるからであらう？　しかし何故に私の反對者は、かゝる程度にまで不成功的にそれを反駁してゐるのであるか？　彼がドイツの俗人どもに固有であるところのもの以外に、他の表象を唯物論に關して持つてゐないからではないか？　私には、さうであるやうに思はれる。が若しもさうであるならば、我々の間に起つた誤解において罪しなければならないのは私ではなくして、學識ある博士コンラツド・シュミツトによつて名付けられてゐるところの、物自體でなくてはならない。

反スツルーウエ論

社會發展に關するマルクス説の批判者の役割におけるペ・スツルーウエ氏

第一論文

一

事物が明白になつた後、すぐと新しい光の下で書物を再び暗黒にし、不明確にせんと努力する幾らかの反對者が常にゐる。私はこの種の反對者および反對意見に屢〻出會はした。

クノウ・フイツシヤー。

これらの諸君が皆マルクス主義をでつち上げてゐる。だが十年前にフランスに起つたと同じ意味において だ。即ちそれについてマルクスは次のやうに言つてゐる、私はマルクス主義者ではない、恐らくこれは、ハイネが自分の模倣者どもに對して、『余は龍の種子を蒔いた、しかるに余の收穫したものは虱であつた』といつたやうな人々に關してであつたのだ。

一八九〇年十月二十七日附——エンゲルスよりペ・ラフアルグへの手紙から。

ペ・スツルーウエ氏は既に以前からマルクスの『批判』の演習をなしてゐる。しかし最近に至るまで彼の『批判的な』演習は體系的でなかつた。彼は、大部分、或は彼、ペ・スツルーウエ氏が『正統派』にかぶれてをらず、『批判』の標幟の下に立つてゐるといふことの簡單な誇らしげな宣言か、或は斯々の問題において『正統』マルクス派は誤つてゐる、が眞實を『批判的』マルクス主義者たちは語つてゐるといふ題目に關する簡單な覺書に止まつてゐた。しかし、簡單な覺書や簡單な宣言は正に何處に『正統』マルクス主義者の迷妄が根差してゐるか、また正に何によつて、『批判者』諸君の正しさは證明されるかに關して殆どまつたく何事をも說明しなかつた。この點に關しては唯だ憶測を立てることが出來るだけであつた。その中の最も眞らしいのは、マルクス及び彼の『正統』追隨者たちが、ペ・スツルーウエ及び彼の『批判的』同意見者たちの世界觀に明るい光を持込んでゐる謂ゆる批判哲學の恩惠を蒙らなかつた故に迷妄に陷つたのであるといふことであるらしかつた。しかし、この推測は極めて眞らしくはあつたが、讀者はやはりそれを吟味しうる爲めには餘りに少しの材料しか持たなかつた。今やこれらの必要なる材料を我々は自由に處理することが出來るほどに持つてゐる。そしてそれ故に我々はこんどは逆に我々の『批判者』を批判することが出來る。

豫定されてゐる諸論文において我々はペ・スツルーウエ氏によつてブラウンの Archiv（アルヒーフ）に《Die Marxsche Theorie der sozialen Entwickelung》[1]『社會發展に關するマルクスの理論』なる標題で發表された『批判的試み』と、Archiv（アルヒーフ）の同じ輯に收められた有名なるエ・ベルンシュタインの著書

《Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie》『社會主義の前提と社會民主主義の任務』に對する及びそれに劣らず有名なベルンシュタインへのカウーツキイの解答《Bernstein und das Sozialdemokratische Programm》『ベルンシュタインと社會民主黨綱領』に對する彼の批評とを檢討しようと思ふ。この『批判的試み』及びそれに劣らざる『批判的』批評は非常によく我々の著者の方法をもまた思想の樣相をも特徴づけてゐる。

註1 Braun's Archiv XIV Band, 5 und 6 Heft.

ペ・スツルーウエ氏は、彼が自己の試みにおいて念頭に置いてゐるのは全體としての唯物史觀ではなくして、『唯だそれの資本主義から社會主義への發展への特殊的な適用』であると言つてゐる。しかし彼の『批判』が直接には唯だ社會發展のマルクスの理論の一部分にのみ向けられてゐるとしても、事の序でにそれはこの理論一般全體および若干のそれの哲學的前提にさへも觸れてゐるのである。かくてそれは我々の批判者の批判の爲めに全く充分なる材料を提供する。先づスツルーウエ氏に聞かう。

彼の言葉に從へば、マルクスの理論の彼によつて研究されつゝある部分は三つの基礎を有してゐる、

(一) 資本主義社會における生產力の發展に關する教義、換言すれば、『生產の社會化および集中化の

理論、及び資本主義社會に於ける生產的無政府の理論、』(二) 社會の下層階級の狀態の惡化に關する教義、或は『貧困化の理論および大資本家による小資本家の搾取の理論、』最後に、(三) プロレタリアートの革命的役割に關する教義、すなはち『資本主義の發展によつて創造され、この發展の行程において成長するプロレタリアートの革命的使命の理論。』

この最後の理論を說明しつゝ、ペ・スツルーウエ氏はかう附加へてゐる、『プロレタリアートは窮乏化に渡される。しかしそれと同時に階級の能動的鬪爭の方法によつて資本主義的體制を掃蕩しそれを社會主義的體制をもつて交代することを可能ならしめるところの、社會的および政治的成熟に到達する。』

では何をわが批判者はマルクスの理論のこの三つの基礎について考へてゐるか？

マルクスが彼によつて指摘されてゐる傾向の各々の相對的意義を正しく規定したかどうかの問題を觀察することをしないで、ペ・スツルーウエ氏は、これらの傾向が實際十九世紀の前半期の資本主義社會に存在したことを認めてゐる。すなはち貧困化の理論は現實の單なる說明であつた、生產力の發展は眼を驚かすものがあつた、自然發生的な爆發から始まつて共產主義運動に至るプロレタリアトの革命的衝動は、今日の問題となつた。しかし、わが批判者の意見によれば、マルクスは、彼によつて指摘された諸傾向が社會主義へ導くものであると斷定したことによつて、甚だしく誤つたのである。この彼の斷定は何等の現實的な根據も持たず、單なる空想であつた。[1] 社會主義の勝利は國

民大衆の貧困化が爭ふべからざる事實となるまでは全く不可能事となり終つた。勞働者の貧困化は社會主義的轉換を實行することを可能ならしめる所の、この階級の成熟とは兩立しない。それ故事實上の狀態は四十年代において空想に無緣なる社會的樂觀主義のための如何なる場所をも殘さなかつたのである、若しも資本主義が眞に崩壞を豫定されてゐるとしたら、何人もその廢墟の上に社會主義の建物の建設に着手すべき者がないであらう。だから若しもマルクスがそれにも拘らず全く一切の悲觀主義から無關係であつたとしたら、それは正に彼の社會的政治的世界觀の無根據によつて說明される。『集產主義に基礎を置かれた經濟的秩序の歷史的必然性を證明せんとする差迫つた心理的要求が、——とペ・スツルーウエ氏は言つてゐる、——四十年代において社會主義者マルクスをして甚だ不充分なる前提から社會主義を導き出す（deduzieren）ことを餘儀なくしたのである。』[1]

註1　我等の傍點。

註2　Archiv, XIV Band, 5 und 6 Heft. S. 62. 我等の傍點。

その後マルクスは、——ペ・スツルーウエ氏の意見によれば、——資本主義社會に於ける勞働者階級の狀態に對する自己の悲觀的見解を根本的に變更した。しかし矢張り完全にはまた全く意識的にはそれから分離しなかつた。一方、勞働者階級の貧困化と、他方、社會主義への方向における社會の發展との間の絕叫的な矛盾は、彼には氣付かれずに殘存した。『この現實的な矛盾は彼の眼には、自己の解決に向つて突進む辯證法的矛盾であるやうに思はれ、一つの合法的な姿を獲得しさへしたのである。』[1]この不思議なる心理的混迷の結果として、ペ・スツルーウエ氏が、『矛盾の激化による發展についての教義』（durch Steigerung der Widersprüche）に自己の注意を向け、そしてこの教義を注意深い檢討に附することを餘儀なくされてゐるものとして自己を見出したことは驚くに足らない。

註1　同所、六六三—六六四頁。

II

わが批判者は相互敵對の中にある二つの現象を『捉へて』ゐる。すなはちAとB、そして次の如く論じてゐる。

若しも矛盾の增大が實際こゝにその場所を持つとすれば、相互に矛盾する契機の發展は次の如き式によつて表はされる。

定式I、それをペ・スツルーウエ氏は矛盾の定式と名付けてゐる。

A

2A

B

2B

3 A
4 A
5 A
6 A
……
n A

AおよびBなる二現象の各々は同一種類の要素の蓄積（Häufung des Gleichartigen）によつて成長する、これと同時にかつこれによつて彼等の間に存在する矛盾もまた増大する、それは、最後に、強大な現象の弱小なそれに對する勝利によつて除去される。nA が nB を揚棄する。

しかし、——ペ・スツルーウエ氏の意見によれば、——我々は社會的現實の中には全く別の種類の、全く異れる定式によつて表はされる、矛盾が存在することを想像することが出來る。定式II、それを我々は鈍ぶらされた矛盾の定式と名付けることを提言する。

A
2 A
3 A
4 A

B
2 B
3 B
2 B

5 A
6 A

B
0 B

註1 ペ・スツルーウエ氏の原文においては OB とはなつてゐないで、『Kein B』となつてゐる。讀者はそれが——同じことであるのを知つてゐる。

これらの二つの定式によつて表はされる場合の各々において、A および B の間には交互作用が存する。しかし、第一の場合においては A の増大が同様に B の増大をも、即ち、從つて、これらの二現象間の矛盾の激化をも不變に條件づけるのに反して、第二においては——絶えず増大する A の作用が唯だ最初だけ B の係數の増加を惹起し、次いで、或る一定の限界を越えると、既にそれの減少をもたらしてゐる、がそれは指摘された矛盾の弱まりへ導いてゐることを意味する。かくて矛盾は漸次的にこゝでは『鈍ぶり』によつて（durch《Abstumpfung》[1]）解決されてゐる。

註1 Abstumpfung なる語はペ・スツルーウエ氏によつて括弧の中に入れられてゐる。

ペ・スツルーウエ氏は『社會發展は自己の決定的な轉換において專ら第一の定式に從つて行はれ

る』といふ思想を『お伽噺的なるもの』と說明してゐる。しかし何人によつてまた何時この『獨斷』は語られたのであるか？　ペ・スツルーウエ氏においては、恰もそれをすべての『正統』マルクス主義者が信奉してゐるかの如くなつてゐる。これは全く正しくない。我々は、恐らくマルクスの眞面目なる追隨者の中の何人もペ・スツルーウエ氏の『第一の定式』を正しいものと認めることに同意しないであらうと考へる。が任意の定式の正當性を容認しない以上は、勿論、正に（『特殊的に』）この定式に從つて歷史運動が行はれることを主張することも亦不可能である。ペ・スツルーウエ氏は自己の『正統的反對者』に『お伽噺的獨斷』を贈呈することを急ぎ過ぎたと言はねばならぬ。

以下、この論文の最後の一つ手前の章において、我々は詳細にペ・スツルーウエ氏の第一の定式を吟味してそれの誤謬を明かに示すであらう。今は我々は讀者が彼の第二の定式に注意されんことを希望する。

それは A および B の間の交互作用を表現しなければならぬ。しかし交互作用は A の B に對する作用と等しく、B の A に對する反作用をも豫想する。ペ・スツルーウエ氏は、この最後のものが何に含まれてゐるかを語つてゐない、彼は A の B に對する作用を規定することだけで滿足してゐる。我々は定式そのものからと及びそれに附隨せる說明とから、全く或る一定の限界までは A の遞增が B の增大をも條件づけ、その後、この限界を越えては、反對に、B の減少に導くことを知つた。これは何を意味するか？　これは、上述の限界が、それを越える時、A の B に對する作用が

直接的な自己の對立物に轉化するところの點として現はれてゐることを意味する。ペ・スツルーウエ氏の第二の定式はそれ故に、絕えず自然においても、また社會生活においても出遭はれるところの、しかもそれにも拘らず我々の『批判者たち』によつて（『認識論者』の陣營に屬する）、ヘーゲルによつて案出されマルクス及び彼の『正統的』學徒によつて確信された『お伽噺的獨斷』の一つとされてゐるところの、量的變化の質的なるそれへの轉化の惡くない、謂はゞ、代數學的例證として役立つことが出來る。

我々にとつて後ちに極めて重寶であるこの例を銘記されんことを讀者に希つて、我々は先きへ進むことにしよう。

わが批判者は、『矛盾の定式』の觀察はそれを歷史のマルクス主義的說明の根本思想に對置する時に特殊の興味を獲得すると言つてゐる。この對置は多くの原因によつて、就中、ペ・スツルーウエ氏によつて爲された結果、上述の對置が、彼によつて批判されつゝある著者を彼が正しく理解してゐるかどうかを我々に示してゐることによつて、正當である。

この對置はペ・スツルーウエ氏のところでかくも屢々引用され、從つて、恐らく、今や既にすべての者に知られてゐること、思はれるマルクスの《Zur Kritik der politischen Oekonomie》（『經濟學批判』）への序文からの引用をもつて始まつてゐる。『物質的生活の生產方法は一般に社會的、政治的、及び精神的生活の諸過程を條件づける……自己の發展の或る一定の段階において社會の物質的生產諸

力は現存の生産關係と、或は、――法律上の言葉をもつて言へば、――その内部において今日まで彼等を活動せしめて來たところの財産關係と衝突するに至る。生産諸力の發展に相應するところの形態から、これらの關係はこの發展の障礙に轉化する。その時社會革命の時代が來る。經濟的基礎の變動と共に、多かれ少かれ急速に、その上に樹立された巨大なる上部構造の全體が革命される[1]……一つの社會形態も、その内部に包容せる、すべての生産諸力が充分に發展せざる以前に崩壞することなく、また新しい、より高度の生産關係は決して、舊社會の内部にそれらのものゝ實現の物質的諸條件が孵化されざる以前に舊きものゝ場所を占めることはない。』

註1　こゝでペ・スツルーウエ氏は括弧をして、上部構造を構成するのは社會意識の一定の形態に相應する法律および政治上の諸制度であると說明してゐる。

この引用をなした後に、ペ・スツルーウエ氏はそれの解說に從事してゐる。『こゝに明かに表現されてゐるのは、――法律および政治組織の、彼等の實現の正規の形態[1]としての經濟への不斷の適應性(Angepasstsein)[2]の思想である。法律關係の經濟關係への不適合は矛盾である。これによつて法律の經濟への適應は强制される。マルクスにおいては生産諸力の生産關係に對する（財産關係に對する）矛盾が根本的な矛盾として揭げられてゐる。生産關係の生産諸力に對する適應が社會革命の内容をなしてゐる。この記述の全體の中にマルクスには、一方においては、物質的諸力が、他方においては、具體的なる經濟、若しくは、法律關係の抽象的總括以外の何物でもないところの生産關係が、一種の獨立の本質若しくは『物』として現はれてゐる不明瞭さがある。唯だこの不明瞭によつてのみ全體として(en bloc)把握された生産諸力と全體として把握された法律關係との矛盾について又は適應について語ることが出來るのであり、社會革命を、これらの二本質間の衝突（一瞬間繼續しようとも、又は多かれ少かれ持續的な時間であらうとも同じことである）として考へることが出來るのである。社會發展が各種の撞著および適應の持續的な過程として觀察されうることは明かである。マルクスは、思ふに、社會革命の解釋の二つの仕方を、彼等の非共在性に氣付かずして、等しく正しいものと認めてゐたのである。[3] 部分的に、未來の社會的轉換に關して言へば、マルクスはそれを、決定的な事件若しくは本來的に然か名付けられる社會的轉換によつて不可避的に行はれる、法律と經濟との强力なる衝突であると考へてゐた。かくて社會發展に關するマルクスの理論においては一切が經濟と法律との間の關係、若しくは、もし好むならば、矛盾の周圍を回轉してゐるのである。マルクスは經濟を、原因として、また法律を、結果として、觀察してゐた。』

註1　ペ・スツルーウエ氏の傍點。
註2　ペ・スツルーウエ氏の傍點。

註3 Ibid, S. 666-667.

この解說は、我々が見るであらう如く、理論的內容の異常なる豐富をもつて卓れてゐる。[17] 我々はその中において最初次の二點を注意しよう。ペ・スツルーウエ氏の意見によれば、マルクスは、

(一) 進歩しつゝある社會において一方には生産諸力と、他方には財産關係との間に不可避的に發生するところの矛盾を根本的なるものと考へた、

(二) 社會革命を、經濟と法律との强力なる衝突であると思ひ込んだ、その結果として一切が彼の理論においては法律と經濟との間の關係を中心として回轉してゐる。

註1 勿論、豐富にも色々ある。ペ・スツルーウエ氏は、主として逸脫において、豐富であるが、かゝる豐富に對しては羨望することを要しない。(第二版への註)

ペ・スツルーウエ氏のこの意見は正しいか? 換言すれば、彼はマルクスの理論を正當に理解しまた正しく記述したか?

第一の點に關して言へば、それは無條件的に正しい、社會の生産諸力とその財産關係との間の矛盾は常に社會發展のマルクスの理論においては中心的地位が與へられてゐた。これが確證として、より精確には——讀者に向つてマルクスの思想のよりよき說明の爲めに、我々は、ペ・スツルーウエ氏によつて引用された《Zur Kritik der politischen Oekonomie》(『經濟學批判』)への序文の外に、『××××』の中の次の箇所を指摘するであらう。

『我々は、從つて、ブルジョアジーの强大の爲めに基礎となつたところの、生産および交通の手段が、その起源をすでに封建社會に受けたことを見た。生産および交通のこれらの手段の、即ちその中において封建社會の生産および交換が行はれてゐたところの諸條件の發展の或る一定の段階において、農業および工業の封建的組織は、約言すれば、封建的財産關係は現實化された生産諸力に相應せざるものとなつた。これらの關係は生産を容易ならしめずして、それを壓迫した。彼等はそれを縛るところの鐵鎖となつた。彼等を掃蕩することが必要であつた、そして彼等は掃蕩された。これに代つて自由競爭が、それに相應する社會的および政治的構造と共に、ブルジョアジーの經濟的および政治的支配と共に現はれた。』

事態は、ご覽のごとく、全く明瞭である、封建的經濟秩序の沒落とブルジョア的經濟秩序の勝利となつて現はれたところの社會革命がマルクスに現はれ、そして彼によつて、封建社會の內部において孵化されたる生産諸力と、この社會に固有なる財産關係、若しくは——同じことであるが——農業および工業の封建的組織との間の撞著(又は矛盾)として、描出されたのである。が若しも諸君が、彼自身が全心と全思考とをもつてそれに奉仕したところの、そしてそれはブルジョア的經濟秩序の社會

主義的のそれによる變更に導くであらうところの、その社會革命が如何にマルクスに考へられまた如何に描出されたかを分明ならしめることを欲するならば、正に次のペーヂを通讀すべきである。

『その財産關係を有ち、その生産と交換との組織を有てる、さながら魔術によつての如く生産および交通のかゝる强大なる手段を創り出した現代のブルジョア社會、恰も魔術師が彼の呪文によつて呼び出された下界の諸力をもはや制御しえざると同じ狀態にある。最近數十年間の工業および商業の歴史は生産の現代的組織に對する、ブルジョアジーの爲めのまたその支配の爲めの生活の諸條件として現はれてゐるところの、財産關係に對する、生産諸力の謀叛の歴史である……』

『その（ブルジョア社會の——ゲー・ペー）處理の中にある生産諸力はもはやブルジョア的財産關係の保持に助力しない、反對に、彼等はこれらの關係にとつて餘りにも大なるものとなつた、彼等はそれらの中において障礙に出遭つてゐる。ブルジョア的財産關係は彼等によつて創造された富を包藏する爲めには餘りにも狹隘に過ぎるものとなつてゐる。』（同所、八—九頁。）

ブルジョア的財産關係の廢除こそはプロレタリアートの歴史的革命的使命をなすものである。

若しも誰か社會發展のマルクスの理論のこの根本思想を彼の他の著述において跡づけることを欲する者があるならば、我々は彼に『哲學の貧困』と『資本論』[1]の第三卷の第二編四二〇—四二一頁とを指示するであらう。

註 1　我々はロシャ譯が不滿足になされてゐる故に、ドイツ原本を指示することにする。我々によつて示された箇所はロシャ版第三卷の七三三頁を占めてゐる。

かくて、如何なる疑ひもありえない、社會發展に關するマルクスの理論においては一切が社會の生産諸力とその財産關係との間の矛盾の周圍を回轉してゐる。しかし若しもこれが全く明かでありまた全く疑ひないならば、借問するが、果して如何なる基礎に立つてペ・スツルーウエ氏は（上述の、第二の點を見よ）、マルクスは資本主義的生産關係の除去を、經濟と法律と間の强力なる衝突に歸したと主張するのであるか？　果してこの第二の衝突はその意味において第一のものと同一なのであるか？　果して社會の生産諸力とその財産關係との矛盾は、經濟と法律との間の矛盾と全く同樣の意義を持つてゐるのであるか？

我々にとつて『根本的な』重要さを有つてゐるこの問題に答へる爲めには、何よりも先づ如何なる概念がわが批判者において經濟なる語に結付けられてゐるかを明かにすることが必要である。がこのことを爲しうるのは、云ふまでもなく、こゝで檢討されつゝある、彼の『批判的試み』を基礎とする外にはない。

法律の經濟に對する關係についてのシュタムラーの見解を分析しつゝ、ペ・スツルーウエ氏は、就中、次のごとく言つてゐる、『遺憾ながら、經濟（經濟秩序、生産關係）なる概念は全く、我々が個別

的な社會現象において『經濟的』要素として強調するところのものによつては覆ひつくされぬのである。經濟は、譬へば、資本主義的經濟秩序である……[1]』

註1 Ibid., S. 668, 我等の傍點。

五六行くだつて我々は『經濟の中には既に法律が含まれ vice versa（又その逆に）法律の中には經濟が含まれてゐる（in der Wirtschaft ist das Recht und vice versa enthalten）[1]』といふことを宣言してゐる警句に出遭ふ。最後に尚ほ數行を措いて我々は次のやうな議論にぶつ突かる。『私のところにパンがないといふ事情は……私と私の同市民たちとの間に如何なる法律關係をも設定しない……されば異れる社會構成にあつては合目的々な法律的統制が失業の現象を除去するであらうと言はるべきではない。これは唯だ、この經濟現象が與へられた經濟的、若しくは、換言すれば、その全總體において把握されたる法律的秩序に依據することを示すに過ぎない』云々[2]。

註1 Ibid. S. 669, 我等の傍點。
註2 Ibid., S. 669, 670, 我等の傍點。

これらの說明から、經濟なる語がわが批判者にあつては、經濟（譬へば、資本主義的）秩序なる用語、若しくは生產關係なる用語と同一の意味を有つてゐることが解る。しかし我々は既に、生產關係、——若しくは經濟的秩序、若しくは經濟的構造——が法律上の言葉では財產關係と呼ばれてゐることを知つてゐる。このことは、その理論が現在問題になつてゐるマルクス自身も、またこの理論を自己の檢討に附してゐるペ・スツルーウエ氏も指摘してゐる所である[1]。非常に結構である。これを銘記しよう、そして自問しよう、然らば社會發展に關するマルクスの理論は彼の批判者の叙述において如何なる形をとつてゐるか？　この問に對しては唯だ一つの答へだけがあり得る、ペ・スツルーウエ氏の叙述においては、この理論においては一切が與へられた社會の財產關係とその社會の法律との間の矛盾を中心として回轉してゐるといふことになる。がそれは、他の言葉をもつて表現するならば、マルクスに據れば、現代の謂ゆる社會問題の本質は、譬へば、現代のブルジョア的フランスの財產關係とその Code Civil（民法）との間の矛盾の中に在るといふことを意味する。が若しも諸君がこの思想を尚ほ異つて表現することを欲するなら、諸君は尚ほかうも言へるであらう、現代のブルジョア的フランスの財產關係と Code Civil（民法）との間の矛盾を構成するものは《das Fortleitende》（嚮道物）、即ちこの國を進步せしめ、新しい社會秩序にそれを近付けるその矛盾である、と。これは全く論理的にまた不可避的にペ・スツルーウエ氏の言葉から出て來る所であり、そしてそれと共にそれは甚だ驚くべき、口舌につくし難い、簡單に言ふなら——甚だ『お伽噺的な』獨斷であつて、若しもペ・

スツルーウエ氏の『批判的試み』がマルクスの生前に間に合つたとしたら、そして『資本論』の著者がこの信ずべからざる試みの内容に通ずる骨折りをなしたとしたら、彼は呆然として両手を擴げ、エクラーソフの詩篇『審判』の主人公の言葉を多少かへて叫ぶだけであらう。

私は私自身の仕事については、勿論、裁判官ではない、しかし、私の批評家が語つたことの中においては、私は自分の思想を見分けえなかつた。

同様に農夫は驚かされるであらう、

若しも彼がライ麥を蒔いて、

ライ麥でもなく、蕎麥でもなく、穢でもなく、

刺つぽい大麥の——それも半分は腐つた粒が生れたとしたら。

三

註1　より大なる正確さの爲めにかう言ふであらう、即ちマルクスによれば、生産關係の或る一定の部分を構成するのは、法律家が財産關係と名付けるであらうところのものである。以下に我々は何故にこの名稱が生産關係の全體に適用しさざるかを見るであらう。

そして寛大な讀者があつて、我々が會々書き損じた批判者君を責めてゐるなぞとは考へて貰ひたくない。否、斷じて否！　我々の指摘した奇性なる過誤は『試み』の殆ど各ページにおいて繰返されてゐるのであり、それはそれを中心としてペ・スツルーウエ氏によつて考へ付かれた革命的マルクス主義の『批判』の殆ど全内容が『回轉してゐる』ところの、論理的中心なのである。現に、譬へば、我我によつて引用された解説の後數ページを經て、ペ・スツルーウエ氏は斷然かう宣言してゐる、『矛盾を廢除するところの革命が、いづれにしても經濟および法律間の絶えず增大する矛盾に關するマルクスの理論にとつては論理的に必要なのである。』[2] これらの言葉は、ペ・スツルーウエ氏が自己の近付き難い迷妄を『固執してゐる』のみでなく、それを自己の『批判』の基礎に置いてゐることを示すものである、彼は法律と經濟（即ち財産關係、經濟的構造）との間には本質的な革命はあり得ないといふことを指摘することによつてマルクスの思想を反駁しようとしてゐるのである。それに劣らぬ迷妄の『固執』は、わが『批判者』が擊ち破り難い戰勝的なるものと考へてゐる、以下の議論の中にも現はれてゐる。

註1　如何なる意味において我々がこゝで革命的なる形容詞を用ひてゐるかは先きへ行つて說明されるであらう。

註2　Ibid., S. 673.

『マルクスの例から見て、生産關係と呼ばれてゐるところのものは、論理的にまた歴史的にすでに財産關係の法律的統制をその中に包含して居る。既にこの一事によつて、マルクスの見地に止まつて、生産關係と法律的秩序の矛盾的發展について語ることは論理的に言つて不可能である（誰がいつたい、貴下より外に、そんなことを言つてゐるのであるか、おゝ、嚴かなる批判者よ！　マルクスは生産諸力と財産關係との間の矛盾について言つてゐるのではないか。貴下自身、貴下の解說の初めのところで、『これは確かに注目に値する、――成程、『持別な力』ではないにしても――『事情』であると認定した』ではないか。どうして貴下は、貴下がマルクスの理論を『批判』しなければならなくなつた時突如としてそれを忘れてしまつたのであるか？――ゲー・ペー）。しかしそれよりももつと重要なことは、かゝる發展の承認は、斷然かつ無條件的に經濟現象の法律的秩序に對する一切の現實的に理解される反作用を排除することである（どこから經濟現象なるものは現はれたのであるか、ペ・スツルーウエ氏よ？　貴下が語つてゐたのは生產關係、若しくは、換言すれば、經濟についてではないか、そして貴下自身、經濟なる概念に關して、我々が社會現象の中において經濟的要素と名付けてゐるところのものをもつてはそれは覆ひつくされないと正當にも言つてゐるではないか――ゲー・ペー）。何となれば、考へても見よ、愈ゝ益ゝ社會主義的になりゆく生產關係（『批判者』君は再び、Sans crier gare（警戒の叫びを上げずに）生產關係に逆戻りしてゐる、それについての概念は、彼自身の意見に從へば、決して經濟現象なる概念をもつては覆ひつくせぬのである――ゲー・ペー）は、階級鬪爭を作出する、階級鬪爭は――社會改革である、がこの最後のものは社會の資本主義的性質を强めるやうなものである。かくて、益ゝ社會主義的となる生產關係は、益ゝ資本主義的となる法律的秩序を生み出す。法律に對する經濟の反作用は雷に兩者の間に如何なる相互的適應をも生み出さないばかりでなく、益ゝ兩者の間に存在する矛盾を强めることゝなる。[1]』

註1　Ibid, S. 676–677.

『何となれば考へても見よ』なる言葉以下のこの長文句の一部は、明かに、發展の辯證法的法則を承認しつゝある、マルクスの『正統的』追隨者たちの非論理を『特別力をこめて指摘』するが爲めに書かれて居るのである。しかしこゝでわが批判者は再び『正統』マルクス主義者に『全くお伽噺的な獨斷』を塗り付け、そして再び彼の叙述は社會發展に關するマルクスの理論の極めて貴重なる理論的な粒を『半分は腐つた大麥』に變質してゐる。『何となれば考へても見よ』！　マルクス及び彼の『正統的』追隨者たちが資本主義社會の生產諸力とその生產關係との間の今や不斷に增大しつゝある矛盾について語つてゐる時、彼等はこの最後のものにおいてブルジョア的財產關係を意味してゐるのであつて、それは我々によつて上に爲された『××××』からの引用が特に明瞭に示すところであり、ペ・スツルーウエ氏自身またそれを認めてゐる通りである。それ故にこそマルクスも、彼の『正統的』

追隨者たちも曾て、——ペ・スツルーウエ氏がそれを彼等に歸して居る如くに、——ブルジョア社會の生産關係は愈〻益〻社會主義的になりゆくなぞと斷定しようとは夢想だもしなかつたのである。これを敢へて言ふ者は、正にそれによつて、最も新しいパスチアにのみ値するところの資本主義社會に固有なるかつブルジョアジーによつて熱烈に主張されつゝある財產關係は、愈〻益〻社會主義の理想に近付きつゝあるといふ思想を表明するものである。[11]

註1　この及び難い混亂にはマルクス自身の次の言葉を對置することが有益であらう、『一つの社會組織も、それがそれらのものに充分なる發展の餘地を供してゐるところの、すべての生產諸力が發展し切らざる以前に消滅することなく、また新しい、より高度の生產關係は決して舊社會の內部に彼等の實現の物質的諸條件が孵化されざる以前に、舊きものゝ場所を占めることはない。』(Zur Kritik etc., Vorwort, 我等の傍點。)

ペ・スツルーウエ氏は『歷史に對する一元論的見解の發展の問題に關して』なる著書を、正統マルクス主義の哲學的歷史的基礎の最良の記述であるとみとめてゐる。その彼の言葉によれば、我々の書かれてゐる。讀者自身これらの書物を再讀するの骨折をなし、そして自から、それらの中に少しでも、わが不思議なる『批判者』が『正統的』マルクス學徒に歸してゐるところのものに相似たるものがあるかどうかを決定されたい！

すべてこのことから、ペ・スツルーウエ氏の『批判的』遠征において彼の爲めに作戰の基礎となつてゐるものは巨大なる、眞に信ずべからざる、マルクスに對する無理解である、といふ不可避的な結論が出て來る。光榮ある遠征よ！　深遠なる『批判』よ！　興味ある『批判者』よ！

ペ・スツルーウエ氏の文學的名聲は、多くの騷ぎを惹き起した彼の著書、『ロシヤの經濟的發展の問題に關する批判的覺え書』が世に現はれた、一八九四年の秋から始まつてゐる。この重苦しい言葉で書かれた、しかも所々幼稚な、しかし全體としては兎に角剴切な書物の中では、

まるで二人の姉妹のやうに、抱き合つて、

二つの理論が、美妙に縺れ合ひながら、同時に現はれてゐた、第一には、マルクス及び『正統』マルクス主義者の理論、が第二には、ブレンタノ及びその一派の理論。そしてこの混淆された、折衷的な書物の內容は著しい程度において、或種の『正統』マルクス主義者の側から本書の著者に注がれた批難をも、同樣にまた他の、それに劣らざる『正統的』マルクス追隨者たちによつて彼に懸けられた期待をも正當化した、批難者達をブレンタノ主義が憤激させた、がペ・スツルーウエ氏に期待を懸けた

人々は、このブルジョア理論が彼の見解においてその中に存在したマルクス主義の要素によつて次第に克服されるであらうことを希望した。これらの行句の筆者は期待をもつた人々の數に屬した。彼の期待は、成程、非常に大なるものではなかつた、彼は決してペ・スツルーウエ氏をもつて、著しい理論的寄與をもつてマルクスの理論を豐富ならしめうる人とは考へなかつた。しかし彼は矢張り、第一には、ペ・スツルーウエ氏のブレンタノ主義が彼のマルクス主義によつて速かに克服されるであらうことを、また第二には、『批判的覺え書』の著者が『資本論』の著者を正當に理解しうるであらうことを希望してゐた。今日我々がそのいづれの場合においても誤つてゐたことは明かである、マルクス主義はすでに、ペ・スツルーウエ氏の見解においては、自己の地位を自己の舊い隣人なる——ブレンタノ主義に讓つてゐる、のみならず、わが『批判者』は史的唯物論の最も根本的なる、最も重要なる命題に對する完全な無理解を曝露した。この最後の意味においては彼は極めて遠く後がへりをしたのであつた、それは、勿論、同じブレンタノ主義の影響によつて說明される。すべてこのことの爲めに、我々に殘つて居ることは唯だ自己の誤謬を公然と認めることであり、自己を正當化する爲めに、當てユーリピデスが言へる如く、『神々は期待に反して多くをなす、我等の期待せしもの彼等によりて行はれず、されど他の側より之を見れば、彼等は豫期せざるものを實現するの手段を見出す、』と言へばそれでいゝのだ。

四

我々は見た、我々はペ・スツルーウエ氏が經濟なる語を使用してゐるその意味に關して誤解をなすことは出來なかつた、何となれば彼自身がこの意味を精確に規定しようと努力したが故である。しかし、それにも拘らず、我々が不當に彼を理解したと假定しよう、そして上揭の語によつてわが批判者は或る（『譬へば、資本主義的』）經濟秩序ではなくして、所與の社會に固有なる、生産（財産）關係ではなくして、その概念が、彼自身の正しい意見によれば、決して經濟なる概念によつて覆ひつくせぬ、社會現象における正にその經濟的要素を意味してゐるのだと假定しよう。どこへかゝる假定は我々を引張つて行くか？[1]

註1　我々はこの假定をペ・スツルーウエ氏の次のやうな言葉を基礎として爲すのである、『しかしいづれにしても、マルクスの理論にとつて、經濟現象と法の規範との間の矛盾の激化の採用は特徴的である！』(Ibid., p. 671 III)。こゝでマルクスの理論の中心點として現はれてゐるのは從つて『法律的規範』とその概念が經濟なる概念をもつては覆ひつくせぬ『經濟現象』との間の矛盾である。

一度それを承認した以上は、我々は自然、社會發展に關するマルクスの理論においては一切が經濟と法律との間の矛盾を中心として回轉してゐるといふペ・スツルーウエ氏の言葉の別の解釋をも採用

しなくてはならない、我々は今や、この理論の基礎として、彼が、與へられた社會において場所を持つところの經濟現象とこの社會に固有なる法律との間の矛盾（關係）についての教義を考へてゐることを容認する義務がある。この矛盾はまた今や、マルクスの理論においてその周圍を『一切が回轉しつつある』ところの、中心と認められなくてはならない。

資本主義社會をとつてそして、如何なる程度においてまた如何なる條件の下においてその中において行はれる經濟現象と彼の法律との間の矛盾が、彼の發展を推進するところの原因として現はれうるかを見よう。

我々の資本主義社會に株式會社創設の謂ゆる許可制度なるものが存在すると假定しよう。周知の如く、この制度は株式會社の、從つてまた、今日個人に所屬してゐる資本を結合することを極めて必要とする大規模生產の發展を壓迫する多くの不便をもつてゐる。それ故に我々の社會には早かれ晩かれ經濟現象——株式會社の發展を必要とする大規模生產の發達——と法律——これらの會社の設立を統制する不便なる立法との間に矛盾が起こる。かゝる矛盾は唯だ一つの方法、即ち許可制度の廢止とそれを遙かに便利なる所謂申告制度に變更するの方法によつてのみ除去されうる。そして、勿論、申告制度は、——正に遙かに便利なるものとして、——早かれ晩かれ立法者によつて採用されるであらう。法律的規範の經濟現象への順應はこゝでは、言はゞ、ひとりでに、發生するであらう、そして社會生活の發展が唯だこの種の矛盾を提出してゐる場合、社會革命について論じうる爲めには、フランス語の表現を藉りて言ふなら、fou à lier（狂人）であることが必要である。

しかしこの種の矛盾は如何なる特徴を有するか？　ブルジョア法律に矛盾する經濟現象が、すこしも、然しながら、この法律の經濟的基礎には、即ち、資本主義社會の財產關係には矛盾しないといふことである。

では訊くが、マルクス自身若しくは彼の『正統的』追隨者達の誰かゞ曾て、社會構成の根本的變革はこの種の矛盾によつて喚び起されると言つたか？　否、そんなことはマルクスも、彼の學徒も言はなかつた。マルクスに據れば（我々は既に幾度かそれを指摘した、しかし再びそれを繰返さゞるをえない）、社會革命は社會の生產諸力およびその基礎の上にこの社會に固有なる法律が維持されるところの彼の財產關係との間の矛盾によつて準備されそして不可避的なるものとなる。この矛盾は全然他の（遙かに危險なる）種類に屬する、この矛盾の出現と共に根本的なる社會改造の時代は始まる。これを不確實なるそしてそれ故に無內容なる、經濟現象と法律制度との間の矛盾に關する、また法律の經濟への順應に關する饒舌の中に沈沒させることではなくして、最後の程度まで唱くすることを意味する。そして一瞬間にもせよ、問題を混亂させ唱くすることがさながら歷史理論としてのマルクス主義の基礎に橫はつてゐる『現實的な』思想の前進運動と同じであるかの如く想像する爲めには、眞にペ・スツルーウエ氏の『全體として把握された』《Kritischer Geist》（『批判的精神』）が必要である。これは前進運動でないばかりでなく、思想の運動（故人のア・エス・ホミヤコ

フが言へる如く）でさへなく、唯だもう滅茶苦茶なそして無内容な、がそれ故に全く無効果のそして無益の、空なる理論的空騒ぎに過ぎない。かゝる空騒ぎはクーノー・フイツシヤーが我々によつて題銘に掲げられた言葉をもつて語つてゐるところの人々には最大の快樂を與へるかも知れない、しかし科學にとつてはそれに無いよりも悪い、それは——大なる退歩、否定的なる現象である。

所與の社會に固有な法律が、その經濟的構造（財産關係）の基礎の上に發達すること、このことは斷然マルクス自身が語つてゐるところである。[1] そしてこのことは最も爭ふべからざる例證の全系列をもつて斷定することが出來る。誰が今や、野蠻なる狩獵種族の財産關係は悉く共産主義によつて滲みこまされてをり、そしてこれらの共産主義的關係の基礎の上にそれに相應する習慣法が發達してゐることを知らないであらうか？ 封建的財産關係の地盤の上に（「農業および産業の封建的組織」の基礎の上に）自己の營養をこの地盤から受取りそれと共に消滅したところの、法律制度の全體系が發達したことが誰に知られてゐないか？ 現代のブルジョア法律、譬へば、既に上に述べられたCode Civil（民法）がブルジョア財産關係の地盤の上に成長したことを誰が聞かなかつたか？ ベ・スツルーウエ氏自身、マルクスを解說しつゝ（上の一五五頁への註を見よ）、所與の經濟的構造、若しくは所與の財産關係の基礎の上に發生する法律的および政治的構造を上部構造と呼んでゐる。そしてその同じベ・スツルーウエ氏自身が、社會發展に關するマルクスの理論によつて指摘されてゐる根本的矛盾として現はれるのは、社會の生産諸力とその財産關係との間の矛盾であることを承認したのである。何故に彼は早速この根本的矛盾を忘れて、そしてそれを、所與の經濟的構造の内部において行はれつゝある經濟現象と、それに對してこの構造が、マルクスの表現に從へば、現實的な土臺として役立つてゐる、法律との間の二次的な矛盾をもつて掏替へてゐるのであるか？ 何によつて彼はかゝる掏替を辯護することが出來るか？

註1 これらの生産關係の總體は社會の經濟的構造をなす、それはその上に法律的および政治的上部構造がよつて以て立つところの現實的の土臺である』（Zur Kritik etc., Vorwort; 我等の傍點）。

『××××××』が ブルジョア社會の生産諸力が彼に固有なる財産關係、若しくは彼の經濟的構造を凌駕したといふ思想の最も顯著なる證明として役立つ現象として指摘してゐる恐慌を取つて見よ、そして讀者よ、この經濟現象はブルジョア的財産關係の地盤の上に發生した法律に、譬へば、一八〇四年のフランスの法典にでも、矛盾してゐるかどうか？ 幼稚なるまた滑稽なる質問である！ 恐慌がブルジョア社會の民法に矛盾することがないのは、爲替相場が——彼の刑法に矛盾することがないのと同樣である。Code Civil（民法）に矛盾するのは恐慌ではなくして、生産諸力がこの法典の基礎に横はつてゐる經濟的構造（『財産關係』）に矛盾するのである。しかし何を果してこれらの言葉は意味するか、ブルジョア社會の生産諸力が彼の經濟的構造に、彼の財産關係に矛盾するといふことは？

彼等は、これらの關係が全容積におけるこれらの諸力の適用を妨害してゐること、及びこれらの諸力が廣汎な適用を受ける時には、彼等は國民經濟の正常なる行程を破壞すること、を意味する。そこで、社會の生產諸力が發展すればするほど、彼等の完全なる適用が彼にとつて益〻危險となる、といふことになる。しかもこの矛盾は、ブルジョア財產關係が存在を續けてゐる限りは、除去され得ない。[1] これが除去の爲めには社會革命がなければならぬ、それがブルジョア財產關係を破壞して、彼等を全く別の性質を有する社會主義的なるものに變更するのである。かゝる意味をマルクス及びエンゲルスの指示は有つてゐるのである。例證として彼等によつて引用されてゐる經濟現象は、それらの中にブルジョア社會の經濟生活が閉ぢ込められ、またそれらがブルジョア法律の基底に橫はつたところの、それらの枠（それらの財產關係）の狹隘を示してゐる。が彼等の『批判者』は丁度また彼が社會革命の根本原因と思惟した所の矛盾そのものを沈默をもつて通り過ぎ（精確には、一度それを述べた後、全く忘れ果て）、そして無邪氣にもその後で、マルクスの本來的理論は、正しく理解される時、社會革命の爲めに場所を殘さずして、『經濟に對する法律の不斷の順應を、彼等の實現の正規的な形態として』前提してゐるものであると言つてゐるのである。かゝる批判を見てはどうしてもクルイロフの言葉を思出さずにはゐられない、お前は象がわからなかつたのだ。

註1　こゝで但書きをして置くことが有益である！　最近に多くの『批判者』諸君が（ツガン・バラノーフスキー氏をも含めて）、恐慌は今や、彼等が以前に有した如き尖銳な形態を失つたといふこと、そしてそれ故にそれはもはや今日においては社會生活の發展において、相當の根據をもつてマルクスによつて彼等に歸せられたところのその役割を演じてゐないことを指摘した。これに對しては我々はかう答へるであらう。マルクスによつて指摘された現象の形態が今日如何なるものであるにもせよ、その本質は不變に殘つたのである。この現象は社會の生產諸力と彼の財產關係との間の矛盾によつて惹き起される。イギリス人の謂ゆる不景氣はその形態よりすればこの言葉の本來的の意味における恐慌には非常に似てゐない、しかし本質的には彼等は全く同一の意義を有してゐるのである。これを確信するには、譬へば、商工業における停滯の原因の研究の爲めに設けられたイギリスの王立委員會が到達した結論をなりとも知れば充分である。『過去四十年間を通じて、——と我々はこの委員會の、その意見においてその多數と對立したところの、或る委員によつて作成された覺書きの中において讀む、過去四十年間を通じて、貨物の生產並びに運送に機械學的及び科學的手段が全世界に亙つて適用されるに至りしため、すべての文明社會の事情は重大なる變化を受けた……大いなる困難は最早過去におけるが如く生活の必需品及び利便の僅少と缺乏にあるのではなく、如何にこれらの必需品と利便が多く且つ廉價であらうとも、人口の大多數にとりてそれらを充分に獲得することの唯一の道を與へるところの雇傭の充分なる配分のための鬪爭にあるのである……增大するところの困難（貨物が豐富に存し且つ廉價なるのに當面しての職業の充分なる配分のための鬪爭）は、その表現を關稅制度、輸出制限、及びその他の、我が國以外の國々によつて採用され、維持されてゐるところの貿易上の制限の中に見出す。』(Final Report of the Royal commission, etc., p. LV; 同樣に p. LXIV を參照せよ)。文明社會の生產諸力は今や、自己の勞働力以外に他の商品

を持たざる人々にとつて自己の職業を見出すことが、即ちこの力を與つてそれによつて今や豐富に作出されつつある安價なる生産物の購買の爲めの手段を獲得することが非常に困難になつて來てゐる程に發展してゐる。困難は過剰によつて、貧困は――富によつて生み出される。これは正にマルクス及びエンゲルスが、恐慌について語りながら、指摘したところのその矛盾である。相違は唯だ、我々によつて引用された覺書きの作成者たちの意見に從へば、この矛盾は最近四〇年間に發生したものであり、『宣言』の著者達の意見に從へば――それ以前であるといふことに在るのみである。そして王立委員會の多數はこの矛盾の存在を否認してゐると考へてはならぬ。否、多數派もまたこの問題に對して少數派と同一の見解を表明してゐる、唯それが異つて表現されてゐるのみである。『世界の生產能力は、――と彼等は言つてゐる、――自然的に世界の必要以上であらう』L. C. p. XVII-IV-a) これは全く trade depressions (不景氣) は、恐慌が惹き起されと同樣に、市場の消費能力と現代の生產諸力との間の不適合によつて惹き起されるといふ思想と同じものである。しかし市場の消費能力は正に現代社會の財產關係によつて制約される。すなはち、我々は又してもこの社會の根本的矛盾に、――一方においては、彼の財產關係と、他方においては、彼の生產諸力との間の矛盾に當面するのである。

五

結果は、ペ・スツルーウエ氏の法律と經濟との間に存する、彼の言葉によれば、社會發展に關するマルクス說の理論的中心をなすところの、矛盾についての言葉を、我々が二つの可能なる意味のいづれに解しようとも、我々は依然として、彼がこの理論を全く誤つて理解してゐるかさうでなければ全然不當に叙述してゐることを認めなければならないといふことである。しかし彼の誤謬は、我々が再び、こゝには何等かの誤解があるのではないかと自問するほどに、しかく粗雜なまたしかく偶然的なものであるか？ そしてペ・スツルーウエ氏は、科學的社會主義の創始者達自身によつて不當に理解され又は不當に適用されてゐる、マルクス若しくはエンゲルスのどんなかの表現によつて、誤謬に引入れられたのではないか？

讀者諸君、一緒に探すことにしよう。諸君は、多分、エンゲルスの有名な小冊子、『科學的社會主義の發展』において、現代的な生產の仕方の根本的矛盾について語られてある箇所を記憶してゐる。以前、中世紀においては生產者はまた勞働要具の所有者であつた、そして僅少の例外を除き、自分自身の勞働の生產物のみを我が物とした、現在においては勞働要具の所有者たる資本家が、工場において彼の勞働者の結合されたる、社會的勞働によつて生產されつゝある生產物を自己の私有財產として領有することを續けてゐる。『生產手段および生產物は本質上社會的なるものとなつた、しかし彼等は各人が自分自身の生產物を領有し自からそれを市場に擔ぎ出した時代に固有なる私的、單一的生產に基礎を置かれた領有の形式に從屬させられた。』玆に生產の仕方と領有の仕方との間の矛盾が由來する、『生產の新形態は領有の舊形態に從屬させられた、その基礎が完全に破壞し去られたにかゝはらず。』そしてこの根本的矛盾が現代社會の一切の矛盾の胚種を內包してゐるのである。

言葉に捉はれてそれによつて意味されてゐる内容にまで浸透しえない『批判的』頭腦には、恐らく、こゝでエンゲルスによつて指示されてゐる矛盾は、ペ・スツルーウエ氏が講釋をしてゐる經濟と法律間のその矛盾に外ならぬやうに思はれるかも知れない。しかしどの程度までこれが誤りであるかを理解するには、最も少量の努力で事足りる。

個人的生産に對立する社會的生産について語りながら、エンゲルスは、その中においては勞働者達の勞働が整然たる一つの全體に結合されてゐるところの、現代的機械職場を念頭に置いてゐるのである。しかし現代の機械職場においては勞働組織は技術の現在の狀態によつて規定され、從つてその生産物がそれ故に社會的勞働の成果として現はれてゐるところの、從つてそれ自から特徴づけるところのものは生産諸力の狀態であつて、決して現代（資本主義）社會の經濟的秩序ではない、最後のものは何よりも先づ、かつ主として彼に固有なる財產關係によつて、即ち、從つてまた、機械職場の所屬がその中に結合された勞働者達にではなく、これらの勞働者を搾取しつゝある資本家にあることによつて特徴づけられるものなのである。かくて工場における社會的勞働とこの工場の個人的領有との間の矛盾もまた既に我々によく知られてゐるところの、資本主義社會の生産諸力と彼の財產關係との間の矛盾である。このことはエンゲルス自身によつて極めて美事に解明されてゐる。『工場手工業およびその影響の下に完成された手工業が嘗て同業組合の封建的桎梏と衝突したと全く同樣に、大規模產業は、自己の發展のより高い段階において、資本家的生產の仕方がそれを制限してゐるところの狹隘なる限界と衝突するに至るのである。新しい生產諸力が彼等の搾取のブルジョア的形態を凌駕したのである。』[1]

註1 『科學的社會主義の發展。』ゼネバ、一八九二年、二六頁。

エンゲルスが念頭に置いてゐるのも亦は決して『法律』と『經濟』との間の矛盾でない事は明かである。が我々によつて引用された小冊子『科學的社會主義の發展』以外に、我々は、社會發展に關するマルクスの理論をペ・スツルーウエ氏が解釋した意味に解釋すべき——假令純粹に表面的にもせよ、假令言葉の上だけにもせよ——動機を與へるかも知れないマルクス若しくはエンゲルスの一つの著述をも斷然知らぬのである。

これは我々が、この『批判者』によつてマルクスに結付けられた『法律と經濟との間の』矛盾（『譬へば、資本主義的經濟秩序との間の』を念頭に置いて言つてゐるのである。しかしどうなるか、と我我は言ふであらう、若しもマルクスに結付けられた『矛盾』を他の意味に、——即ちそれらのものゝ概念が『經濟』なる概念をもつては覆ひつくされない經濟現象と、與へられた社會の法律制度との間の矛盾の意味に解さねばならないとしたら？　その時はペ・スツルーウエ氏がフリイドリツヒ・エンゲルスと同じことを言つて居るといふことにならないか？

一見したところではこゝでも、然り——であるやうに思はれるかも知れない、しかしこゝでも少し

く立入つて觀察するならば事態は異つて來るのである。

職場における勞働組織は、疑ひもなく、經濟現象である。しかしこの經濟現象は法律にではなくして、他の經濟現象に、ブルジョア法律の『現實的の土臺』をなすところの、正にそれらのブルジョア社會の財産關係に矛盾するのである。この實現的な土臺をその上に建てられてゐる法律的上部構造』と同一視することは、自から上部構造（法律）と土臺（生産關係）との相違を定立したところの、カール・マルクスのではなくして、他の何人かの理論を叙べることを意味する。我々はマルクスを『批判する』ことが、若しも彼がそれを定立しなかつたとしたら、遙かに容易であつたらうことをよく承知してゐる。[1] しかしどうしろと言ふのか？ マルクスは『批判者達』の便宜のために眞理を歪曲する義務はなかつたではないか！

註1 ペ・スツルーウエ氏にあつてはこの利便の意識が無邪氣にも次のやうな言葉で表現されてゐる。『私の述べた見解は、『社會革命』についてのマルクスの見解をも、シュタムラーの見解をも排除する。法律の社會經濟への順應は一瞬時も中絶せぬ。社會秩序の範圍を變形し擴大するその時々の社會秩序の發展も正にさうである。』(Ibid., S. 672. V). 貴下は正しい、おゝ『批判者』よ！ 若しも貴下の『見解』がマルクスのと一致したのであつたら、もつとよかつたであらう、が若しもマルクスのそれと一致しない貴下の見解が歴史的現實に一致したのであつたら、尚ほ一層よく且つ醜惡であつたであらう。しかし——悲しい哉！——それは一致せずして『矛盾してゐる。』

どんなに問題をひつくり返して見ても、矢張り、ペ・スツルーウエ氏は怖ろしくこんがらかして終つたと云ふこと、從つて彼によつて爲された混亂の——悉く彼自身の上に、かつは又シュタムラーの上に落ちかゝる——罪をすこしでも輕減する、何等かの尤もらしい事情を發見することは非常に困難である、といふよりは——全く不可能であることを認めなくてはならない。

ペ・スツルウエー氏は例によつてこの著者を『批判してゐる』(『批判』なしに彼は濟ますことは出來ないのである)、しかし彼は全く影響から自由になることが出來ないでゐる。

シュタムラー自身について言及することはこゝでは妥當でないであらう。しかし序でをもつて、彼が我が國において、社會的矛盾の『鈍化』に努めつゝあるすべての者の心にかくも愛想よき、所謂批判哲學によつて豫め詭辯化され『鈍くされた』人々の隊列の中から、少からぬ數の『マルクス主義者』を誘惑に引入れたことを注意せざるを得ない。

六

我々はすでに上に、若しも謂ふところの社會問題の本質がブルジョア法律のブルジョア經濟への不順應にあるならば、社會的轉換の歴史的必然性について語りうるのは唯だ狂氣に惱まされてゐる人々のみであるだらうことを述べた。かゝる喜ばしき情勢にあつては事務的ブルジョアジーの世界の法理

學者および物の解つた實際家達は、正に如何なる場所において靴が、——ドイツ人の表現を藉りるなら、——足を喰ふかを容易に發見しうるであらうし、ブルジョアの紳士諸君は、彼等の議會の代表者達が早速靴に新しい形態を與へるやうに、唯だ腹立たしげに喚き、威嚇するやうに顏を蹙めるだけでよいであらう。しかし、この場合自然的發展は我々が鈍らされた矛盾の定式と名付けたところの、ペ・スツルーウエ氏の第二の定式に從つて進むであらうか？

上に我々は例として株式會社に關する立法を採つた。こんども我々は便宜の爲めに同じ例を採るであらう。讀者諸君、如何なる關係が株式會社の增加を要求しつゝある社會生活と、かゝる增加を壓迫しつゝある許可制度との間に設定されるか？　彼等の間には、許可制度が消滅して、申告制度にその場所を讓るに至るまで、不斷に增大するであらうところの矛盾が定立されると我々には思はれる。さうであるか？　疑ひもなくさうである。が若しもさうであるならば、我々はこゝでもヘーゲルの金言、矛盾は前方へ導く、の正當さを確證するところの現象に當面することゝなる。所でこの新しい思辨がこんどはヘーゲルを否認して『矛盾の鈍化』について講釋することを愛する『批判者』諸君の命題の一切の滑稽味をさらけ出させるのである。

ペ・スツルーウエ氏は、或は、死滅した法律規範と新しい社會的要求との間の矛盾の尖銳化は未だ舊い規範の擁護者とその反對者との間の鬪爭の尖銳化を保證するものではないと我々に言ふかも知れない。これは正しいであらう。我々もまた喜んで、上に觀察された如き種類の著しからぬ場合においては、上述の矛盾の激化が時には社會的鬪爭の減退をもつてすら伴はれうることを容認するものである。尤もこれは尙ほ證明を要するところの、單に我々がペ・スツルーウエ氏に對する好意から採用するに過ぎない假定以上でないことを注意せねばならないが。しかしこのことは、株式會社に關する立法の如き些細なることではなくして、法律の根本的基礎、すなはち經濟的構造、財產關係に觸れる偉大なる社會的轉換が問題になつてゐる場合にも、さうであると言ひうるだらうか？　この問に對しては彩色されざる歷史的現實が決定的な否定をもつて答へる。我々は支那においてその長い、今日においてもまだ終結してゐない、しかし我々は、進步的社會においては新しい社會的要求と舊社會構成との間の矛盾の增大が通常更新者と保守主義者との間の鬪爭の尖銳化をもつて伴はれることを確かに知つてゐる。正にかゝる（『前進』しつゝある）社會に、エーリングが自己の有名な小冊子において法律のための鬪爭に關して語つてゐるところのものは悉く當嵌まるのである。『一切の法律は鬪爭によつて獲得される、各々の重要なる法令はそれに反對せる人々のところから捥ぎ取られなくてはならない……』『現存法律と共に次第に數千人乃至全階級の利益が增大し、遂に致命的な損害をそれに與へずしてはそれを廢除することが不可能となる。與へられた法規若しくは與へられた制度の廢除に關する問題を提起することは——すべてこれらの利益に對して宣戰を布告することを意味する。各々の類似の企圖は自然的に、それ故に、自己保存の本能の作用によつて、利益を冒された者の側からの强力なる抵抗

を、また正にそれによつて闘爭をも喚び起す……この闘爭は、利益が獲得された法の形において確保される時、最高の緊張度に達する……法律の歴史が指示しうる限りの凡ての偉大なる獲得、奴隷制度の廢止、土地所有の自由、職業の自由、良心の自由、等々、すべて彼等は、屢々全數世紀の長きに亙つて行はれた殘酷なる闘爭の結果として爲されたのであり、法律が自己の發展において經過した道程は、屢々血の河をもつて溢らされ到る所破壞された法律制度の碎片をもつてふり撒かれてゐるのである。[1]」

註1 《Der Kampf ums Recht》, 13 Auflage, S. S. 6, 7 及び 8.

若しも社會發展のかゝる行程が矛盾の鈍化による發展と呼ばれるならば、我々は、本當に、最早その激化を何と呼ぶべきかを知らぬのである。

自己の第二の定式を說明し辯護する爲めにペ・スツルーウェ氏は二つの例を引いてゐる、それらは二つとも、しかし、最も決定的な方法で彼に『矛盾してゐる』やうな、彼にとつては甚だ不都合なる特質を有つてゐるものなのである。

第一の例。『產業の發展の結果として實際的・經濟的 (praktisch-wirtschaftliche) 勞働運動が發生すると假定しよう。罷業および團結を禁ずる法律が發布され若しくはより嚴酷なものとなる。抑壓が大となり、それと共に對立物もまた大となる。しかしその後の自己の發展において勞働運動は抑壓を凌駕する、それの武器が鈍くなる、そして結局において勞働運動に向けられた法律が廢止される。この場合我々は、矛盾が最初は增大し、次ぎには弱まり、そして結局において二つの中の一つが勝利を占めるところの場合を持つのである。[1]」

註1 《Archiv》, XIV B, 5 und 6 Heft, S. 675.

一對をなすもの、中の一つが『勝利する』時、その時矛盾は增大しないばかりでなく、全く止揚される。これは自明である。一切の問題は闘爭しつゝある兩側の中の一つによる勝利に直接的に先行する時期において、矛盾が弱まるかそれとも、反對に、增大するかにある。がこの問題に對してペ・スツルーウェ氏自身は否定的に答へてゐる、彼自身の例に於て『矛盾若しくは抵抗』は、抑壓が無力にならない間、卽ち勞働者が勝利しない間に、增大してゐる。成程、彼の例においては法律の廢止には『抑壓の武器が鈍ぶる』時期が先行してゐる。しかしこの時期の存在は單なる假定である。ペ・スツルーウェ氏は、この假定は完全に歷史的現實に一致すると言ふのであらうか？ 若しも彼がさう言ふならば我々は彼に、正に勞働者達の團結に對して向けられた法律の歷史こそは、彼の假定に反對して語つてゐると答へるであらう。事實において、果して、譬へば、イギリスにおいて、——この古典的なる妥協

の國において、――團結に反對する法律の廢止はより嚴酷ならぬそれの適用によつて先行されたか？斷じて否！　その廢止前においては事態は全く異なれるものがあつた。ホールウエルの言葉によれば、これらの法律に對する不滿は、新しい抑壓方法を喚起しつゝ不斷に成長した、そして本來的な意味における團結に對して向けられた立法が、勞働運動の成長的な流れを堰止める爲めに餘りにも脆弱な遮蔽物であることが解つた時、政府は內亂罪等を處罰する法律、Sedition acts の如きに向ふことによつて、自己の武器を尖銳にすべく努力した。一方、勞働者達は益々激昂した、そして遂に、彼等の動搖と彼等の間から出た暗殺者達とは政府を强要して憎むべき法律を廢止せしめた。[1]

註1　Le passé et l'avenir des Trade-Unions par Georges Howell, traduction par Ch. Le Cour Grandmaison. Paris, 1892, p.p. 40 et 45.

全く同じことを我々はウエッブ夫妻からと及びこの場合ウエッブ夫妻の語つてゐるところを繰り返してゐるに過ぎないクーレマンとから知るのである。[1]

註1　ウエッブ夫妻、『慣習法及び古代法は、團結法の補助として屢々その解釋を歪めてさへも容赦なく適用された。とりわけスコットランドの裁判官は……スコットランドの刑事訴訟法を單純な團結に適用した。攝政時代の施設を特徴づけた抑壓の全制度は、この時代において、『神聖同盟』に加はつてゐる如何なる君主にも劣らない暴政にまで達したのである。』(History of Trade Unionism, London 1894, p.p. 84-85)。クーレマン、『一八一五年の平和後、價格の下落にともなつてなされた賃銀の並はずれた低下によつて勞働者の狀態は益々困難になつた。それ故、到る處で祕密團體が作られ、血なまぐさき迫害に終つた所の陰謀が行はれたといふことは了解出來る。』(Die Gewerkschaftsbewegung, Jena 1900, B. 3-5)。何とも言ふべき言葉がない、注目すべき『鈍ぶり』であることよ！

わが『批判者』によつて引かれてゐる第二の例は第一のものよりももつと不確かである。この例においては我々は有名なドイツの『一八七八年の特別法』に當面する。ペ・スツルーウエ氏は、この法律が、勞働運動の成長に從つて、益々弱く適用され、遂に、全く廢止されるに至つたことを指摘してゐる。『これは何であるか、抵抗の增大であるか、それともまた衰退であるか？』と――わが『批判者』は訊ねてゐる。

この問に對しては我々は、如何なる抵抗 (Wiederstände) について彼は言つてゐるのであるか？といふ問をもつて答へるであらう。若しもそれが一方においては社會民主黨の努力に對する帝國政府の抵抗についてゞあり、また他方においては帝國政府の努力に對する社會民主黨の抵抗についてゞあるとするなら、より嚴酷ならぬ適用、及びそれに次いでの上記の法律の廢止は、勞働者黨も帝國政府も

よくそれを承知してゐるやうに、決してこれらの『抵抗』の弱まりを意味するものではなかつた。特別法のより嚴酷ならざる適用は唯だ、政府がその非合目的性を確信するに至つたこと、そしてその非合目的性は、勞働者黨が特別法の網の目を免れることを會得したことによつて條件づけられたことを意味したに過ぎぬ。非合目的となつたところの特別法は曾に勞働大衆の不滿を弱めなかつたばかりでなく、却つて堪へ難い警察的『取調』によつてこの大衆を激昂させることによつて、それを强めたのである。豫期したのと丁度反對の結果が受取られてゐるのを見て、ドイツ帝國政府はその後の嚴酷な適用およびこの法律の存在をさへも不利益なまた不便なものと考へたのである。それは廢止された。で若しも我々が今日その歴史を想起するならば、それは我々に、非合目的となつた法律が廢止されるのは、決して社會的矛盾が『鈍化された』が故でないことを示すであらう。

否、何と言はうとも、紛飾されざる歴史はペ・スツルーウエ氏の第二の定式の利益のためには惡しき憑據である。しかも、若しも、それにも拘らず、彼が依然として推進的な矛盾に關するヘーゲルの意見の正當性を承認してゐる人々を『批判してゐる』とすれば、彼は、明かに、それに對する眞面目なる原因を有つてゐるのである。如何なるそれは原因であるか？

彼自身これに對して最大の稱讃に値する率直さをもつて答へてゐる。

『私は既に、――と彼は言つてゐる、――若しも社會發展が矛盾の增大の定式に從つて行はれるとすれば、「社會的轉換」は必然的に政治的轉換として表象されなければならない事情を指摘した。しかしプロレタリアートの獨裁に關する有名な教義の基底に横はつてゐるこの表象は、發展の辯證法的行程と共に脫落するのである。』[1]

註1 Ibid., S. 674.

これである！ 一切の問題は、御覽のごとく、政治革命とプロレタリアートの獨裁にあるのである。これを銘記しよう！

プロレタリアートの獨裁に關する及びこの階級の社會的解放のために必要なる『政治革命』に關する有名なる教義の理論的基礎を爆破しようといふ緊急の心理的要求は、批判者ペ・スツルーウエをして、二十世紀の初頭において、『正統』マルクス主義に對する自己の反駁を不充分以上の不充分なる前提に基礎づけることを餘儀なくした。

この差迫つた心理的要求の影響の下にペ・スツルーウエ氏は社會發展に關するマルクスの理論に、それが現實に有してゐる內容では全然ないところのものを歸せしめた、そしてこの『根本的な』過誤は自然的に一列の他の、多かれ少かれ重大な過誤をもたらした。わが『批判者』の頭には彼によつてのマルクスの理論の誤れる理解が理論そのもの、『不明瞭』となつて反映した。譬へば、彼は、我々が見るであらうやうに、この理論においては社會の生產諸力と彼の生產關係とが一種の本質若しくは

『物』として現はれてゐることに、恰も含まれてゐるかに見ゆる不明瞭を見付け出した。かゝる不明瞭のお蔭によつてのみ全ての、十把一からげの、生産諸力の全體としての生産關係への矛盾について語ることが出來るのであり、社會革命をこれらの諸力とこれらの關係との間の衝突として思惟することが出來るのであると『批判者』君は考へてゐる。我々はまたペ・スツルーウエ氏から、マルクスの社會的・政治的世界觀が尙ほ他の不明瞭に惱んでゐることを知つた、すなはち彼は一方において、矛盾の强化によつての社會の發展に對する、今日彼の『正統的』學徒達が擁護しつゝあるところの、その見解を奉じてゐた、が他方において——この發展に對し、その周圍を今日ペ・スツルーウエ氏の『社會』政策が『回轉してゐる』ところの、そしてそれは鈍らされた矛盾の定式をもつて表現されてゐるところの、その見解にも傾いた、そしてこの際『資本論』の著者はかゝる見解の非共在性に氣付かなかつた。

第一の『不明瞭』を研究して見よう。

現代の機械職業、即ち工場においては、そこで勞働してゐるプロレタリアの勞働は社會的勞働の性質を帶び、それに反して工場そのものは個人若しくは個々人に屬してゐる。工場における勞働組織は社會的生產關係及び正に現代社會の財產關係に矛盾してゐる。しかし工場そのものは如何なるものであるか？ それが完成されたる勞働要具の總括である以上、それは我々が社會的生產諸力と呼ぶところのものゝ一構成要素である。が完成されたる勞働要具の總括が或る一定のそれの組織を、即ち或る一定の生產者間の關係を條件づける限り、工場は社會的生產關係である。[1] そして若しもこの關係が資本主義社會の財產關係に矛盾し始めるならば、若しも工場が資本と折合ふことを止めるならば、それは、社會的生產關係の或る部分が他の部分に相應しなくなることを意味するものであり、從つて『社會の生產諸力が彼の財產關係に矛盾する』といふ句は正に、上述の諸力および上述の關係を何等か獨立の本質として表象する一切の可能を排除することの進化的な意味に理解されねばならぬことを意味する。その結果は確かに生產諸力の『全體として把握された』生產關係への矛盾について語ることは不可能となる。しかし、わが『批判者』以外に、誰がこれについて語つてゐるか？ いづれにしても、カール・マルクスでもなければ、フリイドリツヒ・エンゲルスでもない。[2]

註1 『機械は犁を挽く牛と同樣に經濟的範疇をなすものでない。これは生產力であつて、それ以上ではない。機械の使用に基礎を置かれた現代の工場は、社會的生產關係、經濟的範疇である』(『哲學の貧困』一〇七頁)。

註2 こゝでは、しかしながら、上述されたばかりの著者達の用語の次のごとき特殊性に讀者の注意を促すことが必要である。彼等が社會發展を推し進める基礎的な矛盾を問題にしてゐる場合には、生產關係なる言葉は彼等にとつてより狹義の財產關係の意味に用ひられてゐるのである。例へば、我々によつて前述の意見の一つにおいて引用されてゐる『批判』への序文からの引用文、そこでは、新しい生產關係はその實現の物質的諸條件が完成されざる以前に舊きものゝ場所にとつて代ることはないといふことが語られてゐる。新しい生產關係(財產

關係）の實現の物質的諸條件の下にはこゝでは同樣に、廣い意味においてはこれまた生產關係と呼ばれなければならないところの、生產過程における生產者の直接的關係（譬へば、工場および工場手工業における勞動組織）もまた理解されてゐるのである。この事情が、思ふに、表面的な『批判者』を誤らしたのであらう。

注意せよ、絕えず法律と經濟との間の矛盾について講釋をして來たペ・スツルーウエ氏が、突如として自から、この矛盾は、マルクスの理論に據れば、社會發展の主要原因をなすものでないことを思出し、社會的生產關係への生產諸力の矛盾について語り始めたことを。Mieux vaut tard que jamais！（遲れてもやらないよりは優しだ！）。他方において、マルクスの學說の眞實の理論的中心への復歸は、若しもペ・スツルーウエ氏がマルクスの言葉を、それの『批判』に着手する前に、理解すべく努めたならば、唯だその場合にのみ、本當に結構であつたであらう。しかし理解するといふことを彼は必要とも思はなかつた。

ペ・スツルーウエ氏は自分でも知らずにマルクス說の一つの誤れる解釋から他の、同樣に誤れる解釋に移つてゐる、その際彼はこれらの二つの正しからぬ解釋法の非共在性に氣付いてゐない。しかし彼の頭の中にはやはり時として、事はなぜか全く調子よく行つてゐないといふ漠然とした意識が動いてゐる。その時彼は自分自身の理論的良心を落着かせる爲めに、また讀者の側からの反駁に對して先手を打つ爲めに、病める頭から常識的な頭に落ちて行つて、彼自身の『批判』の主要なる特性をなしてゐる所の『不明瞭さ』そのもの及び非共在的概念の混同そのものゝ故にマルクスを批難する。かゝる批判的方法は、勿論、決してすべての讀者を滿足させてゐるやうに見える。それも結構である！ペ・スツルーウエ氏自身を滿足させてゐるやうに見える。それも結構である！

なほ次の事情を注意せよ。

ペ・スツルーウエ氏はマルクスを、彼の理論に從へば全體としての生產諸力が全體的としての社會的生產關係との矛盾に來ることゝなると言つて批難したばかりである。がそのすこし上のところで我々は彼から何を聞いたか？　我々は聞いた、『何となれば考へても見よ……愈〻益〻資本主義的となる法律制度を生み出す。法律に對する經濟の反作用は當に彼等生產關係は、愈〻益〻社會主義的となるの間に如何なる相互適應をも生み出さないばかりでなく、彼等の間に存する矛盾を益〻强めるのである。』斯くの如く、――ペ・スツルーウエ氏の當時の言葉に從へば、――社會發展の行程は、發展の辯證法的法則を承認するマルクス主義者達によつて表象されなければならなかつた。しかしマルクス自身この法則を承認してゐた。從つて彼も社會發展の行程に關して同樣の表象を有しなければならなかつた。しかしこの表象はたつたいま觀察された計りのものとは似てもつかないものである、そこでは（たつたいま我々によつて觀察されたばかりの表象においては）生產諸力が益〻生產關係に矛盾する、生產關係は、明かに、保守的要素の役割を演じてゐる、所がこゝではこの保守的要素が進步的な要素に轉化するのである、生產關係は愈〻益〻社會主義的になる、そして矛盾は後れた生產關係と前進せ

る生産諸力との間にではなくして、前進せる生産關係と後れた法律制度（それは益々『資本主義的となる』ところの）との間に存在する。そして全べてこれがマルクスに依るのだといふのである！　これはまた何といふ……混亂であるか？　ペ・スツルーウエ氏は自說を屈しない、私が惡いのではない、凡てこれはカール・マルクスが、二つの兩立し難い見解に依據して、混亂せしめたのである！　しかし今や我々はすでにこの口實の意味をよく理解する。我々はすでに今となつては、この場合混亂させてゐるのはマルクスではなくて、彼の『批判者』であることを知つてゐるしまた我々は容易に、正にどこでまた如何なる點においてこの最後の者が混亂したかを發見する。

マルクスを、彼にあつては凡て全體としてとられた生産諸力が全體としてとられた社會的生産關係に矛盾してゐる、と言つて批難したペ・スツルーウエ氏は、それと共に、この批難が全く根據なきものであること、及びマルクスにあつては生産諸力の發展は同樣にまた生産過程における生産者達の相互關係の變化によつても伴はれてゐることを感じた。しかし彼は正に如何なる生産關係が生産諸力の發展と並行して變化するか、また如何なるものがこの發展から、自己の落伍によつて急激なる社會的轉換、社會革命の必然性を條件づけながら、落伍するかを知らなかつた。がこれを知らないところから、彼は彼がマルクスに歸してゐるその最も粗雜な方法を用ひたのである、すなはち彼は『全體として』一切の社會的生産關係を採つた、そしてマルクス及びマルクス主義者たちは、さながらこれらの關係が愈々益々社會主義的になり、それに反して法律制度が益々資本主義の精神をもつて滲み込まされると考へてゐるのだと宣言した。マルクス及び『正統的』マルクス主義者達は決して、云ふ迄もなく、そんなことは言はなかつた、しかし彼等に歸せられた『根本的な』不合理は、それは同じ『批判者』によつて他の箇所において彼等に歸せられた更に他の『根本的な』不合理に直接『矛盾するもの』なのであるが、ペ・スツルーウエ氏の頭の中に君臨してゐる社會發展に關するマルクス說についての諸表象の渾沌を最もよく特徵づけるものである！

七

この渾沌の王國は果てなし。我々は彼をその一切の光榮において描出しえぬ、これがためには老詩人デルジャーヴインの立琴が必要であらう。しかし特徵づけを完全なものにする爲めに我々は一つの『不明瞭さ』を示すであらう。

ペ・スツルーウエ氏の言葉によれば、マルクスの理論においては、所與の社會の生産關係の總體なる概念は具體的なる法律關係の總體なる概念をもつて覆はれてゐる。その通りであるかどうかを讀者が判斷しうる爲めに、我々は二三の例を引くであらう。

第一の例。現代の機械職場における生産者達の相互關係は如何なる法律關係をも彼等の間に設定するものではない。法律關係は彼等と彼等の雇傭者との間に存在するのである。しかしこれは最早まつた

く『別のオペラ』である。

第二の例。價格は（マルクスに據れば）社會的生産關係である。しかし價格なる概念は相互に交換行爲に入る人々の法律關係なる概念をもつては覆ひつくされない。

第三の例。競爭はブルジョア社會に固有の生産關係である。それは多くの法律關係の發生に動機を供する。しかしそれの概念はこれらの法律關係の概念をもつては覆ひつくされない。

第四の例。資本は……しかしもう澤山だ！　讀者自から、ペ・スツルーウエ氏が愈々出でて愈々混亂させるのを見る。が我々は唯だかういふことだけを附加へて置かう、すなはち此の場合わが『批判者』は自己の不思議な誤謬に、彼がその影響から自からを衛りえなかつたシュタムラーによつて引入れらたのである、と。

わが『批判者』の陣地の中心點に戻ることにしよう、すなはち彼の社會發展の種々なる形態についての議論に戻らう。

我々は最初に、一人の『正統』マルクス主義者も彼の第一の定式を正しいものと認めることに同意しないであらうと言つた。次に、ペ・スツルーウエ氏を批判しつゝ、我々は、社會發展は矛盾の激化によつて行はれるのであつて、彼等の鈍ぶりによつてではないことを主張した。或る讀者はこれを、我が誤まれるものと宣言したところのその定式の正當性の承認と勘違ひしたかも知れぬ。それゆゑ我我は、この際讀者に、マルクス自身は『定式』の愛好者でなかつたこと、自己の『哲學の貧困』において

いてプルードンを彼のそれへの執着の故に痛烈に嘲笑し去つたことを思出させながら、說明することの必要を見るのである。

讀者はペ・スツルーウエ氏によつて作成された『矛盾の定式』を忘却しなかつた。

A	B
2 A	2 B
3 A	3 B
4 A	4 B
5 A	5 B
6 A	6 B
……	……
n A	n B

何處からこのAは現はれたか？　何處からBは現はれたか？　AはBの存在の原因であるか？　Bがの存在の原因であるか？　全べてこれは『未知の闇に覆はれてゐる。』ペ・スツルーウエ氏からは我々は唯だ、AとBとの間に交互作用が存在することを知るのみである。しかし彼の定式は交互作用をさへも表はしてはゐないのである、それは唯だ、BがAの增大に正比例して增大することを示すに過ぎぬ。ペ・スツルーウエ氏は、Aの增大に對するBの增大の關係を表現してゐる定式が、充分な完

全さをもつて社會的發展行程に對する正統マルクス主義者達の見解を描出するものと考へて、この指示だけをもつて滿足した。『Aおよび Bなる二現象の各々は同種類の要素の蓄積によつて增大する、——と彼は言つてゐる。——これと同時におよびこれに據つて同樣に彼等の間に存在する矛盾もまた增大する、それは、最後に、より强力な現象の勝利によつて、除去される、nA は nB を止揚する。』しかし若しも nA が nB を止揚するならば、この二現象間の『交互作用』の終局的結果は同樣にまた自己の表現をペ・スツルーウエ氏の第一の定式の中に見出さねばならないであらう。しかるにそれはこの結果を表現してゐない、それの最終頂である、

nA

は單に、BがAの增大に正比例して增大することを示すのみであつて、決して、Aの增大がBの止揚に導くことを示さぬのである。從つてペ・スツルーウエ氏の定式は先づ第一は次のごとく訂正されなくてはならない。

A
2A
3A
……
nA

B
2B
3B
……
nB

nA [減殺され] (n+X) A

OB

今や先きへ進まう、そしてこのすこしく訂正された定式が社會發展の行程に、それが矛盾の激化によつて行はれる時に、一致するかどうかを見よう。

十八世紀末のフランスに起つたところのそしてそれは歷史にフランス革命の名で知られてゐる社會革命を例にとらう。

この社會革命は根本的に『舊秩序』を廢棄して、ブルジョアジーの完全にして直接的な支配の爲めの根底を置いた。しかしそれは社會進化の長期に亘る、多くの世紀の過程によつて準備せられたのである。僧侶的および世俗的貴族階級との第三階級の鬪爭はすでに十三世紀において始まつたのであつて、最も種々なる形をとりながらも、一七八九年に至るまで止むことはなかつたのである。[1] この年に自己の歷史的敵との全般的な戰鬪に進出したブルジョアジーは、——『××××××』の正しい意見に從へば、——生產および交換方法における變革の長きに亘る系列によつて、創造されたのである。それの經濟的威力の成長の各々の段階には一定の政治的（即ち從つて法律的）獲得が相應してゐた。封建的秩序は自己の存在の初めから終りまで不變に殘つたと考へたら、非常なる誤りであらう。前進しつゝあつたブルジョアジーによつて占められた勝利は、絕えず封建的社會構成を、小止みなくその中に任意の、多かれ少かれ著しい改革を持込みながら、變形せしめたのである。これらの改革こそは封建社會の內部に存在した矛盾の『鈍ぶり』でなければならず、それによつて平和的な、漸進的な、殆ど氣

付かれない新秩序の勝利を準備しなければならなかつたやうに見えるかも知れない。事實において は、周知のごとく、まるで違つてゐた。ブルジョアジーが獲得しえた改革は、專に彼等の更新欲求と舊社會秩序との間の矛盾を『鈍らさなかつた』ばかりでなく、却つて、全然反對に、彼等の力の成長に新しい刺戟を與へつゝ、彼等は尙ほ一層これらの欲求を發達させそしてそれによつて、それの開始とともに話題はもはや改革についてではなくして、革命について、舊秩序內における改造についてではなくして、それの完全なる除去について進んで行つたところの、かの社會的動亂を漸次に準備しつつ、この矛盾を層一層激化したのである。[2] それ故にこそ第三階級の舊秩序に對する憎惡は革命の前夜において、嘗て以前に存在した如何なるものにも優して遙かに强力なるものであつたのである。[3] トクギルの意見によれば、封建的體制の一部の前述の破壞はそれの殘存部分を百倍も憎惡的なものたらしめた。[4] この意見は、それが、舊きものによつて新しきものに與へられる讓歩が決して新と舊との間に存在する矛盾を『鈍らさない』といふ眞理を內包してゐる限りにおいて、正當である。しかしそれは、トクギルが革命の前夜においては封建的壓迫はフランスにおいて、曾て以前に存在したよりも遙かに弱いものであつたと言はうとしてゐる限りにおいて、正しくない。封建制度の或る部分の廢止は未だもつて封建的壓迫の弱まりを意味しなかつた、新しい社會的要求の急速な發展は——殘存部分をして社會運動にとり一層有害なる。それ故にまた嘗て全體として封建制度が存在した以上に制壓的な憎惡的なものたらしめることが出來たし——また、我々が見る如く、眞實さう爲したのである。[5] その上舊秩序の下にあつても（讀者は私にこのフランス語法を許されんことを）制定また制定があつた。トクギル自身、フランスにおいては、時の經過と共に、貴族とブルジョアとを隔てゐた特權は、減少せずして、增大したことを認めてゐる。[6] 彼自身の言葉によれば、中流階級の人間には貴族たることがルイ十六世時代においてよりも、ルイ十四世の治世においての方がより容易であつた。そして彼はまた、一般にフランスの貴族階級はそれが貴族階級（アリストクラシー）であることを止めるに從つて、世襲的階級（カースト）に變化したと言つてゐる。[7] そして全くてこのことを完全に他の歷史家達が確認してゐる。譬へば、ドニオールは、革命の前夜にはすべての者が正に封建的迫害の增大に對して訴へたことを指摘してゐる。『各地方は著しい增大（封建的壓制の）に對して不平を鳴らし、自己の不平を事實によつて立證しようと努めてゐる。』[8] アルフレッド・ラムホーは次のやうに斷然として、ブルジョアジーによつて貴族階級から奪取された諸改革は、舊秩序の暴虐性を弱めなかつたといふ思想を發表してゐる。『舊秩序は自己の或種の缺陷を除去するに努めながらも、——とこの研究者は言つてゐる、——彼はさながら故意とのやうにすべての殘餘のものを增大した。それは（すなはち直接に革命に先行した時代）正に一七七九年、一七八一年および一七八八年の法令が第三階級（roturiers）出身の人々に軍隊における士官級に近付くの道を閉ざした時代、宮廷がこの問題に關して特別の法令を發布する勇氣がなく、しかも、將來に亘つて、『僧侶階級に屬する全財產、最も質素な修道院長職から始めて最も裕福な僧院長職に至る、の收入は貴族階級出身の人々のものたるべし』といふ規則に從は

うと決意してゐる時代、議會が自分の仲間に、自己の系圖において、すでに二世代以上貴族であつたことを證明しえない人々を入れることを拒絶した時代、及びボルドーの議會が二箇年に亘つて參事官デパチーを自己の議長として承認することを拒んだ時代であつた。最高裁判機關が貴族階級の手に握られてゐたところから、中流階級の人々および農村社會は貴紳達の强要に對して會々彼等によつて始められたすべての訴訟を失つた。このことは農村における封建制度の强化をもたらした。王政府は土地所有者と彼等の代理者とによつて始められてゐる農民に對する迫害を奬勵してゐる。一七八九年の二三の自己の指令において第三階級は、議會がその半數を非貴族によつて構成せんことを要求してゐる。彼等はかくて漸く、すでにユーゲノオト達がヘンリー四世の治世に獲得した保證を獲得したのである。到る所に浸潤してゐる反動の精神は封建的法律に關するボンセルフの著書を燒棄すべく判決した(一七七六年)パリ議會の決定にも、同樣にまた麥の收穫に際しての大鎌の使用禁止、若しくはそれに從へばフランス王國において製造されるハンケチの長さはその幅に等しくされねばならないといふ一七八五年の訓令にも現はれてゐる。最後に王權そのものは、議會から立法および財政に對する一切の監督權を奪つて、强いてこれらの集會を一七八八年に蹴散らして、未だ曾てフランスに存在しなかつたところのもの——限りない橫暴の政體を確立しようと努めた。『それはすべてのものによつて自己の權力を全般の利益のために使用しえないことが明かとなつた正にその時において、ルイ十四世の政府よりも遙かに暴虐的になつたのである。[9]』

註1 『成程、それ(革命)は一擧に世界を摑んだ。がそれは最も長い事業の增補であり、十世代に亘つて人類の眼前で行はれた勞作の突然な劇しい結末に過ぎない。』A. de Tocqueville, l'Ancien Regime et la Revolution. 2-me édition, Paris, 1856, p. 55.

註2 『時代より時代へと、立法は、領主の特權に抵觸するやうにもつて行かれた。そのことは到る處で見受られ、而して、到る所で時を告げる鐘の音——音に領主の特權を改めたり、置き換へたり、或は制限したりするだけでなく、それらを永久に消滅せしめる時を告げる鐘の音が鳴り響いた。』(ヘンリー・ドニオール、フランス革命と封建制度。第二版、パリ、一八七六年、六頁。)

註3 『この時代が封建制度および領主の權利に對してかく嫌惡を抱いた所以はこゝにある。』ドニオール、同所、同頁。

註4 L. c., p. 72.

註5 それはより精確には、封建制度が社會運動を阻止してゐたのではなくて、それどころか、それを助成してゐたのである。フイユステル・ド・クーランジュは封建時代の城寨について次のやうな正しい意見を述べてゐる、『それより十世紀の後には、人々は、封建領主のそれらの城寨に對して唯だ憎惡を抱くのみであつた。それらの城寨が打ち立てられた頃には、人々は愛と感謝を抱いたのみであつたのに。初めはそれらの城寨は人民に敵對して作られたのではなく、人民の爲めに作られたのであつたから。』(Histoire des institutions politiques de l'Ancienne France, tome IV, 682—683) 同じことは一切の農業および產業の組織についても言ひうる。

註6 Ibid., p.p. 143, 154, 155, 156.

註7 Ibid, p.p. 156 et 157.

註8 La Révolution Française et la Féodalité, p. 44; 同様に四二頁をも參照せよ、『加ふるにこのことは、最近さらに新らしい緊張さを加へたことによつて目立つてゐる』XI.

註9 《Histoire de la civilisation Française》, sixième édition, tome Second, p.p. 599–600). ラムボーは彼によつて引用されてゐるケレストの次のごとき意見に全然同意してゐる、『我々の政治機構は彼等がヘンリー四世以後すこしも改善されなかつたといふ不思議な運命を有した、時の經過および思想と道德との進歩と共に進歩する代りに、彼等は道德、思想、および時代に逆行して退歩した……舊秩序の政府は（一七八九年の前夜において）より不完全にまた教養ある階級の希求に對して中世においてよりも一層敵對的になつた。』

我々によつて引用されたばかりのフランスの研究家達とは反對に、ロシヤの學者エム・エム・コワレーフスキイは斷然十八世紀のフランスの社會的・經濟的構造に封建制度なる用語を適用することを否認してゐる。『何物もフランスの經濟的および社會的秩序に關して、——と彼は言つてゐる、——彼等を封建的なる名をもつて修飾する以上に虚僞なる表象を與へえない。この用語が彼等に適用されえざることは、例へば一八六一年の前夜におけるロシヤの莊園制度に適用されえないのと同樣である。』[1] しかし如何なる程度までフランスの農業およびフランスの農民階級が、エム・コワレーフスキイ自身が封建的と名付けてゐるそれの秩序の存續のために苦しめられたかを知る爲めには、我々が上記の引用文を借用してゐるその章（第一卷第二章）を通讀するだけで充分である。その上、エム・コワレーフスキイ氏は、我々によつて引用されたフランスの歴史家との完全なる一致において、革命の前夜においては貴族階級も王權も共に全力を傾注して殘存の封建的諸制度を維持し、彼等の實際的意義を强化するに努めたと言つてゐる。『革命に先行した二十五年間は、——と彼は書いてゐる。——すでに廢れてしまつたところの刑罰と過料とを復活せんとする一列の企圖を我々に示してゐる。』[2] そしてその彼が、トクヰル並びにドニオールとの完き同意において、當時のフランス政府は自己の立法によつて世襲的精神と階級的特殊性とを支持しつゝあつた、と言つてゐる。[3]

註1 『現代民主主義の起源』第一卷、五九頁。

註2 L. C., 一二四—一二五頁。

註3 上揭書、四九頁。

一と口に言つて、ロシヤの研究家の書物は、彼の外國の先行者達の著述と同樣に、フランス大革命の直前の時代は、決して舊秩序と新しい社會的必要との間の矛盾の鈍ぶりではなくして、反對に、非常に劇しい激化によつて表示せられたことを立證してゐる。しかるにエム・コワレーフスキイも、同樣にまたフランスの史家も、この矛盾の激化そのものは長きに亘る歴史的過程の複雜な結果であつた

のであり、その間に舊秩序が益〻ぐらつき、その擁護者達が一つ〳〵陣地を喪つて行つたのであることを指示してゐるのである。この爭ふ餘地なき歴史的眞實からは、第一には、更新者達によつて保守主義者に對して占められるところの、そして改革に導くところの勝利は、革命を排除しないどころか保守主義者達のところにはかゝる場合に自然的である反動的衝動を、また更新者達のところにおいては——新しい勝利と新しい獲得との渴望を目醒ますことによつて、その接近を促進するといふことが出て來る。で若しも我々が、革命が進化の諸契機の中の一つとして現はれ、改革によつて準備されるこの歴史的過程を一つの定式に描出さうと欲するならば、我々はペ・スツルーウエ氏によつて提供されてゐる『矛盾の定式』よりも何等かもつと複雑なるものを必要とするであらう。我々はこの多方面的な過程に多少とも滿足すべき表現を與へうる定式を知らない。しかし、舊秩序に對する第三階級の鬪爭行程について我々によつて語られた全べてを基礎として、我々は兎も角ペ・スツルーウエ氏の第一の定式の本質的な訂正の必要を指摘することは出來る。

註1　ペ・スツルーウエ氏は言つてゐる、『かくて我々の時代においては社會改造の陰に日和見主義の係跡(ワナ)をかぎ出さない譯には行かぬ』(Ibid., S. 679 XII)。彼はこれらの言葉を『正統』マルクス主義者に向けてゐる。本文において我々によつて語られたことを基礎として、讀者は、少くとも、我々に關しては彼の批難は全く根據のないのを見る、しかるに我々は、彼の意見によれば、正統派の中の正統派に屬してゐるではないか。

若しも新社會の諸要素の發展の長い歴史的過程が更新者達の勝利と保守主義者達の敗北によつて表徴されるならば、上述の定式は必ずや明確にかつ決定的にこの極めて重要な事情を表示しなければならない。ところが我々はその中にそれに對する暗示をさへも見出さぬのである。それは、反對に、Aの增大はそれに正比例するBの增大によつて、nAがnBを止揚するに至るまで、伴はれるといふことを語つてゐるのである。事態の眞實の行程を表現しうる爲めには、それは、第一に、次のごとく修正されなくてはならない。

A	nB
2A	(n−1) B
3A	(n−2) B
.....	.....
nA	B
mA	½ B

この場合第一列は新しい社會的要求の不斷の發展を表現し、第二列は——舊秩序の等しく不斷の變更、更新者達によつて保守主義者達から奪取される讓歩を表現するであらう。しかるにこれらの讓歩は、我々がすでに知つてゐるやうに、新舊間の矛盾の激化を排除しない故に、我々の有する二系列に第三の、不斷に成長するAと（一般的に、即ち反動主義者達の一時的成功にかゝはらず）同樣に不斷

に減退するBとの間の交互作用の結果を表現するものを附加へなくてはならない。この第三列を附加へることによつて、我々は次の表を得る。

A		nB
2A	(n−1)B	
3A	(n−2)B	
……	……	
nA	B	
mA	½B	

如何にこの新しい定式が理想から、すなはち矛盾の激化による發展の眞實の行程を完全に表現しうるところのものから、遠くあらうとも、それは矢張りペ・スツルーウエ氏の第一の定式に較べれば、遙かに現實に近いものがある。それの卓越は、それが一面性に無縁であること、及びそれにおいては現實生活におけると同様に、改革が轉換を排除してゐないことに含まれる。それは、反對に、革命の可能性が改革によつて排除されないばかりでなく、創造されるといふこと、すなはち近視眼的若しくは先入主的見解は、矛盾の『鈍ぶり』と考へるかも知れないが、事實においてはそれは激化の源泉として現はれてゐるところのものを示してゐる。

		C
2B		2C
3B		3C
……		……
nB		nC
mB		mC

八

繰返して言ふが、我々の意見によれば、人間社會の歴史的發展の眞實の行程は然るべき完全さをもつてどんなかの一つの『定式』をもつては表現されえない。しかし正にこの原因から、思ふに、この行程の圖式的表現に關して尙ほ一つの試みをなすことは有益であらう。

下の抜萃に注意されんことを讀者に希望する、それの長たらしきに對して我々は豫め彼の寛恕を乞ふものである。

『徐々にかつ苛烈な鬪爭によつてのみ、その權力の下に人々が生活しまた勞働する支配的秩序は發展する。長い間の擾亂、頻繁なる過去への復歸、不確實な企圖と强められた前進の後に、——結局、過去の經驗に基づいて現在の要求に合致するであらうところの、またそれの保護の下に個人的な諸力が最も生產的に社會の幸福の爲めに發達せしめられるであらうやうな秩序を確立することに成功する。しかし、かゝる幸福な狀態が確立されるや否や、直ちにまた以前に氣付かれなかつた新しい要求が舞臺に現はれる。存在物を變形して漸次それを改造しようとする努力が發生する。この努力に反對して他方に、事物の舊狀態を完全に保持しようとするより一面的なる骨折りが發達する。社會的利害の形において確立されたところのそれらの形態に、最後に私的な、利己的な利害が頑强に獅噛みつく。結局、舊形態を不變に保持しようとする意志は、これらの形態が嘗て有したところの意義を解せずし

て、唯だ疑はしき利益のみを要求すること〻なる。そしてその結果として屢〻生活に對して全然無力なる一つの赤裸かの形態が殘る、それと並んで新しい、新鮮な生活が全く異れる形態をとつて現はれ、最後に、或る美しい日に舊形態は完全にその外的現れにおいてさへも崩壊し去る。[1]』

註1　アルフレッド・ヘルド、『イギリスにおける大規模生産の發展、』一九頁。

こゝで我々は社會發展の定式のごときものに當面する、それの正當性は最も喧しい『批判者』も否定しないであらうことを期待する、所與の社會的要求は社會のその後の進展にとつて必要なる共同生活の與へられた形態を作出する。しかし共同生活のこの將來の進展は、新しい社會的要求を作出する、それには最早以前の要求によつて創造された共同生活の舊形態が相應しなくなる。かくて持續的な社會的進動の影響の下に益〻增大するところの矛盾が發生し遂に、共同生活の、嘗て社會の差迫つた要求によつて創造された舊形態をして、一切の公益的內容を喪失せしめるに至る。その時彼等は、多かれ少かれ繼續的な鬪爭の後に、廢棄され、新しきものによつて變更される。

この（各觀的な）『進步の定式』は、讀者が見るごとく、內容と形式との間の相互關係（『交互作用』）を表現してゐる。內容、それは——充足を要求してやまないところの社會的要求であり、形式、それは——社會制度である。內容は形式を生む、そしてそれによつて將來の發展を自己のために保證する。しかし將來の發展はその形式を不滿足なるものにする。矛盾が發生する、矛盾は鬪爭に導く、鬪爭は——舊い形式の廢棄とそれの新形式によつての變更に導く、それが今度は內容のその後の發展を保證する、それがまたそれを不滿足なものにする、かくて發展が止まらざる限り、繰返し繰返されて行く。これは故人のエヌ・ゲー・チエルヌイシエフスキイが次の如き雄辯をもつて語つてゐるところのその法則である。

『形態の永遠的な交代、或る一定の內容若しくは志向によつて生み出された形態の、その同じ志向の强化、その同じ內容のより高度の發展の結果としての、永遠的な廢棄！　この偉大なる、永遠的なる普遍的法則を理解したる者、それを凡ゆる現象に適用することを會得したる者は、——おゝ、如何に冷靜に彼は他の者達を昏惑させるところの機會を迎へるであらうか！　詩人の後から

私は『私の』行ひを何物にも向けなかつた

しかも全價値が私に値する、

と繰返しながら彼は死にゆく何物についても惜しむことなく、かう言ふであらう、『在るであらうところのものをして在らしめよ、されど矢張り我々の街には祭日あらしめよ。』

或る一定の內容によつて生み出された形式の、その同じ內容のその後の發展の結果としての廢棄の、この偉大なる法則は、事實において普遍的なる法則である、何となれば茜に社會的のみならず、同樣

にまた有機的生活の發展がそれに支配されてゐるからである。[1] そしてそれは眞實に、それの活動が終熄するのは唯だ一切の發展が止む時であらうといふ意味において、永遠的である。しかしこの偉大なる、普遍的なるそして永遠的の法則は同時に、恐らくは何物にも優して社會的發展行程に對するマルクスの見解を表現してゐるところの、『矛盾の定式』なのである。

註1 『何となれば全生活が有機的物質の、その場合々々の變形と結付いてゐる、運動の連續的連鎖であるから。』Häckel, Generelle Morphologie (der Organismen, XVII Kapitel). 驚歎すべき明白さと明瞭さとをもつてこの法則は、變態によつて發展する動物、譬へば或種の昆虫 (Diptera, Lepidoptera etc.) の胎生學の中に表はれてゐる。變態には、周知のごとく、不完全と完全とがある。完全變態にあつては幼虫は、蛹に轉化する際に、特別の外被に覆はれ、それが彼を外界からの惡しき作用から防禦するのである。蛹の有機體内に行はれつつある轉形の過程が終りを告げると、豫防的外被が餘分なるものとなる、それは有機體のその後の生活向上を障害する、それに矛盾して來る、そしてそれ故に矛盾が一定の緊張度に達すれば、脫落する。この際すなはち革命的爆發、漸進性の中絶が行はれたのである。自然は概してより多く革命家であつて、『矛盾の鈍ぶり』については殆ど考慮してをらない。

『資本論』の第二卷第二篇において我々は讀む。

『勞働過程が人間と自然との間の單純な過程として現はれてゐる限り、その限りにおいてはそれの單純なる諸要素はその發展の凡ゆる社會的形態に際して一樣なるものとして止まる。しかしこの過程の各々の一定の歷史的形態は更にその物質的基礎とその社會的形態とを發展せしめる。成熟の或る程度に達するや、與へられた歷史的形態は廢除されより高度の形態にその場所を讓る。かゝる危機の瞬間が到來したこと、それは分配關係間の、從つてまた、それに相應する生產關係の一定の歷史的形態と……生產諸力との間の矛盾および對立が、或る一定の廣さと深さとに達する時に現はれる。その時生產の物質的發展とそれの社會的形態との間に衝突が起る。[1]』

註1 Das Kapital, III Band, II Theil, S. 420—421.

社會的人間の自然に對する生產的働きかけとこの働きかけの過程において行はれる生產諸力の成長、これが——内容である、社會の經濟的構造、その財產關係、これが——與へられた内容によつて（『物質的生產の發展』の與へられた程度によつて）生み出されたところの且つはその同じ内容のその後の發展の結果として廢棄されるところの形式である。一たび形式と内容との間に矛盾が發生した以上は、それは『鈍ぶく』ならずに、新しい要求に順應して變化する舊い形式の能力を遙かに越えて停止することなき内容の成長のお蔭によつて、成長する。かくて、早かれ晚かれ舊い形式の廢除と新し

い形式によつてそれの置換とが必然的となるやうな時機が到來する。斯くの如きが社會發展に關するマルクスの理論の意味である。

この全く明瞭なそれと同時に極めて深遠な意味を理解しえた者は、同樣にまた社會問題に適用されたるマルクスの辯證法の偉大なる意義をも理解しえた者である。

『その神祕化された形態においては、——とマルクスは言つてゐる、——辯證法はドイツの流行となつた、それは現存事物を聖化するかに思へたからである。しかるにその合理的な姿においては、辯證法は、ブルジョアジーおよびその空論的代辯者たちにとつて、一の苦悶であり恐怖である、何故なれば辯證法は、現存事物の肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定の、その必然的沒落の、理解を含め、あらゆる生成した形態を運動の流において、それゆゑにまたその暫時的な方面から、把握し、何物によつても畏伏せしめられず、その本質上批判的であり革命的であるから。[1]』

註1 Das Kapital, Vorwort zur Zweiten Auflage, S. XIX. マルクスのこれらの說明の結果として、不思議な、しかしながらそれと同時にヾ・スツルーウエ流の『批判者たち』にとつて極めて特徴的なるものとして現はれるのは、これらの諸君が辯證法をマルクスの理論における最も薄弱な箇所であると揚言してゐるその事情である。『マルクスの社會主義の特徴でもあれば偉業でもあるところの發展の理論の中に、——とスツルーエ氏は言つてゐる、——その讃嘆すべき立場は存するのである、そしてその立場はまた排撃し難い『辯證法』に存するのである。』(Ibid., S. 636)、この際、問題がどこにあるかは、この箇所に直接に續くところの同じヾ・スツルーウエ氏の言葉がよくそれを示してゐる、『人は本當に心から何のわだかまりもなく『社會革命』を理論的な概念として認容しない間は、この數多の矛盾から免れることは出來ない。』ゲーテのファウストはメフィストフエレスに言つてゐる、『除魔符はなんじにとつて苦痛となる！』わが『批判者君』の頭腦については、プロレタリアートの獨裁を意味する政治革命の概念と結付いた社會革命の概念（又は『崩壞理論』）が苦痛の種である、といふことが出來る。

讀者よ、マルクスの辯證法の見地に立たれよ、その時諸君は自から、マルクスの整然たる理論の中へ彼等の極めて愛する『鈍ぶり』の要素を持込まうと努める『批判者』諸君の益なき努力が如何に絕望的に力弱いものであるかまた如何に滑稽的にぎごちないものであるかを見出すであらう！ その時これらの尊敬すべき諸君によつてマルクスの理論の解釋の中に持込まれてゐる多數の時として驚歎に値する所の『不明瞭』は諸君を當惑させないであらう。しかも若しも諸君が、最後に、我を忘れるなら、若しも諸君の口から、憤慨の言葉が奔り出るなら、それは決して彼等の子供らしい論證の見掛け倒しの力が諸君を怒らせるからではなくして、それのお蔭によつて——彼等の多數が自からをマルクス主義者と考へまた呼んでゐるところの、その彼等の自惚れが諸君には許すべからざるかつ憤慨に値するものと思はれるが故である。我々は、この滑稽な自負が最も峻嚴な非難に値することをよく知つて

ねる、そして我々はそれ故に、諸君が堪らなくなつて、かう絶叫するとしても驚かないであらう、考へても見よ、批判者諸君！　諸君は如何なるマルクス主義者であるか?!　マルクスは龍を畤いた、しかるに諸君は唯だ……諸君は唯だ……左様、一、と口に言つて諸君は——全く異れる寸法の有機體である！……

次ぎの論文において我々は、ペ・スツルーウエ氏が、『批判哲學』に依據しつゝ、如何に不成功的に社會革命に關するマルクスの理論を『批判してゐる』かを見るであらう。そこにおいては我々は批判者諸君の謂ゆるプロレタリアートの貧困化に關するマルクスの理論に反對し、且つはすでに久しい以前にブルジョア代辯者達によつて定立された、資本主義社會に存在する矛盾の鈍ぶりの理論の辯護に向らけられてゐる議論に當面するであう。

第二論文

ペ・スツルーウエ氏は——プロレタリアートとブルジョアジーの利害の矛盾の『鈍ぶり』の理論の最初にして最後の宣傳者ではない。この理論にはペ・スツルーウエ氏以前にも多くの支持者があつた し彼以後には尙ほ一層多いことであらう。何となればそれは小ブルジョアジーの、即ち自己の地位そのものによつてプロレタリアートとブルジョアジーとの間に動搖すべく運命づけられた階級の、教養ある層の中に今や極めて急速に普及しつゝあるからである。そして正にそれが今日非常なる勢をもつて、マルクス及び彼の獨斷的追隨者達の所謂陳腐となれる社會主義に代つて來たところの、最新のそして『批判的』な社會主義として普及しつゝある故にこそ、それは最も注意深い觀察に値する。この理論と闘ふことを欲するほどの者は、それの理論的系統をもまたそれの現在の價値をも知らなくてはならない。それゆゑ讀者は、我々が暫くわが『批判者』をその儘にして置いて、彼の先行者達および今日に至るまで饗應としてゐる多かれ少かれ遠い親類達を調べるやうなことをしても、驚かないであらう。

一

勞働力の價格と剩餘價値とは相互に逆の關係にある。勞働力がより高く賣れゝば賣れるほど、それだけ剩餘價値の水準は低い、そしてまたその反對である。勞働力の賣手の利害はそれの買手の利害に正反對である。本質的にはこの矛盾は、勞働力の賣買が廢止されない限り、即ち資本主義的生産方法が廢除されない限り、除去されも、『鈍ぶらされ』もしえない。しかし、勞働力の賣買が行はれるその條件はどうにでも變化しうる。若しもそれが賣手にとつて有利なやうに變化するならば、勞働力の價格は昂騰する、そして勞働階級は、賃銀の形で、彼等の勞働によつて創造される價値の、前よりも、より大なる部分を受取る。がこのことは彼等の社會的境遇の改善、搾取されつゝあるプロレタリアートと彼等を搾取しつゝある資本家との間の懸隔の短縮を結果する。しかし若しも勞働力の販賣條件が

それの買手達に有利なやうに變化するならば、その價格は低落する、そして勞働階級は彼等の勞働によつて創造される價値の、前よりも、より小なる部分を受取る。がそのあとには不可避的にプロレタリアートの社會的境遇の惡化、彼等とブルジョアジーとの懸隔の增大が續く。第一の場合においては、我々はさながら、勞働者と企業家との間ではないにしても、少くとも、一方——勞働者の利害と、他方——資本主義的秩序の存立との間の矛盾の鈍ぶりを說いても差しつかへない權利を有するかに思はれる。事實においてはこの權利は外見的に過ぎぬであらう。我々はすでに第一の論文において、フランスのブルジョアジーの社會的境遇の改善がその利害と舊秩序の利害との矛盾を鈍ぶらさなかつたばかりでなく、益々それを激化したのを見た。しかしプロレタリアートの革命運動を恐怖しつゝある人々は、常に、勞働者階級の生活の漸次的改善は危險を豫防して社會を激烈な擾亂から免かれしめることが出來ると考へてゐたしまた常にさう考へたがることであらう。正にこの故にこの範疇の人々は自己および他人に（時には他人にのみ）資本主義の發展につれてプロレタリアートの狀態は改善されると、何となれば彼等は時と共に、當初にあつたよりも、よく近くブルジョアジーに接近するからであるといふことを信じさせようとしてゐるのである。そして保守的な本能はこれらの人々に次のやうなことを認めることが必要である、たとひ革命的爆發の豫防のためには搾取者および被搾取者間の懸隔の短縮は全く不充分であるにしても、この懸隔の增大はもはや決して今日においては尊敬すべき擁護者達に、勞働者內部における革命的社會民主々義の『獨斷論者』の急速なる增加以外、何物をも約束するものではない。

何を我々は現實において見るか？　如何なる方向に勞働力の販賣は資本主義的秩序の鞏固化と發展とにつれて變化しつゝあるか？

俗流經濟學はすでに以前からこの問題に從事してゐる。それは、勞働力の販賣條件はプロレタリアートに有利なやうに變化しつゝある、それ故彼等は國民所得の益々大なる分前を獲得しつゝあるといふことを證明しようと努めた『學者達』の全軍隊を動員した。有名なアメリカの經濟學者ケリーはこの敎義をすでに一八三八年に明瞭に定式化した。[1] ケリーからそれは有名なバスチアによつて借用された、この者の論證を我々は少しく立入つて觀察しなければならない。

註1　ロシヤの讀者はケリーの議論に、一八六九年に公爵シャホフスコイのロシヤ譯において現らはれた彼の著書『社會科學指針』において接することが出來る。我々によつて研究されつゝある問題への關係はこの書物の五〇六頁にある。

自己の《Harmonies économiques》（『經濟的調和』）においてバスチアは、運命は自己の限りなき善良さと公正とによつて勞働のために、資本のために、資本のためによりもよりよき運命を準備したと主張してゐる。[1] この愉快な思想は彼においては次のやうな『搖ぎない公理』に依據してゐる。

註1　Harmonies, 2 édition, p. 206.

『資本が増大するに從つて、生産物の全總體における資本家たちの絶對的分前は増大する、が彼等の相對的分前は減少する。それに反して、勞働者達の分前はそのいづれの意味においても増大する。』

この『公理』を説明する爲めにバスチアは、我々がケリーの『社會科學指針』において出遭ふのと全く同じ圖表を掲げてゐる。

	生産物の總額	資本の分前	勞働の分前
第一期	一〇〇〇	五〇〇	五〇〇
第二期	二〇〇〇	八〇〇	一、二〇〇
第三期	三〇〇〇	一、〇五〇	一、九五〇
第四期	四〇〇〇	一、二〇〇	二、八〇〇

かくの如きは偉大なる、驚歎すべき、慰藉的なる、必然的なる且つ確實なる資本の法則である、——と喜びをもつてバスチアは叫んでゐる。——これを證明することは、私の意見によれば、貧窶と暴虐とに對する人間の能力によつて創造された文明と平等化の凡ゆる武器の中の最も强力なるもの、……演説を全く不信用にすることを意味する。[1]

註1　上揭書、二〇六—二〇七頁。

讀者自身もまた、かくも驚歎すべき慰藉的な法則を證明するのは非常に愉快であらうことを知つてゐる、しかし、殘念なことには、彼はバスチアがそれを甚だ不確實に證明してゐることを承認しなければならない。彼の全議論は文明諸國の產業的發展と竝行して進む利率の下落の指示に歸着する。すこしでも經濟學に通ずる者は誰でも、かゝる證明は薄弱以上に薄弱であることを理解する。しかし『輝かしいフランスの經濟學者』は證明に手間どつてゐる暇がない。彼は遽たゞしく彼の驚歎すべき慰藉的な法則から流出する驚歎すべき慰藉的な結論へと移る。『資本家たち及び勞働者たちよ！——と彼は叫ぶ、——相互に不信と憎惡とをもつて睨み合ふことをやめよ。その傲慢が彼等の無智に過ぎないところのそしてそれは未來のために博愛的な見通しを開いて見せながら現在の中に不和を蒔いてゐる愚劣な演説に對して聾となれ。諸君の利害は同一であること……それは溶け合つてゐること、それは相合して全般的幸福の實現に向つて進んでゐるものなることを認めよ』云々、云々。[1] この感慨深い長文句は、正に何故にバスチアが彼によつてケリーから（出所を明かにせずして）借用されたところの必然的なる且つ確實なる法則を必要としたかに關してすこしの疑ひをも挿しはさむ餘地を殘してゐない、この法則の引證は勞働者と資本家とを妥協させそして社會主義の影響を排除しなければならな

かつた。

註1　上掲書、二〇九頁。

二

ユリアン・コーツはバスチアを近代において經濟學の研究に從事した最も輝かしい頭腦の一人であると考へてゐる。[1] この特徴づけには同意することが出來ない。バスチアは疑ひもなく、明快な、思ふに、輝かしくさへもある記述の能力を具へてゐる。しかし彼の思想は常に極めて表面的であり、彼の論證は常に極めて薄弱であつて、彼を科學の輝かしい働き手とはどうしても認めえないのである。彼は資本主義的搾取の輝かしい代辯者たるに過ぎなかつた。しかし正に彼が輝かしく資本主義的搾取を辯護したその事情が、彼のために『社會平和』の多くのそして多くの親友達への强力なかつ持續的な影響を保證したのである。この、――そして唯だこの、――意味においてのみ、ユ・コーツは、彼がバスチアの活動を著大なるかつ成果的なるものと呼ぶとき、正しいのである。[2] 事實において、多かれ少かれ擁護的傾向の經濟學者に對するバスチアの影響は、彼の驚歎すべきしかも甚だ慰藉的でない、一種獨特ではあるが必然的でもある表面性に驚かされてゐる人々の多くが考へてゐるよりも遙かに强力であつたしまたかゝるものとして殘つてゐる。ルイジー・コッサはバスチアの思想の健全な部分の影響

は彼の學徒達の著述の中によりも、寧ろ我々に同時代のフランスの經濟學者の多數およびドイツ、イタリーの經濟學者の大部分の一般的傾向の中に現はれてゐると述べた。[3]『健全な部分』の下にコッサは『保護貿易論者および社會主義者の詭辯の反駁』を意味してゐる。我々はすでに、社會主義的『詭辯』の反駁がバスチアにおいては全く役に立たぬ基礎の上に眠つてゐるのを見た。しかし問題はそこにあるのではない。バスチアの一般的傾向は最も種々なる國の極めて多くの經濟學者の著述の中に生き殘つてゐると言つてゐる時、コッサは矢張り正當である。特に强烈なそして深刻な印象をば『驚歎すべき』かつ『必然的』なる勞働者および資本家間の生産物の分配法則は惹き起した。この際、この法則の『發見』がケリーの祖國においてさへもバスチアに歸せられてゐることを注意するのは興味あることである。このケリーからフランスの經濟學者は、疑ひもなく、法則そのものをも、同樣にまたその敘述をも借用したのであるのだが、現に、譬へば、有名な統計學者である。エドアルド・エトキンソンは、概して彼は書物の飜讀と賃銀の理論の研究の爲めに (for the reading of books or the consideration of theories of wages) 僅少の時間をしか有しなかつたのであるが、しかし、彼の意見によれば、バスチアこそは勞働者の利害と企業家の利害との關係に關する正しい教義の第一の創始者であつたと宣言してゐる。『よほど以前に、――と彼は言つてゐる、――バスチアの《Harmonies économiques》(『經濟的調和』)の一句が私の腦裏に刻みつけられた。そしてそれのお蔭で私は、自己の一生涯を通じて遙かに大なる明確さをもつて賃銀の現象に關して會得することが出來たのだ。この一句こそは、『資本が增

大するに從つて、生産物の總額における資本家の絶對的分前は增加する、が彼等の相對的分前は減少する。反對に、勞働者の分前はそのいづれの意味においても增加する」といふことである。[4]』エトキンソンはこの一句を《What makes the rate of wages》（『何が賃銀率を作るか』）なる自己の論考において題銘に採用した。そしてバスチアに感奮させられた彼は、アメリカの金屬工業に關する多少の材料を基礎として、彼の言葉によれば『勞働者の貧困よりの前進および資本家の貧困への前進の指示』(indicator of progress from poverty of the workman and progress toward poverty of the capitalist)と名付けることの出來る表までも作成した。[5]この自己の新しい定式においては驚歎すべきバスチアの法則は自己の慰藉の著しい部分を喪失して、資本主義社會における資本家の未來の運命に關してあまりにも暗い危惧を讀者に抱かしめてゐる。しかし冷靜な學者達は、純粹科學の利益以外何物をも知ることを欲せず、可哀さうな資本家達に對する憐愍によつて心を亂されることなく、好んでエトキンソンの研究を引用してゐる。すなはち、我々はシュルツエ・ゲーヴァニッツ教授の『大規模生産』に關する著書においてそれの頻繁なる引證に遭遇するのである。この書物は、ペ・スツルーウエ氏の言葉によれば、『恐らくは、イギリス產業の社會史に關する最も精密なる特殊研究なのである。[6]』イギリス木綿工業の經濟の『精密な研究』はシュルツエ・ゲーヴァニッツをして、全國民的生產物の增加は勞働および資本の分前として絕對的に大なる分量を與へはするが、しかしその場合における資本の分前は相對的に減少し、それに反して勞働の分前は相對的に增大するといふ確信に導いた。『勞働は全國民生

產の益〻大なる分前を受取る、——とシュルツエ・ゲーヴァニッツは言つてゐる。——彼は利子および利潤の分前を支拂つた後に受取られる益〻多くの殘額を受くるに至る。[7]』これは依然としてケリー・バスチアの同じ慰藉的なる法則である、ペ・スツルーウエ氏が自己の、——概して非常に力の弱い、——シュルツエ・ゲーヴァニッツの著書への序文において、このことを氣付かなかつたか或はまた指摘することを欲しなかつたのは甚だ不思議である。分配の驚歎すべきそして慰藉的な法則が深遠なドイツ人を、曾て輕率なフランス人をそれに導いたところの、その同じ喜ばしい結論に導いてゐることを附與するのは無益であらう。『上に特徵づけられた過程の社會的結果は財產上の對立の均衡化であつた、——とシュルツエ・ゲーヴァニッツは主張する、——決して富者をしてより富ませ、貧者をしてより貧しくするのでなく、それは丁度その反對に導くのであつて、このことはイギリスにとつては統計學的に證明されてゐる。[8]』こゝからはもう、敎授がすでに以前に獨立の二卷に亙る研究を獻げたところの『社會平和』の如何なるものであるを推測することは容易である。[9]

註1 Die geschichtliche Entwicklung der Nationalökonomie und ihrer Literatur, II Theil, Wien 1860, S. 578.

註2 同所、同頁。

註3 Histoire des doctrines économiques, Paris 1899, p. 336.

註4 The Distribution of Products or the mechanism and the metaphysics of exchange. Fifth edition p. 23—24.

註5 上揭書、三三五頁。

註6 ゲルハルト・フオン・シュルツエ・ゲーヴアニツツ『大規模生産』デー・ベー・クラシン譯、ベ・ベ・スツルーウエの監修および序文。エス・ペテルブルグ、一八九七年、序文、一頁。

註7 同所、二二九頁。

註8 同所、同頁。

註9 Zum sozialen Frieden. 十九世紀におけるイギリス國民の社會政治的教育に關する論考。ライプチツヒ、一八九〇年。

シュルツエ・ゲーヴアニツツ氏は特に自分の讀者の注意を自己の慰藉的な結論に向けることが必要であると考へてゐる、といふのは、彼の言葉によれば、富者と貧者との間の懸隔の增大の事實は、マルクスおよびエンゲルスによつてそれに與へられた意味においては一般にマルクス主義の斷然たる反對者として進出しつゝある人々の間にすら承認されつゝあるからである。[1] しかしこゝで彼は殆ど針小棒大に陷いつてゐる。マルクス主義に敵意を有する仲間は、我々が知つてゐる限り、益々ひどくケリー・バスチアの法則の確實性と『必然性』の慰藉的な意識をもつて滲みこまされてゐるのである。今や殆どすべての自尊心あるブルジョア學者は、若しも彼に、——『科學的な』研究において、——富者と貧者との間の懸隔の縮少に關して吹聽をする可能が與へられるならば、想像以上に恐悅してゐるのである。資本家と勞働者との間の矛盾の『鈍ぶり』は今やブルジョア經濟學の文獻において最も流行的な論題の一つとなつてゐる。

註1 Zum sozilen Frieden, II Bd., S. 493.

三

シュルツエ・ゲーヴアニツツの言葉によれば、貧富の懸隔の縮少はイギリスにおいて『イギリス第一の統計學者』ギツフエンによつて、一八八七年の十二月にイギリス統計學會において行はれたといふ《The increase of moderate incomes》（『中位の所得の增加』）なる演說の中に證明されてゐる。この演說をシュルツエ・ゲーヴアニツツは自己の著述『社會平和』（第二卷、四九〇頁）の中にも引證してゐる。しかし彼がそれをギツフエンに歸してゐるのは誤りである。この演說は——しかも正にシュルツエ・ゲーヴアニツツの樣にまた大規模生產に關する自己の著書（ロシヤ譯二二九頁）の中にも引證してゐる。しかし彼がそれをギツフエンによつて指摘された場所において、ゴーシエンによつて行はれたものである。[1] この事情は、勿論、すこしも演說そのものゝ價値を變ずるものではない。しかしゴーシエンから彼に値する榮冠を奪つ

て、そしてそれを、——單なる間違にもせよ。——ギツフエンに讓るのはよくない。Suum cuique!
（他人の物は他人へ！）

註1 《The Increase of moderate Incomes》being the Inaugural Address of the President of the R. S. Society, the right Hon. G. I. Goschen, in "Journal of the R. S. Society", Dec. 1887 を見よ。

中位の所得の增加に關する演說が信用すべきものに思はれたのはひとりシユルツエ・ゲーヴアニツツに限らなかつた。この演說のあとで（一八八七年十二月六日にそれは行はれたのであるが）イギリス銀行の監督者コルレツトは辯士に對して、彼が如何なる程度まで不斷に增大する富者の富裕化と貧者の窮乏化に關する擊破された空論が眞理に矛盾するものであるかを示してくれたことに對して、熱烈な感謝の意を表した。『今日かくも激しく富の分配に關する實現し難い理論および誘惑的な提唱が行はれつゝある時に、——と尊敬すべき監督者は言つた。——明晰と確實とをもつて、今日激情的にそれを目差して突進しつゝあるその富の分配が暗默の間に、徐々として、經濟的諸法則の正しい活動のお蔭で、實現されつゝあることを示すことは眞にもつて有益なることである』[1]しかしコルレツト君の意見は或は、さして權威あるものではないと言はれるかも知れない。懷疑論者は多分、イギリス銀行の監督者は、エ・エトキンソンと同樣に、統計學的材料を正しく理解する爲めに矢張りその智識を必要とするところの經濟學說の研究の爲めに充分の時を持たなかつたと考へるかも知れぬ。それゆゑ我我は尙ほ有名なドイツの經濟學者ゲー・シユモラーを示すことにしよう。彼は多少の懷疑論をもつて『イギリス第一の統計學者』すなはちギツフエンに對しながらも、同時に、ゴーシエンの結論が現實の客觀的なる確實なる研究に基づいてゐることを認めてゐるのである。[2]それゆゑ尙ほすこしく立入つてイギリスの大藏大臣の研究を觀察することは無益でない。

註1 Journal of the Royal Statistical Society, 1887, December, Proceedings on the 6-th December, p 613.

註2 我々は中產社會を何と解すべきか？ それは十九世紀において消滅しつゝあるか？ ゲツチンゲン、一八九七年、二七頁。ゴーシエンの演說についてはロベート・マイエルもまた、Handwörterbuch der Staatswissenschaften の第二版、第二卷、三六六頁において自己の讀者に指示を與へてゐる。

ゴーシエンは彼によつて指摘された材料の偉大なる社會的意義に對する見解において全然コルレツトと一致してゐる。『私は知らない、——と彼は自己の聽衆に向つて言つた、——私によつて指示されてゐる統計學的數字が私に對してと同樣の印象を諸君に與へうるかどうかを知らない。私には、或種の人々が人爲的な社會改造を絶叫してゐるに反して、何か一種の暗默の社會主義のごときもの〻發展

が行はれてゐるかに思はれる。より廣汎なる局面における新しい富の分配の方向への暗默の動きが行はれつゝある、從つて、我々が如何なる見地からこの運動を觀察しようとも、それは、我が國民にとつての喜びの對象でなければならないと考へる。この運動は何等强制的なる方法によつて惹き起されたのではない。私によつて描出された結果は商業および工業の自由に基礎を置かれた社會における經濟的諸法則の確固たる活動によつて生じたものである……そしてこの自動的社會主義 (automatic socialism) の最良の方面は、それが、明かに、産業の沈滯期にさへも活動してゐるといふことの中に含まれる。損害および不景氣に對する一般的怨嗟に反し、失業および就業者さへもの賃銀の不當にかゝはらず、——社會の偉大なる中心は自己の經濟的地位を鞏固にしつゝあるのである。[1]』

註1 Journal of the R. S. S. Dec., 1897, p. 604.

諸君は、ゴーシエン自身が、他の聽衆と同樣に『社會の人爲的改造の叫び』の印象の下にあつたことを知る。この絶叫は事實において非常に聲高くイギリスにおいて、ゴーシエンの演說が行はれた當時、響き渡つたのである。それは勞働者の間に强力な動搖を惹起したところの、産業沈滯と失業との時代であつた。ロンドン、マンチエスタア、バーミンガム、レイスタア、ヤルムート等々において失業者大會が開催され、そこでは最も激烈な演說が行はれた。或る人々は當時、イギリスは正に社會革命の前夜にあると考へた。シドニイ・ウエツブは、或者は來るべき轉換の時機をさへ正確に、一八八九年、即ちフランス大革命の百週年であると斷言した、と言つてゐる。[1] この人々の昂奮は大臣達に對しても又一般に上流階級の人々に對しても鎭靜的に作用することは出來なかつた、そしてそれ故に、ゴーシエンが當時、經濟的諸現象の『客觀的研究』のためにはあまり幸福でない條件の中に在つたことを認めなければならない。しかし周知のごとく、眞理に對する愛は時として非常に力强い外的障礙に打勝つものである。ゴーシエンにとつて、確かに、道德的平靜と科學的冷靜とを保持することが非常に困難であつたとしても、それはまだ、彼が必須的に熱狂して、イギリスの經濟的發展行程を自己の階級的偏見の眼鏡を通して見なければならなかつたことを意味するものではない。それどころか、彼によつて發見された『自動的社會主義』は事實においても益々自己の道をイギリスの社會生活において拓り開きつゝあるかも知れない！ 一切の問題は、如何なる事實的基礎の上にイギリスの大臣の、緩漫なる、『暗默的な、しかしながら眞實なるこの社會主義の發展』に對する確信は打建てられてゐるかといふことにある。

註1 Socialism: True and False, Fabian, Tract. No. 51, p. 3.

彼の確信の事實的基礎は次のことにある。統計は一八七五年においてD欄[1]に登記されのだところ一

五〇乃至一〇〇〇フントまでの收入を獲た(個人および法人)の數が三一七、八三九に達したことを彼に示した、しかるに一八八六年にはそれが三七九、〇〇四にまで增大した、即ち一九・二六パーセント增加した。ところがその同じ期間において、一〇〇〇フント及びそれ以上の收入を得た人々の數は二二、八四八(一八七七年)から二二、二九八(一八八六年)にまで低減した、それは二・四パーセントの減少を意味する。統計數字のより詳密なる分析はゴーシエンに次ぎのやうな表を作成するの可能を與へた。

收入	一八七七年	一八八六年	增減
一五〇フントより五〇〇フントまで	二八五、七五四	三四七、〇二一	增 二一・四
五〇〇〃一〇〇〇〃	三二、〇八五	三二、〇三三	殆ど變化なし
一〇〇〇〃五〇〇〇〃	一九、七二六	一九、二五〇	減 二・五
五〇〇〇以上	三、一二二	三、〇四八	減 二・三

こゝからしてゴーシエンは、『普通の時期、產業不振の時においては、我々が經驗したところのそしてそれは開花期とは名付け得ない時期においてと同樣に、一〇〇〇フント以下の收入數の絶えざるそして高い程度において喜ぶべき增大が起つたこと』を結論したのである。

註1 この欄には工業および商業經營、外國および植民地における企業に放下された資本、及び自由職業から受取られる收入が記入される。不定期的なる貨幣收入もまた同じこの欄に記入される。

しかしイギリスの所得稅統計は中產階級に歸屬せしめうべき人々の全部をD欄に記入してはゐない。かゝる人々の多數がまたE欄に記入されてゐる、それには公共的な勤務に從事しつゝある官吏の外に、私人および企業會社の勤務者もまた屬してゐる。この欄の人々の數は觀察されつゝある期間の十年間において七八、二二四から一一五、九六四に增大した。ゴーシエンは、この增大もまた『社會の偉大なる中心』即ち中產階級の經濟的地位の鞏固化を立證するものであると考へてゐる。

これらの材料は、疑ひもなく、理論的には興味あるものである、しかしそれらは全くゴーシエンが彼等に歸せしめてゐる如き意義は持つてゐないのである。

第一に、すでにイサーエフ氏が指摘したやうに、一八七七年までの破產數(一八七七―一八八六年の十年間は大收入數の減少のためにあらゆる材料を提供した。『すべての商品價格の暴落、すべての事業における利潤の平均水準の半分に至るまでの低下、巨大なる破產數(一八七七―一八八六年の十年間は大收入數の減少た、しかるに一八七七年から一八八四年にかけては―一二、〇〇〇以上に達してゐる)、――すべてこれは、七十年代の半ばにおいて一〇〇〇―二〇〇〇フントの收入を持つてゐた富裕なる人々の大多數が、八十年代においては辛うじて五〇〇―一〇〇〇フントを保存するに過ぎず、五〇〇フント以上の收入を有した人々がより低い群へ、すなはち一五〇―五〇〇フントを所得とする納稅者の群に落ち

るといふ結果をもたらした。[1]』

註1　ア・ア・イサーエフ『經濟學の始源』第四版、六一九頁。

如何に產業不振の狀態がイギリスの國富の增進の上に反映したかは、次の數字が示してゐる、即ち一八六五年から一八七五年の間において資本總額はこの國において六、一一三百萬フント・ステルリングから八、五四八百萬フント・ステルリングに增大した、すなはちそれは四〇パーセントの增加である、しかるに一八七五―一八八五年の間においてはそれは八、五〇〇百萬フント・ステルリングから一〇、〇三七百萬フント・ステルリングに增大した、すなはち一七パーセント半增加したに過ぎなかつた。[1]

註1　R. Giffen―《Accumulation of Capital in the United Kiugdom》, Journal of the R. S. S. March, 1890, p. 151.

資本蓄積の緩漫なる行程が產業不振の時代における利潤の水準の低下によつて惹き起されたものであることは理解するに困難でない。既に利潤の水準の低下といふ一事だけで所得稅負擔者の上級から下級への移行には充分であるであらう。しかし注意したければならないことは、利潤の水準の低下が決して企業の異れる種類において一樣ではなかつたことである。特に激烈にそれは工業方面に現はれた、工業的生產に直接關係を有しない企業にあつては、それは遙かに微弱であつた。譬へば、小賣商人達は殆どそれに對して不平を鳴らさなかつた。同樣に自己の資本を外國に、譬へば、外國公債、等々に投じてゐる人々もまた殆どそれの影響を蒙らなかつた。產業不振の調査のために任命された委員會の委員達の中の一人は[1]、外國におけるイギリス資本の下を、事業の沈滯にかゝはらず、課稅さるべき所得總額が增大したといふ一見不思議なる現象の原因の一つとして指摘してゐる。この總額の增大はやはり大收入の低減によつて伴はれたのである故に、外においても、比較的に小程度の資本が放下されてゐたものと考へなければならない。正にさういふ風に委員會の少數派は考へてもゐるのである。『D欄における小收入數の大なる增加は、確かに、著しい程度において、大資本を要する大企業がそれに屬するところの工業は收入をもたらさなかつたのに反して、商業、特にその大部分が僅小の資本をもつて行はれるところの小賣商業が利潤をもたらしたことから生じたのである。[2]』

1　Final Report of the R. Commission appointed to inquire into the depression of Trade and industry, 少數派の意見、第四十二頁を見よ。

註2 Ibid, p. XLIX. 商業の比較的好況は工場生産品の價格の暴落によつて説明される。

すでにこれらの考察によつてイギリスの大藏大臣の『自動的社會主義』は自己の『驚歎性』と『慰藉性』の極めて著しい部分を喪失する。しかしそれは我々の眼には、若しも我々が、課稅された(D欄の)所得總額の增加の更に他の一つの原因として現はれたのは、單に行政機關によるより綿密なる住民の所得調査であることを思出すならば、尙ほ一層哀れなるものとなるであらう。この原因の指摘においては委員會の多數派はその少數派と一致してゐる。しかし多數派が、この原因を認めながらも、如何にそれが『中位の』收入の部類に記入されたものゝ數に影響を及ぼしたかを問題にしてゐないのに反して、少數派は全く正當にも、それは以前容易にこの部類から脫落してゐたところの新しい富裕ならぬ納稅者の多數を所得稅負擔に追ひ込むことによつてそれを增加させざるを得なかつたと言つてゐる。[1]

註1 Ibid, p. 1.

かくてゴーシェンの喜ばしい結論の事實的根據は全く無力なるものとして現はれる。全く同樣に富裕者と貧困者との間の懸隔の減少は確信的にゴーシェンによつて證明されたと考へてゐるところの、『社會平和』の親友達の愉快なる確信もまた、勿論、無力なるものとして現はれる。

讀者は尙ほ次ぎのことに留意されんことを希望する。ゴーシェンは多大の稱讃をもつて產業不振の原因を調査した委員會の、我々によつて引用された最終報告について語り、委員會が到達した結論が讀書社會の當然の注意を惹かなかつたことを非常に遺憾としてゐる。[1] 彼自身はこれらの結論をよく研究して、そしてそれを自己の聽衆に完全にまた最も詳細に亙つて傳へてゐると期待することが出來る。しかし事實においては我々は全く別のものを見るのである。彼は甚だ不眞面目に上述の報告を取扱ひ委員會の少數派がそれについて、その意義は決して一見して然か思はれる如きもの、また最終報告が發表されて間もなく、ゴーシェン自身がそれに歸した如きもの、ではないと直截に宣言してゐるそれらの統計材料をば、一切の但し書なしに、利用することを可能なりとした。少數派の宣言については『尊敬に値する』辯士は聰明にも自己の演說において沈默を守つた。かくも彼の『客觀性』は鞏固で確實であつたのである。

註1 Journal of the R. S. Society, Dec. 1887, p. 591.

ゴーシェンは勞働者の動搖の强烈な印象の下にあつた自己の聽衆を皷舞せんと欲した、そこで彼は最初に出遭つた數字を捉へて、この聽衆の面前に、新しい形式において、以前にケリー・パスチア、

及びその他の、彼等に類する、資本主義の代辯者共が述べたところのその同じ理論を述べ立つたのである。聽衆は歡喜した、そして最も感動的な表現をもつて辯士に感謝した。聽衆に次いでは、シュモラーおよびシュルツエ・ゲーヴアニツツの種類の大陸の學者達も歡喜した。これらの『客觀的な』科學人達にはイギリスの大臣の結論を批判的に討檢することなどは問題でなかつた。彼等もまた、バスチアの驚歎すべき且つ慰藉的な法則が新しい材料の助をかりて確證されうるのを聽くのは愉快であつた。そこで、一とたびゴーシエンの議論がシュモラー、シュルツエ・ゲーヴニツツ、及びその他の保險付きの『學者』によつて恭々しく迎へられた以上、マルクス主義の『批判者達』は、よく言はれるやうに、最早神自身が『中位の收入の增加』の結果としての、社會的矛盾の鈍ぶりを絶叫すべく命令したのである。彼等の專門は正にマルクスの『批判』にある。

四

ゴーシエン自身も彼によつて『自動的社會主義』の成功に關する自己の報告の基礎に置かれた數字が、全く非立證的であるのを感じてゐた。それゆゑ、彼は間接的な考察の助をかりて自己の結論を確かなものにしようと努力した。これらの考察の中の一つには我々は、イギリスにおける勞働者階級の狀態について語るであらう時に觸れることにしよう、が他の幾つかのものは我々はこゝで吟味しなくてはならない。

『年と共に、——とゴーシエンは言つてゐる、——益々大なる人々の數が株式會社に關係し、かくして、廣汎な工業的および商業的活動によつて創造されつゝある富の一部を獲得しつゝある。』[1]

註1 Ibid, p. 507.

シュルツエ・ゲーヴアニツツ及びその他の『社會平和』の使徒達によつて捉へられたこの考察は、周知のごとく、或種の社會主義者たちに强い印象を與へた。譬へば、ベルンシュタイン氏は、『株式社會の形態は、生產の集中化による資本の集中化の中に含まれる傾向に著しく反作用する』といふ確信に到達した。彼は、『若しも經濟學者、社會主義の反對者たち、が現代の社會關係を粉飾する目的をもつてこの事實を利用したとしても、このことからは社會主義者達がこの事實を隱蔽し或は否認しなければならないといふことにはならぬ。問題はむしろその眞實の意義とその普及とを承認することにある。』[1]

註1 エ・ベルンシュタイン——『史的唯物論』エル・カンツエリ譯、第二版、八四頁。

事實を隱蔽し或は、それが證明されてゐる時に、それの存在を否認することは、非常に滑稽なこと

でありまた絶對的に無意味である。しかし事實は一事であり、その社會的意義は――はまた別の一事である。ゴーシエン及びシュルツエ・ゲーヴアニツツに次いでベルンシュタイン氏によつて指示されてゐるところの、事實の社會的意義は、極めて種々に理解されうる。ブルジョア學者たち及び彼等の後から隨いてゆくベルンシュタイン氏は、株式會社の普及は財産の集中化および富者と貧者との間の懸隔の增大の新しい動因であるかも知れないし――また實際さうであることに、注意を拂はなかつた。ゴーシエンの演說において語られてゐるその同じ時代の經濟史の中から取られた例をもつて我々の思想を說明しよう。

周知のごとく、イギリスにおける株式會社數の增加は有限責任の會社の設立を許可した立法（Limited Liability Acts）によつて非常に容易にされた。產業不振の原因の調査のために任命された委員會が活動を開始した時分には既に、新しい法律の經濟的結果は充分なる明白さをもつて露れてゐた。何をそれについてこの委員會は語つてゐるか？

その多數派の言葉によれば、『有限責任は自己の經營に對して無限責任を負はされた企業家がそれに傾くかも知れないところのものよりも遙かに不注意な、若しくはより多く投機的な事業の執行を惹き起す。その結果として、有限責任に際しては、生產は屢々普通の企業家であつたならば自己の範圍を縮小することを餘儀なくされるであらうやうな低い利潤の場合にも行はれてゐる。これらの會社の著しい數の消滅によつて原因された資本の喪失さへも、その經營の縮小の意味において期待さるべき一切の影響を惹き起さなかつた、蓋し損害が人々の大なる數の上に擴大され、從つてまたそれほど痛切に感ぜられないからである。加之、倒壞した事業の廢墟の上には絶えず新しいものが發生して、舊きもの〻財產を二足三文に買つて、從前の規模において生產を行ふ可能性を受取るのである。[1]』

註1　Final Report, p. XVIII.

委員會の少數派はこの場合まつたく多數派と一致してゐる。彼等の意見によれば、責任が有限であることは『發起人』（promoters）なる特殊階級の出現を促した、彼等は小金額の所有者の無經驗と無防禦とを利用して、最初の機會を捉へて、彼等によつて着手された事業が如何なる運命に遭遇するかに關してはすこしも配慮することなく、自己の株式を轉賣する爲めにのみ事業を創めるのである。[1]

註1　Ibid, p. LVII.

我々はこの種の『自動的社會主義』が社會的矛盾の『鈍ぶり』に著しく作用することが出來るだらうとは考へない。再生產および投機は經濟的に弱者である者の荒廢と濁つた水の中で魚を捉へる術を辨へてゐる一握の小才子たちの致富の有力な盡力者で常にあつたしまた常にあるであらう。

ゴーシエンはまた、彼によつて觀察されつゝある時期における、貯金局への預金の増加を、彼にとつて貴重なる『暗默の社會主義』の徐々なる、しかし確實なる勝利の現はれの一つとして指摘してゐる。[1] しかし若しも彼が、彼自身かくも執拗に自己の聽衆の注意を促したところのその報告を注意して讀んだならば、彼によつて指摘された事實は全く別の、しかもその際遙かに『慰藉的』ではないところの解釋を許すに過ぎないことに同意せざるをえなかつたであらう。特殊意見に止まつてゐた委員會の一員ア・オコンネルが正當にも陳述してゐるやうに、貯金局への預金數の増加は（産業不振の結果としての）生産事業への小資金の放下の可能性の減少によつて惹き起され得たのである。[2] この事實のかゝる確實以上に確實なる説明を俟つて、初めて貯金局への預金數の増加が勞働力に對する需用の減退と手に手を繋いで行つた事情が全く了解される。

註1 Journal, Dec., 1887, p. 602.

註2 Final Report, p. LXXII.

かゝる社會主義が如何に『暗默的で』また『自動的で』あらうとも、その中には常に慰藉的なるものは非常にすくないであらう。

今や我々は暫くゴーシエンに別れを告げて他のイギリスの權威者、正に統計學者ミュールホルに向ふことが出來る。

自己の《Dictionary of Statistics》（『統計辭典』）中にミュールホルは二、〇〇〇フント・ステルリング及びそれ以上の所得の數の増加に關する次のやうな材料を上げてゐる。[1]

註1 Dictionary.

年代	所得數	人口百萬に對して
一八一二年	三九、七六五	三、三一四
一八五〇年	六五、三八九	三、一一五
一八六〇年	八五、五三〇	二、九四九
一八七〇年	一三〇、三七五	四、二〇六
一八八〇年	二一〇、四三〇	六、三一三

五〇〇〇フント・ステルリング以上の所得數は次のやうに増加した。

年代	所得數	人口百萬に對して
一八一二年	四〇九	三四
一八五〇年	一、一八一	五六
		三三

一八六〇年	一、五五八
一八七〇年	二、〇八〇
一八八〇年	二、九五四

これらの材料の中の或るものを相互に對置することによつて、我々は次のごとき表を受取る。

人口百萬に對して

	一八六〇年	一八八〇年	增加率
巨富……五三	五三	八八	六六%
中産……二、九四九	六七	六、三一三	一一二%
	八八		

『これは、——とミュールホルは言つてゐる、——富める者は日毎に富むといふ流行の意見に反して、富の分散を示すものである。[1]』

註1　一八六〇年までは材料は大ブリテンに關係し、一八六〇年以後は——統一王國全體に關係する。

非常に結構でありまた極めて慰藉的である。しかし、その同じミュールホルと別の機會に別の事情の下に話をして見ると、我々は彼からあまり結構でないまた遙かに慰藉的でないところの事柄を聞かされるのである。

或種の計算を基礎として彼は統一王國の富は、次のやうに分配されてゐることを認めてゐる。

階級	人員	一人當りフント	百萬フント
貴族……	327,000	28,000	9,120
中産……	2,380,000	900	2,120
勞働者……	18,210,000	31	556
兒童……	17,940,000	—	—
全人口……	38,857,000	302	11,806

これらの數字は何を示すか？　正に次のことを示す。『國の全體の富の約八〇パーセントが成年人口の一パーセント二分の一の手に握られてゐる。中産階級は住民の一一パーセントを占め富の一八パーセントを自己の手に集中してゐる。[1]』勞働者階級についてはミュールホルに最早何事をも語つてゐない。彼等の分前として與へられてゐる碎屑はあまりにも哀れであり、あまりにも蕞爾である！　結果は『富の分散』が、我々をたつた今ミュールホルが信じさせたばかりのやうには、最早それほど有力なるものでないことゝなる。遺憾である！　非常に遺憾である！　我々は非常に愉快な氣持になるところであつたのに。しかし更に進んでわが統計學者に聞くことにしよう。『富の分散』が以前には如何に行はれてゐたかを彼に訊ねて見よう。[2]』

註1　Industrial and Wealth of Nations, by Michael G. Mulhall, London 1896,

註2　前記の結論は一八九三年の十二月に終る五年間に關係する材料に基礎を置かれてゐる。

彼自身の計算に從へば、[1]若しも我々が一八四〇年において五、〇〇〇フント・ステルリングを超過せる大資産の數を一〇〇とするならば、我々は一八七七年にはそれが二二三、また一八九三年には二七〇に達したのを見るのである。しかるに、一八四〇年に一〇〇から五、〇〇〇フント・ステルリングに至るまでの資産數を一〇〇とすれば、我々は一八七七年には僅かにそれが二〇三となり一八九三年には僅かに二四九に達したのを見るのである。がこれは『五、〇〇〇フント・ステルリング以上の資産がこの數字に達せざるものよりも遙かに急速に增加したこと、——現象は期待とは全く正反對であること、——そしてこの（上層への——ゲー・ペー）富の集積は、明かに、益々强力なるものとなりつゝあること』を意味する。[2]正にかくの如き『分散』！　ミュールホル自身これに當惑せるもの、如く。彼は急いで我々を次の表によつて慰めて居る。

	一八四〇年	一八七七年	一八九三年
人口	一〇〇	一二六	一四六
一〇〇フント以上の資産	一〇〇	二〇五	二五一

註1　以下において我々はこの計算が微弱な程度において發展の眞實の行程を反映してゐるに過ぎないことを見るであらう。

註2　Ibid., p. 100-101.

五十年間に人口は四〇パーセントを增加し、一〇〇フント・ステルリング以上の資産を有する人々の數は一五一パーセントを增加した。『換言すれば、貧困以上である社會階級が、一八四〇年から始めて、人口總數よりも三倍急速に增加したのである。[1]』

註1　Ibid., p. 101.

以下において我々はより詳細にこの慰藉の慰藉性を分析するであらう。が今は差當り讀者の注意をイギリスにおける勞働者階級の狀態に關するミュールホルの次ぎの如き言說に向けるのであらう。『勞働者階級の狀態の改善は貯金局への預金數の增加から見て明かである。それは一八五〇年においては統一王國の四パーセント以下であつたものが、今や一九パーセントにまで達してゐる。しかも、我が大都市における貧困階級の困苦は今日曾て見られなかつたほどに著しいのである。この階級の狀態については、それがボツテントツトの狀態よりも劣惡であると言はれたが、至言である。[1]』

註1　Ibid., p. 101-102.

ロシヤ語ではかういふことを生れたといつては飲み、死んだといつては飲むといふのである。

五

我々は今日、ゴーシエンの『暗默の社會主義』と同樣に、ミュールホルの『富の分散』もまた何等か極めて幻想的なるものであつたのを見るのである。ミールホル自身、富が益〻社會の上層に蓄積されつゝあることを承認しなければならなかつたのである。しかし若もそれがさうであるならば、社會的矛盾は、經濟的方面からそれが觀察される場合『鈍ぶらない』ばかりでなく、益〻增大する筈であるミュールホルはこの結論を『鈍ぶらさう』として、イギリスにおいては一〇〇フント・ステルリング以上の財産を有する人々の數が、人口に比して、著しく急速に增大しつゝあるといふことを指摘してゐる。今やこの疑はしき慰安をより注意深く觀察すべき時である。

富裕、中產、及び貧困の三階級から構成された社會があると假定しよう。簡單にする爲めに、貧困階級は專ら自己の勞働力を賣ることによつて生活し、中產階級は商業に從事し、富裕階級は資本家・企業家および地主から成るものとし、貧困階級の人口は一〇〇〇、中產階級のそれは——一〇〇、富裕階級のそれは一〇に等しいと假定しよう[1]。社會所得の分配に際してこれらの階級の各々への分前として獲られる分量を我々はAをもつて表はすことにしよう。從つて、社會の總收入は 3A に等しい。富裕階級の成員は平均して中產階級の成員よりも十倍富んでをり、中產階級の成員は貧困階級の成員よりも平均して十倍富んでゐる。かくの如きは與へられた時代に於ける、譬へば、一八七五年における諸階級の相對的境遇である。

註1　人口——は戶主、或る一定の所得の受取者である。

二五年經つ。社會所得は增加する。そして各々の社會的階級の分前としては今やすでに A ではなくして、2A が獲られる[1]。我々はそれ故に、各社會階級の經濟的福祉は二倍に增進したと言ふことが出來る。しかしこれらの階級の相互關係は無變化に殘つた、依然として富者は中產者よりも平均して十倍富んでゐる、中產者は貧困者よりも平均して十倍富んでゐる。この點から見て我々は我々の社會における『富の分散』についても、社會諸階級間の矛盾の鈍ぶりの意味において收入の分配を變更する『自動的社會主義』についても語るべき何等の權利も有しない。この結論を銘記しよう、そして先きへ進まう。

註1 計算を複雑にしない爲めに、我々は最初、人口がこの期間内に増減しなかつたものと假定しよう。

我々の社會に、一〇〇フント及びそれ以上の收入を受けるすべての人々によつて支拂はるべき所得稅が存在すると假定しよう。同樣にまた、富者および中產階級にはその所得が一〇〇フント以下であるやうな者は一人もなく、その代りに貧困者階級にはその所得がこの數字に達するやうな者は一人もないとし、從つてこの最後の階級の誰もが一八七五年において所得稅を拂つてゐないと假定しよう。二五年を經て、各社會階級の所得が二倍した時に、事態は果してどうなるであらうか？

若しも我々が、第一に、二五年前には貧困階級に、五〇以上一〇〇フント以下の年收ある二五〇人が屬し、第二に、各階級內の收入分配が一定したものであると假定するならば、今や貧困階級には一〇〇以上二〇〇フント以下の收入を受け、從つて所得稅納付の義務ある二五〇人が現はれる。かくて富裕ならぬ所得稅納付者の數は、如何なる『富の分散』も發生せざるに拘らず、增大する、何となれば富者は依然として中產者よりも一〇倍富んでゐるからである。

如何なる程度において富裕ならぬ所得稅納付者の數は殖えるか？

それは、勿論、中產階級內における富の分配に依存するであらう。二五年前にこの階級の成員中に五〇〇―一〇〇〇フント・ステルリングを獲てゐた人が二五名あつたと假定しよう。かゝる場合、この階級の收入が（この收入の不變の分配に際して）二倍になつた後は、これらの二五名はもはや一〇〇以上二〇〇〇フント以下を受けることゝなる。一〇〇〇フント以上を受ける者を多額納稅者と名付けると假定すれば、我々はかゝる納稅者の種類に中產階級に所屬する人々の中から今や二五名が入り込むのを見る。それは富裕ならぬ納稅者の總數（又は、他の言葉で言ふなら、《moderate incomes》――『中位の收入』の總數）が今や三二五に等しいであらうといふこと〔以前の數（一〇〇）から殘留した七五人と勞働者階級に所屬した新しい二五〇人〕、即ち二二五パーセント增加したものとして現はれるであらうことを意味する。

更に計算を進めよう。一〇〇〇以上二〇〇〇フント・ステルリング以下の收入ある商人階級の二十五人は今や工場主および地主より成る上層階級の人々と同一の種類に、多額納稅者表に姿を現はすであらう。かゝる人々は我々の場合においては一〇名あつた。これに中產階級からの二五名を合はせる時、我々は多額納稅者の數が今や三五に等しく、二五〇パーセントの增加であるのを見出す。

多額納稅者數は我々の場合において『中位なるもの』よりも幾らか急速に增加してゐる。しかし我々の假定的の材料をすこしく變更するならば、反對の結果が得られるであらうことは容易に看取しうる。

事實において、一八七五年において我々の場合に五〇〇以上一〇〇〇フント以下の收入あつた人々が一〇人に過ぎなかつたとしよう。二五年の經過と中產階級の收入の倍加の後にはこれらの一〇人は

一〇〇〇以上二〇〇〇フント以下を受くるであらうし、それ故にまた所得稅の多額納稅者の部類に入り込むであらう。彼等の數を從來からの多額納稅者の種類の我々が知つてゐるやうに、同じく一〇に等しいところの數に加へる時、我々はこの種類のすべての納稅者が二〇となるのであらうことを見る、がそれは彼等の數が一〇〇パーセントだけ增加したに過ぎないことを意味する。『中位の』納稅者數の遙かに急速なる增大の結果として我々は『自動的社會主義』について絶叫し、無批判的『批判者たち』を、マルクス的『獨斷』は陳腐になつた、云々なる思想に導くべき可能性を受取る。しかし事實において我々の場合においては如何なる『富の分散』も起らなかつたし、各々の社會階級は國民所得の自己の從來通りの分前を受けてゐるではないか。

全く同樣の『喜ばしい』結論を、——ゴーシェンの意味における、——我々は、工業家および地主の階級內における財產の集中化が商人階級內におけるそれよりもより急速に行はれると假定したる後、受取ることが出來るであらう、このことは、——全然マルクス的『獨斷』の一切の凌辱なしに、全く在り得べきことであり、また最も高い程度において確實なことでもある。[1]

註1 『小賣商業が今日產業革命を通過しつゝあるのは、工場手工業がこの世紀の初頭において經驗した所に似てゐるものがあり、小賣店主は手機織匠の同類語である、——とマクロスティは自己の興味ある《The Growth of Monopoly in English Industry》(Fabian Tract No. 88, p. 3) の中で言つてゐる。今や、『產業革命』が小賣商店主を捉へた以上、集中化は小賣商業の領域において急速度をもつて進むであらう、このことにまたマクロスティの小冊子において證明されてもゐるのである。しかし小賣商業が『產業革命』によつて觸れられなかつた間は、集中化は必然的にそこでは生產業の領域においてよりも遙かに徐々に行はれなければならなかつた。この事情はまた『中位の』收入の增加に影響せざるを得なかつた。

これまで我々は、國民所得の增加に際して各社會階級の分前が變動せざるものとして假定して來た。今度は異れる階級の所得の等しからざる增昂が所得稅納入者の表に如何に反映するかを見よう。

社會所得が四倍になり、次のやうに分配されると假定しよう、すなはち勞働階級は 2½ を受取り、中產階級は—— 4A, 上層階級は—— 6½ を受取る。勞働階級の所得が二倍になつてもその中には、——我々の以前の假定においてと同樣に、——百フント及びそれ以上の所得を有する二五〇人があるであらう。これらの人々は今や所得稅を拂はなくてはならない、從つて、自からをもつて『中位の』を增加する。中產階級は以前はすべてこの『中位の』種類に屬してゐた、しかし今や、中產階級の所得が四倍となつた後においては、その成員達の著しい數は多額納稅者の種類に推し移るであらう。この數は如何に增大するであらうか？ 若しも我々が、以前に中產階級の間に二五〇以上五〇〇フント以下の收入のあつた人々が二五人あつたと假定すれば、今や（中產階級の四倍になつた所得の各成員間における分配に變化なきものとすれば）これらの二五人の各々は一〇〇〇以上二〇〇〇フント以下

の所得を獲ることゝなり、即ち富まざる納税者と多額納税者とを劃する一線を越えるであらう。しかしこの階級の中にはその他に、我々の以前の假定に從へば、五〇〇以上一〇〇〇フント以上の收入のある二五人があつた。中産階級の所得の四倍に際しては、これらの人々は二〇〇〇以上四〇〇〇フント以下の收入を各自が受取ることになり、そしてそれ故に一層大なる根據をもつて多額納税者に合算されるであらう。從つて、中産階級の人口の中から唯五〇（一〇〇—二五—二五）人だけが『中位の納税者の種類』に殘留することゝなるであらう。これらの人々の數を下層階級からの富んでゐない納税者の數（二五〇）に加算する時、我々は、富んでゐない納税者の總數が今や三〇〇（五〇プラス二五〇）に等しく、二〇〇パーセントの增加に等しいのを見出す。

多額納税者の種類に移る時、我々は彼等の以前の數、一〇に、今や尙ほ五〇（一〇〇〇以上二〇〇〇フント以下の所得を有する二五人と）が加はるであらう。その總數は六〇にまで達し、增加率は五〇〇パーセントである。

若しも我々が、集中化が富んでゐない納税者の數を二五〇まで減じ、多額納税者の數を五五まで減ずると假定するなら、『中位の』所得總數は一五〇パーセントだけ、が多額納税者の數は——四五〇パーセントだけ增加したことゝなるであらう。

しかし我々は、人口の增殖を考慮せずして議論を進めてゐる。人口は、（一）社會所得よりも迅速にか、（二）それと同速度にか、（三）それよりも緩漫にか、增殖する。我々にとつてこの場に興味あるのは資本主義的現實に相應する第三の場合だけである。この場合を觀察しよう。

我々の社會の成員數が五〇年間に二倍となり、それに對して社會所得が四倍となり、從つて今や125に等しく、その際勞働階級によつては 25、中産階級によつては 45、上層階級によつては 65 が獲られると假定しよう。二倍になつた勞働階級の所得は今や二倍となつた人口數の間に分配される故に、（この階級の內部における分配を不變であるとすれば）各個別的の勞働者の福祉は增進されず、そしてそれ故に勞働者の如何なる層も所得稅納付者數には入り込まぬであらう。

中產階級においてはさうはならぬであらう。こゝでは所得は四倍したに反して、人口は二倍したに過ぎなかつた。各人は個別的に以前よりも二倍富めるものとなるであらう。一〇〇〇以上二〇〇〇フント以下の所得を受くる人々の數は、今や五〇となるであらう。これらの五〇人は今や多額納税者の部類に入れられ、殘餘の一五〇（二〇〇—五〇）は富んでゐないもの〻部類に止まるであらう。『中位の』所得數が五〇パーセントだけ增加することを意味する。

上層階級には以前一〇人の納税者があり、彼等は依然として、云ふまでもなく、多額の部類に屬してゐた。人口二倍の結果として彼等は二〇となつた。これらの二〇に多額納税者の部類に移つた中産階級の五〇人を尙ほ加へる必要がある。總數は——七〇（二〇プラス五〇）、增加は——六〇〇パーセントである。

財産の集中化が多額納税者數を五五まで減じたと假定してさへも、我々はやはり四五〇パーセント

に達する多額納稅者數の至大の增加の事實に當面するのである。

これらの、確かに死ぬほど讀者を苦しめたに相違ないところのすべての例は、果して何を證明するであらうか？

彼等は、就中、次のことを證明する。

一、社會所得の增大によつて條件づけられる富まざる納稅者數の增加は、それ自體としては決して『富の分散』をも又は『自動的社會主義』の成功をも立證するものではない、何となればそれは全く社會的富の分配における不平等の至大の增大と共存的であるからである。

二、社會の上層階級における財產の集中化が激しければ激しいほど、富裕ならぬ納稅者數の增加は際立つて來る。或る場合においては《moderate incomes》（『中位の收入』）の數は、社會的不平等の同時的なまた極めて強力な增大にかゝはらず、大收入數よりもより迅速に增加するであらう。

三、現代の資本主義社會においては中位の收入數は、人口總數よりもより迅速に增加しつゝある。しかしこゝから富の分散および社會的不平等の減少を結論する事は最も完全なるかつ羞づべき無理解を曝露することを意味する。現代社會における國民所得の分配に關する問題の眞面目な說明のためには何よりも先づ、如何なる割合においてこの所得が觀察されつゝある期間に增加したかまたその增加が如何に個々の階級間に分配されたかを決定することが必要である。分散を說き、人口の增殖を中位の收入數の增加に比較してゐる人々は、全く何物をも上述の決定のために寄與しないのである。[1]

註1　譬へば、ベルンシュタインの『史的唯物論』八七頁および以下を見よ。去年ルイジー・ネグリは專門的に資本主義社會における集中化の問題に獻げられた勞作（La centralizzazione capitalistica, Torino 1900）を發表した。彼はそこで克明に集中化を遲らせるそのすべての原因を數へあげてゐる。しかし不思議なことには彼は集中化をぼかしてゐる諸原因については何も述べてゐない。しかし、かゝる諸原因は存在するのである。彼等の中の最有力なるものとして現はれてゐるのは上層社會層における急速なる富の蓄積である。

それ故に彼等の議論は彼等自身の薄弱さ以外、何物をも示さぬのである。

若しも我々がこれらの結論の見地からミュールホルによつて彼の《Dictionary of Statistics》（『統計辭典』）に引用されてゐる材料を觀察するならば、我々は容易に、如何にしてまた何故にこれらの材料が他の、明かに、全く反對の意義を有する材料と折合ふことが出來るかを理解しうるであらう。

ミュールホルは、イギリスにおいては一〇〇フント・ステルリングの財產を有する人々の數が人口よりも著しく迅速に增加してゐると言つてゐる。そしてこのことは正しい。しかしミュールホルはこの際、如何に急速にイギリスの國民所得が增殖しつゝあるかを自問してゐない。事實においてこの所得はミュールホルによつて指示された部類の人口數よりも遙かに急速に增大してゐる、そしてそれ故にこの數の增大は遙かにそれよりも急激なる社會的不平等の增大と手を携へて進んでゐるのであつて、

このことについては同じミュールホルによつて彼の著書《Industries and wealth of Nations》（『産業と諸國民の富』）の中に報告されてゐる材料が全然明白に語つてゐる。成程、彼によつて《Dictionary of Statistics》（『統計辭典』）に引用された材料は、さながら、『中位の』收入がイギリスにおいて大收入以上に急速に增加してゐることを示してゐるかに見ゆる、しかし、第一に我々はすでに今や、若しもそれがその通りであるにしても、こゝからはまだ『富の分散』までは非常に遠いであらうといふことを知つてゐる、第二に、我々には、七十年代の後半が一時的な大收入の低減と、從つてまた、一時的な彼等の數の減少をも惹き起したところの非常なる產業不振によつて表徵されたことが知られてゐる。我々はそれ故に、如何にしてまた何故に一方においては一八六〇年に關する數の比較が、大收入數に比較しての『中位の』收入數のより急速なる增加を示すかを理解するのである。しかし若しも我々がより持續的な期間における經濟的發展の全體の結果を比較するならば、一時的な停滯にかゝはらず、大收入數が遙かに急速に中位のそれよりも增大したことを發見するであらう。事實において、ミュールホルのその同じ表は、一八一二年においては二〇〇フント・ステルリング以下およびそれ以上の所得を有する人々がイギリスの人口一百万に對して三一四であつたものが、一八八〇年においては六、三一三となり、即ち彼等の數が二倍にさへもなかつたのに反して、五、〇〇〇フント・ステルリング以上の所得ある人々の數が一八一二年における三四から一八八〇年における八八にまで增昂し、一六三・六パーセントの增加であつたことを示してゐる。

これらの數字は社會的富の分散を語つてゐるミュールホルを完全に反駁し、『五、〇〇〇フント・ステルリング以上の資產はこの數に達せざるものに比して遙かに迅速に增殖した』ことを指摘してゐるミュールホルの言葉の正當性を完全に確證してゐる。

『それ自體としては數字は決して嘘を言はない、——とゴーシエンは上に我々によつて研究された演說において陳述した、——しかし何人も他の何等かの目的のためにそれを惡用するほどに容易なることは何物も存しないといふことを承認しなくてはならない。』この場合我々はゴーシエンに全然同意する。まことに、數字は嘘を言はない……

六

我々の例において我々は假定的な材料に依據して來た。今や現實に向ふべき時である。讀者が次の表に注意されんことを希望する。それは一八四三年から一八七九—一八八〇年に至るまでの間におけるイギリスの種々なる所得種別の增加を示すものである。

所得（フント・ステルリング）	一八四三年	一八七九—一八八〇年
五〇〇以上五、〇〇〇以下	一七、九九〇	四二、九二七
五、〇〇〇〃一〇、〇〇〇〃	四九三	一、四三九

一〇、〇〇〇〃五〇、〇〇〇〃
五〇、〇〇〇以上

五〇〇以上五、〇〇〇フント・ステルリング以下を受けてゐた人々の數は、二倍以上になつた、五、〇〇〇以上一〇、〇〇〇フント・ステルリング以下の人々の數は殆ど三倍になつた、毎年自己のポケットに一〇、〇〇〇以上五〇、〇〇〇フント・ステルリング以下を收める富豪の數は、殆ど四倍になつた、最後に、五〇、〇〇〇フント及びそれ以上を年收としつゝある百萬長者の數は、八倍に增加した。[1]

註1　Industrial Remuneration Conference に關する報告の中に印刷された、Loss or gain of the working classes during the Nineteenth Century なるエ・シムコックス夫人の甚だ興味ある覺書への附錄Aを見よ。London, p. 96-97.

かくて如何なる疑ひもあり得ない、國民所得の分配における不平等はイギリスにおいて上述の期間に甚しく增大した。『富の分散』はそれ故に、『好意の』虛僞以上の何物でもない。

成程、この同じ期間内に一五〇以上五〇〇フント・ステルリング以下の所得ある人々の數は三倍以上になつた。この、――最も內輪な、――部類の納稅者の數はこれに直接續く二部類の納稅者の數よりよりも迅速に增加し、第四種（一〇、〇〇〇―五〇、〇〇〇フント・ステルリング）および第五種（五〇、〇〇〇およびそれ以上）にのみ後れたことゝなる。[1] 多少善意に解して、或は、この點に關して納稅者の中流層における富の分散について數言を費すことが出來るかも知れない。しかし今や我々は我々によつて指摘された現象が『富の分散』に全く何等の關係を有しない多くの原因によつて惹き起され得たことをよく知つてゐる。その上我々のところには最高の二つの部類に屬する納稅者數の尙ほ一層迅速な增加の事實が現存してゐる。從つて、社會的不平等の增大は我々にとつて一切の疑ひが殘らぬのである。[2]

註1　一八四三年においては最下級の納稅者の數は八七、九四六であつた、が一八七九―一八八〇年にはそれは二七四、九四三にまで達した。

註2　我々によつて引用された數字は無條件的にゴッシェンを反駁してゐるので、我々はイギリスの大臣によつて指摘された、E欄に記入された所得數が一八七五―一八八六年の期間內に著しく增大したといふ事實の意義の詳細な檢討をもつて讀者の注意をくるしめる必要があるとは考へない。唯だかういふことだけを言つて置かう、即ちそれは資本主義の發達は必然的に株式會社におけると同樣に私人經營における勤務者數の增加を前提することである。しかし正にこの增加は社會的不平等の强化をもたらすのである、正にそれが大收入が一般的に『中位の』それよりも遙かに急速に增殖するといふ結果に導いてゐるのである。

同樣の增加を我々は他の資本主義國においても見る。チユリツヒ州においては一八四八―一八八五年の期間において種々なる額の資産が次のやうに增加した。

資産	一八四八年	一八八五年	增加
五、〇〇〇フランから五〇、〇〇〇フランまで	九、一〇〇（約）	一七、〇〇〇	九〇%
五〇、〇〇〇〃五〇〇、〇〇〇〃	九三〇	二、六〇〇	一八五〃
五〇〇、〇〇〇フラン以上	三〇	一九〇	五三〇〃

バーゼルにおいて、グラリスにおいて、ブレーメンにおいて、ハンブルグにおいて、サキソニヤ王國において、及びプロシヤにおいて種々なる額の財産を表示する數の間の同樣の關係が認められた。サキソニヤ王國においては一八七九―一八九〇年の期間において九、六〇〇マルク以上の所得數は一〇〇パーセント增加し、一〇〇、〇〇〇マルク以上の所得數は――二二八パーセント增加した。[1]

註1 シヨーンベルクの《Handbuch der Politischen Oekonomie》中のナイマンの《Wirthschaftliche Grundbegriffe》を見よ。I, Bd., 4 Auflage, S. 186.『一般に、――とウエーメルは言つてゐる、――サキソニヤに關する材料を基礎として、二、一〇〇（二、二〇〇）以上九、五〇〇（九、六〇〇）マルク以下の中產階級の所得は絶對的な意味においては著しく增加してゐるが、しかしその所得總額に對する百分比は著しく低下してゐることを認めうる。かくてこゝにまた帝國に關する材料を基礎として中程度の生產のために設定しうる發展の同じ行程が認められるやうに思はれる。』Die Vertheilung des Einkommens in Preussen und Sachsen. Dresden 1898, S. 12.

プロシヤに對しては我々はこの他に尙、エンゲルの驚くべき表を有してゐる。一八四五―一八七三年の期間に各種の納稅者數は次のやうな增加を示した。

納稅者數の增加		
第一種	一、〇〇〇――	一一〇・二%
第二種	三、二〇〇〃	一三二・三〃
第三種	六、〇〇〇〃	一五三・九〃
第四種	一二、〇〇〇〃	二二四・八〃
第五種	二四、〇〇〇――	三七〇・六〃
第六種	五二、〇〇〇――	四七六・二〃
第七種	一〇〇、〇〇〇〃	四六八・四〃
第八種	二〇〇、〇〇〇――	四三三・三〃
第九種	一、六〇〇ターレル及び以上	二、〇〇〇・〇〃[1]

註1　Handwörtebuch der Staatswissenchaften, 2 Auflage, II. Band, S. 36.

何處を見ても、諸君は同一のことを見出すであらう、すなはち資本主義世界のすべての國における現實的な運動は我々の假定的社會が運動せると全く同一の方向において行はれてゐる、すなはち高級の部類に屬する納稅者の數は到る所において富裕ならぬ納稅者數に比し比較しがたいほど迅速に增大しつゝあるといふことである。現實の觀察によつて獲られた結果は、我々が社會所得の增大は勞働者階級の福祉を增進するものでないと假定して得たところの結果に、驚くべきほど一致してゐる。しかし多くの場合において現實は我々の假定的な例證を遙かに凌駕してゐる、我々の例においては種々なる範疇の納稅者數の增大の差はプロシヤ（エンゲルの表による）におけるよりも或はまたチューリツヒ州におけるものよりすらも著しく僅少である。思ふに、これは我々の例においては社會の富裕ならぬ層における財產の集中化に對して充分の場所が與へられなかつたことによつて說明されるであらう。現實においてはかゝる集中化が『中位の』收入數の增大を著しく緩漫にすることは極めて在りうべきことであるのである。

一と口に言つて、我々の例の性質は資本主義社會における事物の現實的な狀態に完全に一致してゐる。しかるに我々の例は、社會の異れる階級間における社會所得の分配は益々不平等になりつゝあるといふ假定に基づいてゐた。同一のことが事實においても行はれてゐることは明かである。

七

このことを確信した後に、我々は、最後に、ペ・スツルーウエ氏に向ふことが出來る。

この尊敬すべき『批判者』は如何にケリー・バスチアの敎義に對してゐるか？

ブラウンの『文庫』に收められた彼の論文の中には、少くとも、彼がこの敎義の、即ちゴーシエン、シュルツエ・ゲーヴアニツツ・アンド・コムパニーによつて考案された『富の分散』の最も新しい變種をどう考へてゐるかの問題に、全く決定的に答へることを許す箇所が含まれてゐる。次はこれらの箇所の中の一つである。

マルクスは、周知のごとく、資本主義の發展と共に、また勞働の生產性の發展と共に剩餘價値の水準——從つてまた、資本家による勞働者の勞働の搾取の程度も增加すると斷言した。マルクスのこの思想についてペ・スツルーウエ氏はかう言つてゐる。

しかし若しもそれがさうであるならば、社會的矛盾の鈍ぶりに關する、富の分散に關する、資本家の『貧困化』と勞働者の『富裕化』に關するお談議は、特殊の力强さをもつて社會的不平等の存在を痛感させられつゝある階級に對する痛ましい嘲笑である。ケリー・バスチアおよび彼等の後繼者達、ゴーシエン、シュルツエ・ゲーヴアニツツ、等々、等々の敎義は、少くとも、原則的に敗れた事件の辯護士達のゴマ化しの、それにもかゝはらず少しも納得しがたい演說以上の何物でもない。

『しかし正にこの命題こそは事實に一致し難い。大資本主義（機械生産の最初の勝利）の發展の初期の段階にとつては、それは、確かに、一般的に言つて正しかつた。しかし搾取の程度の高まりがその後の發展段階においてもその場所を有しまた未來においても無限に持續するであらうと認めることは不可能である。問題は剩餘價値水準が、何等かの原因によつて賃銀が下落するか或は剩餘價値が增大する場合にのみ高まることが出來るといふことにある。しかし賃銀の下落は決して資本主義諸國における最近の經濟的發展の特徵的なる兆候であるとは言ひえない。賃銀の下落とは無關係に剩餘價値は或は勞働時間の延長によつて、或はまた勞働の强度の增大によつて增大しうる。しかし我々は資本主義諸國における勞働時間の延長も認めることは出來ない……寧ろ反對の現象を觀察しなければならない。勞働の强度の增進は確かに存在する、しかしこの增進は、生理學的原因から、第一には、屢〻貨銀の昂騰と結付いてをり、第二には、越ゆべからざる限界に突き當る。それ故に發展しつゝある資本主義社會における剩餘價値水準或は勞働の搾取程度の不斷の上昇に關する教義は私には無力なるものに思はれる。反對のテーゼを擁護する方が成功的である、それは事實においても最近の經濟的發展の一般的性質にすこしも矛盾せぬのである。』

『反對のテーゼ』とは正にケリー・バスチアの教義の現代の再興者達の『テーゼ』である。我々はすでにこのテーゼの最も完全なる無力を曝露した。國民所得の分配における不平等が增大しつゝあることを證明した後、我々は正にそれによつて、勞働者階級によつて獲られつゝあるこの所得の分前が減少しつゝあることを立證した。『本原』について終つた以上、我々は最早、それが極めて巧妙に作成されてをり、非常によく原型に似てゐるといふ、多かれ少かれ慰藉的な驚歎すべき事情を單に檢證するだけに止めて、『複寫』の前に立停まらないでもいゝ譯である。しかし矢張り、一部分なりとも、わが『批判者』を追跡して行かねばならない故に、我々は同樣に彼の議論をもまた觀察しなくてはならないのである。その上、我々は、今日まで資本家による勞働者の搾取程度の增大に關するマルクスの思想が我々によつて單に間接的に、社會的富の分配における增大しゆく不平等を指摘することによつてのみ確證されて來たに過ぎないことを認めざるをえない。今や、この思想の利益のために何等かの直接的な論證を齎らしうるかどうかを見ることにしよう。

我々は、ペ・スツルーウエ氏の意見によれば、それが不可能であることを見た。彼は、マルクスの思想は資本主義の發展の初期段階への適用においてのみ正しいものとして認められうると言つてゐる。これは全然當つてゐない。

北アメリカ合衆國を例にとらう、そこでは、非常に多くの原因によつて、プロレタリアートによる自己の勞働力の販賣條件が彼にとつてヨーロッパの如何なる國におけるよりも比較にならないほど、有利である。如何にそこでは彼の勞働によつて創造されつゝある價値における勞働者階級の分前が變化したか？

一八四〇年には彼は五一パーセントを受取つた、が一八九〇年には彼はこの價値の四五パーセント

を獲たに過ぎず、從つて、彼の分前は低下し、彼の資本家による搾取程度は上昇した。

我々は我々によつて引用されたばかりの數字をカロール・デー・ライトから借用したのであるが、彼は、自己の誠實の限りにおいて、矢張り黒色よりは薔薇色を斷然好んでゐる。[1]

註1　彼の《Industrial Evolution of the United States》, New-York 1895, P. 192 を見る。若しもエトキンソンが自己の計算において異れる結論に到達してゐるとすれば、それは唯だ單に、彼が利潤水準の低下を剩餘價値率の低下と同一に解してゐることによつて説明される。彼の例證は如何なる程度まで統計學者にとつて理論經濟學の知識が必要であるかをよく示してゐる。

カロール・デー・ライトもまた勞働者階級の分前を減少せしめる一原因を指摘してゐる。彼はそれを機械生産の發展の中に、若しくは、マルクスをして言はしめるならば、資本の組織的組成の變化の中に見出してゐる。[1]

註1　同所、同頁。

何を我々にこの點に關してわが『批判者』は言ふであらうか？　彼は、北アメリカ合衆國は今日に至るも尙ほ資本主義の初期段階を出てゐないと考へてゐるのであるか？

ペ・スツルーウエ氏はケー・デー・ライトの書物を引用してゐる。從つてそれは彼に知られてゐる譯である。しかるに彼は、明かなるごとく、勞働者階級の分前の低下についてアメリカの統計學者が語つてゐることを聞かずにしまつたのである。おゝ、聾——それは大なる惡德である！

イギリスにおいては、一八六一—一八九一年の期間において、國民所得は八三二百萬フント・ステルリングから一、六〇〇百萬にまで上つた、それに反して賃銀は三八八から六九三百萬フント・ステルリングにまで上つた。これは一八六一年において一、一四・四三パーセントに等しかつた剩餘價値水準が一八九一年において一三〇・八パーセントに上つたことを意味する。[1]

註1　ボーレイ、《Changes in Average Wages in the United Kingdom between 1860 and 1891》, 《Journal of the R. S.》 June. 1895.

ペ・スツルーウエ氏はどう思ふか、上述の期間においてイギリスの資本主義は如何なる『段階』にあつたか？

或は、それとも、『批判者』君は、我々の引用せるボーレイがそれの助をかりて彼の數字の與へる印象を和らげ、そして讀者に國民的生産物におけるイギリス勞働者階級の分前は依然として減少しなか

つたといふことを信じさせようと努めてゐる、その結論を繰返さうと欲してゐるのであるか？　やらして見るがよい。我々は容易にこれらの結論の薄弱さを彼にお目にかけるであらう。でこんどはどんなことがあるかも知れないから我々は彼の注意を此の事實に促すことにしよう。

イギリスの統計學者達は賃銀の欄に、事實において、剩餘價値から支拂はれるところの、從僕によつて受取られる俸給をも記入してゐる。イギリスにおける從僕は非常に多數である。一八八四年において從僕の數はそこでは、レオニー・レウキーによれば、二、四〇〇、〇〇〇に達した、それに反して農業勞働者の數は九〇〇、〇〇〇を越えなかつた。同年に同じエル・レウキーの計算によれば、イギリスの從僕は八千六百萬フント・ステルリングを受取り、農業勞働者によつては六千七百萬以下が獲得された。若しも我々が、一八九一年において從僕に支拂はれた俸給が一八八四年に受取られた額を超過しなかつたと假定し、そして若しも我々が、八千六百萬を一八九一年にイギリスの勞働者階級によつて受取られた賃銀の總額から控除して、それを同年の剩餘價値の總額に加算するならば、この最後のものゝ水準は尙ほ一層高まるであらう。一般に勞働者階級はイギリスにおいて國民所得の三分の一以上を受けてをらない。

フランスにおいては、――エ・スコツトの一八九〇年に關する計算によれば、――國民所得は次のやうに分配されてゐる。

農業勞働者	二、〇〇〇百萬フラン
産業勞働者	
各種の勤務者	三、六〇〇
從僕	一、〇〇〇
手工業者、小農、小商人、運輸從業員、兵士、船員、靈兵、小官吏、僧侶及び尼僧、小學教師及び女教師、等々	一、四〇〇
	四、〇〇〇
資本家、――	
(一)農業において	三、五〇〇乃至四、五〇〇百萬フラン
(二)工業、商業、飲食店業において	三、五〇〇乃至四、五〇〇
(三)國家より年金を受けつつある者及び自由職業者	二、五〇〇乃至三、五〇〇[1]

註1　《Revue d'Economie politique》, Fevrier 1900 における V. Turquan の《Evolution de la fortune privée en France》を見よ。

すべてこれらの數を加へる時、我々は約二百二十億をうるであらう、その中勞働者、手工業者、及び小農民によつて獲られてゐるところは、イギリスにおいてと同様に、三分の一以上ではない。

搾取のかゝる高い程度は唯だ極めて發達せる勞働の生産性に際してのみ可能的である。それは、最も權威ある人々の計算によれば、フランスの國民所得が辛うじて百五十億に達した三〇―三五年前においては肉體的に不可能であつた。それ故にペ・スツルーウエ氏は、勞働者階級の搾取の增大を資本主義の初期段階に適合させてゐる時、非常に誤つてゐるのである。

八

わが『批判者』は、勞賃が最近五十年間に多くの國においてまた多くの產業部門において昂騰したといふ事情に混亂させられてゐる。しかし、少しでも經濟學に通じた者は誰でも、勞賃の昂騰は勞働力の價格の下落と、從つてまた、勞働者の搾取程度の增大と手を携へて進むことが出來るのを知つてゐる。イギリスにおける賃銀は大陸におけるよりも高い。これは――古い眞理である。[1] しかし資本主義の代辯者達は、屢〻この眞理を繰返しながら、賃銀昂騰の事實に立脚して、資本家達は『貧困化しつゝある』が勞働者達は『富裕化しつゝある』といふ、我々によく知られた『テーゼ』を立證しようと努力する場合には、これを謙遜な沈默をもつて默殺し去るのである。マルクスは『資本論』第一卷において喝破してゐる、『從つて、何故にかくも勞働力の價値および價格の勞賃若しくは勞働そのものゝ價値および價格への形態變化が重要であるかゞ理解される。現實の關係を隱蔽して全くそれとは反對のものを示すところの、この顯現形態の

上に、勞働者および資本家の一切の法律的表象、資本主義的生產方法の一切のからくり、自由についての一切の資本主義的幻想、俗流經濟學の一切の尤もらしい妄策は基づいてゐるのである。[2]』マルクスの『批判者』としての自己の資格において、ペ・スツルーウエ氏が專に俗流經濟學の尤もらしい妄策に對して非常に寬大であつたばかりでなく、却つて自からその方へ駈け付け始めたことは注目に値する。この彼の新傾向の最も著しい現はれであるのは疑ひもなく、『剩餘生產物に體化された剩餘價値は、單に生ける勞働によつてのみは創造されず。』全社會的資本の一機能であるといふことに關する彼の意見である。[3] これは――ブルジョア的代辯のヘルクレスの杖である。しかし現在我々が吟味しつゝある諸論文においても、この種の極めて價値ある眞珠に出遭ふことが出來る。剩餘價値水準の低下の證明としての賃銀の昂騰の引證の如き、正にその一つである。

註1 『私は、斷然、賃銀が果されたる勞働の眞實の代價の規準に非ざることを主張する』(Th. Brassey, On Work and Wages, London, 1873, p. 66.)

註2 『資本論』第一卷、エス・ペテルブルグ、一八七二年、四六八頁。

註3 『勞働價値說の根本的矛盾』なる論文において。『ジーズニ』一九〇〇年二月、この論文は物柔かに、しかも容赦なくカレーリンによつて次の年の『科學評論』十月および十一月號の論文『覺え書』において檢討されてゐる。

勞働日が多くの、――その際主要なる、――生産部門において今日、數十年以前よりも短くなつてゐること、それは正しい。しかしこれも不確實である。勞働日の短縮は暴利をもつて勞働の緊張度の引上げによつて購はれた。このことはまた周知のことである。成程、勞働の緊張度の向上は時と共に越ゆべからざる生理學的限界に到達するかも知れない、しかし經驗は、この可能性が今日に至るまで現實になつてゐないことを示してゐる。[1]

註1　合衆國においては勞働はヨーロッパにおけるよりも比較にならないほど激烈である。シカゴの萬國博覽會に行つたフランス勞働者は、アメリカ勞働者の勞働の緊張振りに驚かされた（《Rapports de la délégation ouvrière à l'éxposition de Chicago》, Paris 1894 を見よ。）しかしアメリカにおいても緊張度の自然的限界は今のところまだ、勞働の緊張度は非常に急速に增大しつゝあるとは言へ、到達されてゐない。これについてはレワッショールの《L'ouvrier américain》, Paris, t. I. p. 97 及び以下を見よ。この限界はオーストラリヤにおいても越えられてゐない。『自分の見た所では、オーストラリヤには、一日八時間乃至九時間の勞働時間制に反對の者は一人もゐない、この意見の說明としては何れも同一の理由を擧げてゐる、勞働の强度は勞働時間の短かい程大である』Albert Metin《Le Socialisme sans doctrines, Australie et Nouvelle Zélande,》Paris 1901, p. 132. 勞働の緊張度の增大はそこではより强力なるものに追隨することの出來ない弱い勞働者にとつての失業の源泉として現はれてゐる（上揭書、一四六頁）。成程、かゝる作用を惹き起すその爲めにも最低賃銀を制定することが必要であつたのである。

賃銀昂騰の事實を否定しない場合には、しかし、どれほど高くそれが、譬へば、ヨーロッパ大陸の先進諸國において昂まつたかを訊くことは許さるべきである。がこの問題に對しては時として可成りに意外なる回答を受取るのである。

フオイトに據れば、勞働者には彼の力を回復する爲めに營養物質の次のやうな分量が必要である。

	蛋白	脂肪	含水炭素
適度の勞働に際して	一一八グラム	五六グラム	五〇〇グラム
强度の勞働に際して	一四五〃	一〇〇〃	四五〇〃

若しも勞働しつゝある人間が上揭の物質の分量を消費しないならば、彼の勞働力は自己の根底を危くされる、彼は肉體的貧化過程を經驗する。かゝる貧化から現代ヨーロッパの勞働者は遠いであらうか？

デュクペシオによつて蒐集された材料を基礎として、ブラッセルの大學教授ヘック・デニーは、一八五三年においてベルギー勞働者が平均して次表のやうに消費したことを發見した。

蛋白	七〇グラム
脂肪	二六・二〃
含水炭素	四六一〃

これは、當時ベルギーのプロレタリアが營養をもつて生產過程において消耗される自己の力を恢復

することが遙かに出來えなかつたことを意味する。がこのことからは、明かに、勞働力の價格が當時遙かにその價値に比して低くあつたといふことになる。

三十年以上が經過した、ベルギーの資本主義は自己の發展の輝かしい『段階』を經過した、がベルギー勞働者は不充分なる營養によつて自己の力を破壞し續けた。八十年代において彼の有機體は次表のごとくであつた。

蛋白質	八二・二七八グラム
脂肪	七七・九二六〃
含水炭素	五八九・四〇八〃[1]

註1 H. Denis《La dépression économique et Sociale》, Bruxelles 1895, p. 145.

如何に大なる進歩であることよ！ 如何に羨望すべき勞働者階級の運命の改善であることよ！ 勞働者は今や、脂肪および特に含水炭素の增加については言はずもがな、蛋白の餘分なる全十二グラムを受取つてゐる！ 如何にしてこのことの後に社會的矛盾の鈍ぶりについて語らないことが出來るか？ 若しもベルギー勞働者の生活改善が將來もかく急速に進むならば、次の地質學的年代においては、彼等は、思ふに、殆ど、有機體の正常的な營養のために必要なだけを、受取るであらうことになるではないか。

眞面目に考察する時、我々はまつたく、ベルギー勞働者の營養の、最も些細にもせよ、改善について確信をもつて語る權利を有しない。こゝでは一切は彼の今日の勞働力の消費が五十年代に現はれた毎日の消費に對して如何なる比例にあるかに關聯してゐる。若しも消費が增大したのであつたら、營養は、多分、營養物質の若干の添加にかゝはらず、尙ほ一層不滿足なるものとなつたのである。從つて、蛋白質の餘分の十二グラムも我々を資本主義的進歩の社會的結果に關する悲觀的結論から保證しないのである。

すべて我々が知つてゐること、それはベルギー勞働者が今日に至るまで營養によつて自己の勞働力を恢復すべき經濟的可能性を有してゐないといふことである。正にそのことをこの點に關して、正統マルクス主義者達の頑固な『獨斷論』を猜ふわけには行かない人、即ち正に、西フランドリーの知事が語つてゐるのである、『周知のごとく、兵士にとつて必要なる食料の限度の分量は、パン一〇六六グラム、肉類二八五グラム、及び野菜二〇〇グラムである。朝から晩まで勞働してゐる我々の勞働者は、營養物質の著しくより大なる分量を必要とする。しかるに彼等によつて消費されつゝある食料は最小限度の兵士の糧食に遙かに劣るのである』[1]。

註1 デニーの前揭書、一四四頁より引用、この文書は八十年代に關するものである。

ベルギーのプロレタリアの労働力は今日に至るまで自己の價値よりも遙かに低く賣られてゐる。が彼の賃銀は最近五十年間において、疑ひもなく、可成り『著しく』昂騰したのである。周知のごとく、賃銀の水準が低ければ低いほど、如何なる小さな昂騰でも大きく響く。若しも勞働者が一日に五コペックを受けつゝあるならば、一コペックの増しは二〇パーセントの値上げなる響き高い名をもつて飾られうるのである！　しかしかゝる『著しい』昂騰はすこしも勞働者の社會的並びに肉體的貧困を除去しないのである。

ペ・スツルーウエ氏は勞働賃銀の赫々たる鐵則に對して非常に輕蔑的である。今日この法則を辯護することは、勿論、全く不可能である、あまりにも明瞭にマルクスがそれの無力を曝露した。しかしベルギーの任意の勞働者にとつてはこの法則が、――ラツサール及びロードベルツスがそれに與へたところのその定式においてさへも、――黄金の法制と思はれることが出來るといふことには同意しない譯にいかぬのである。

九

イブセンの戯曲において妖怪たちがペル・ギユントに向つて彼の左の眼を輕くこすつてやらうと言つてゐる。『お前は、成程、その後ですこし斜視にはなるだらうが、――と慰めるやうに彼等の首領が附加へる、――しかしお前の目に觸れるものは皆な何もかも、美しくそして樂しく見えるやうになるであらう。』わが批判者に對して同樣の施術が、ケリー・バスチアの傳統を神聖に守護しつゝあるブレンタノ派によつて爲された。尊敬すべき學派が正にどちらの眼をこすつたかを確かには知らないが、しかし兎に角この學派は資本主義的秩序を、無條件的に美しく樂しくはないにしても、矢張りそれが正常な眼で見た時に見えるであらうよりも遙かに心を惹かれるものに見えるやうに爲したのである。このことの數多くの證據の一つとして現はれてゐるのは婦人および幼少年者の資本主義的搾取に關する彼の議論である。

カウツキイはベルンシユタインとの論爭において、賃勞働に從事しつゝある婦人および幼少年の數の增大は勞働者階級の貧化を立證するものであるといふ思想を發表した。この思想は、明かに、ペ・スツルーウエに非常に氣に入らなかつた。『私がカウツキイを讀んだ時、――と毒々しく彼は言つてゐる、――私には、私がチユーリツヒ議會で尊敬すべきデクルチンスの演說を聽いてゐるやうに思はれた……』『若しも私がカウツキイの婦人勞働に對する見解を分け有つことが出來るならば、私は同樣にまたこの勞働に關するカソリツクの社會政策家達の實際的な提案をも採用しうるであらう。』[1] 結構である。しかしそれならばこの問題をペ・スツルーウエ氏自身はどう見てゐるのであるか？　お聞きなさい。

註1　Archiv, S. 732-733.

彼は、ドイツにおいて婦人および少年労働が事實において一八八二年から一八九五年の間にその範圍を甚だしく擴大したことを認めてゐる、しかし彼は、婦人および少年労働の増大はそこでは特に商業および一般にその經營において非常に屢〻經營者自身の家族の成員達が參與してゐるやうな部門において認められることを指摘してゐる。こゝからして彼はこの労働に關するカウツキイの意見を cum grano salis（割引して）考へなくてはならないといふ慰藉的な結論をなしてゐる。『發展行程は一般にそれほど單調ではなくまたその意味はそれほど一樣ではないのである、——と彼は言つてゐる、——即ちそれが貧困化の理論の圖式の中に表はれてゐる如くには。』[1]そしてその次に彼は北アメリカ合衆國に關するすでに全く慰藉的な引證をなしてゐる、すなはちそこでは婦人労働は一八四〇—一八九〇年の期間において相對的に減少した、が少年労働は絶對的にも減少した。

註1　Ibid., S. 734.

資本主義はそれによつて負はされる傷を自から癒するところの槍そのものであるといふことになる、『初期段階』においては資本主義は、確かに、少しくふざけ過ぎて、すべての生けるそして剩餘價値の生産に能力あるものを自己の『支配』の下に取らうとして、成年男子をも、婦人をも、子供をも容赦しない。併しこれは青年の熱中と誤謬とに過ぎない。成熟の時期に近付くに從つて、資本主義は和らいで來、次第に堅く引絞られた手綱を緩めて來る、そしてその時それによつて苦しめられた婦人及び子供達は、遂に自分の家で、絶對的のみならず、また相對的にも、即ち資本家諸君の家庭生活に比較しても、益〻改善されゆく家庭生活の中に休息するの可能を受取る。すべてこれは非常に樂しく、驚異的で、慰藉的で、必然的であり、何故にペ・スツルーウエ氏がそれに『貧困化の理論の圖式において』出遭ふのか全く解らない程である。勿論、單調は、我々が『單調』に對して不滿を漏らす場合には、非常に重苦しい印象を與へる、しかし勞働者達の富裕化と資本家達の貧困化との圖式においてはそれは寧ろ愉快であり、すこしも苦痛ではないのである、——これが證明としては我々はペ・スツルーウエ氏自身を引證することが出來る、すべての彼の最近における經濟學上の議論は非常に單調であり退屈である、しかしその高尙にするところの影響に心から感激しない爲めには、マルクスの憂鬱な『末流』でなくてはならない……

禍はたゞ手におえない現實がこれらの高尙にするところの議論に激しく矛盾してゐることである。資本による婦人および幼少年の搾取なりとも例について見よう。ペ・スツルーウエ氏は、ドイツにおいて產業勞働に從事しつゝある婦人の數、——雇傭婦人勞働者の數、——が一八八三—一八九五年の期間に八二パーセント增加し、それに對して男子の數は僅かに三九パーセント增加したに過ぎなかつたことを忘却した。若しも我々を我々の『末流』的一面性が欺かないならば、これらの數字は資本によつて搾取されつゝある女性の數の絶對的な同樣にまた相對的な增大を示すものである。それならば

何が婦人達を資本の軛の下へ追込むのであるか？　最早、疑はしきプロレタリアートの『富裕化』に非ざることは勿論である！　カロール・デー・ライトは確かに、合衆國においては産業勞働に從事する婦人の數は一八五〇年において一八九〇年におけるよりも相對的に大であつたと言つてゐる、しかし彼自からそれに際して、婦人勞働に關する精確な材料は一八七〇年以後において初めて存在してゐることを注意してもゐるのである。[1] ではこの時以來我々は何を見るか？　我々は不斷の——絶對的および相對的——婦人勞働の範圍の擴大を見る。自己の第十一回年次報告において同じケー・デー・ライトは次のやうな數字を上げてゐるが、それは、彼自身の言葉によれば、『すべての勞働部門における十歲以上の女子の割合は、一八七〇年における（女子人口の總數の——ゲー・ペー）一四・六八パーセントから一八九〇年における一七・二二パーセントに上つた、しかるに男子の割合は一八七〇年における八五・三二パーセントから一八八〇年における八二・七八パーセントにまで下つた（再び我等の傍點）、このことは本研究において（即ち『勞働者』の第十一回年次報告において）指摘されたる、女子が或る程度まで男子側の損害（我等の傍點）の原因をなしてゐるといふ事實を完全に確認（fully corroborating）してゐる』ことを示すものである。[2]

註1　《Indstrial Evolution》, p. 204.

註2　Eleventh annual Report of the Commissioner of Labor. Washington, 1897, p. 21.

工場手工業および機械工業（manufacturing and mechanical industries）において女子は一八七〇年には一四・一四パーセント、一八九〇年にはすでに全勞働者數の二〇・一八パーセントを成した。[1]

註1　Ibid., p. 22.

『それ故に、女子の割合……（賃勞働に從事せる——ゲー・ペー）が漸次增大しつゝある事實は絶對的に確證的である。[1]』

註1　Ibid., p. 22.

全く同じ結論にペ・スツルーウエ氏はサルトリユースの有名な著述、《Die nordamerikanischen Gewerkschaften unter dem Einfluss der fortschreitenden Productionstechnik》, Berlin 1886（『進歩しつゝある生産技術の影響の下における北アメリカの產業組合』ベルリン一八八六年）において出遭ふことが出來る。そこでは、我々は一〇九頁において、北アメリカ合衆國の各州における婦人勞働の相對的および絶對的發達を語る次のやうな表を見出す。

工場における婦人勞働者　人口

ペンシルバニヤ	一八五〇年	一八八〇年	
ニュージャーシイ	二二、〇七八	八、七六二	
イリノイス		四九三	
ニューヨーク		五一、六一二	
オハイオ		四、四三七	
ニューハンプシヤ		一四、一〇三	
	一八六〇年	一八七〇年	一八八〇年
	七三、〇四六	二、三一一、七八六	四、二八二、八九一
	二七、〇九九	四八九、五五五	一、一三一、一一六
	一五、二三三	八一五、四七〇	三、〇七七、八七一
	一三七、四五五	三、〇九七、三九四	五、〇八二、八七一
	一八、五六三	一、九八〇、三二九	三、一九八、〇六二
	二九、三五六	三一七、九七六	三四六、九九一

これから見て、誰の言葉を Cum grano salis（割引して）考へることが必要であるか——カウツキイの言葉かそれともペ・スツルーウエ氏の言葉か、明かである。

が少年勞働は？

一八七〇—一八八〇年の期間において、勞働に從事しつゝある一〇歳以上一五歳以下の兒童の數は合衆國においてこの年齢のすべての兒童の一三・九パーセントから一六・八二パーセントにまで增加した。これは少年勞働の適用を困難ならしめた工場法の活動によつて惹き起されたものである。幼少年勞働者の數は特にニューイングランドにおいて減少した、そこでは上述の活動が特に力强いものがあつたのである。がそれが微弱であつたところでは、少年勞働は前十年間に比して一層廣い範圍に亘つて行はれたのである。[1]

註1　レワツショール——L'ouvrier américain, I, p. 198.

マルクスの『批判者』諸君の尤もらしい奸策が注意深い研究者の眼から眞理を覆ひえないのは、俗流經濟學者の代辯的演習が、それをなしえざると同樣である。眼のある者は誰でも、資本主義の發展が正にマルクスの言つた結果に導くことを見て知つてゐる、即ち成年勞働者を搾取するだけに滿足せずして、資本は益〻婦人および子供を自己に隷從させようと努める。が婦人および子供のそれへの隷從の增大は、疑ひもなく、勞働者階級の社會的境遇の惡化を意味する。

しかしながら工場法は工場における少年勞働者の數の增大を、少くとも、北アメリカの二三の州において、阻止したのである、——とスツルーウエ氏は我々に言ふであらう。[1]

註1　婦人勞働に對する『社會改良』の可能的影響に關する彼の意見を參照せよ。Archiv, S. 733.

然り、——と我々は答へよう！　しかしそれは全く社會發展に關するマルクスの理論の一般的な意味を反駁するものでなく變形さへもしないのである。工場法が勞働者の或種の利益を保護しうることと、それは既に『××××××』に於て認められてゐる。[1] しかし問題は、工場法が勞働者の或種の利益

を守護したか否かにあるのではなく、プロレタリアートにとつて有利な、それ自身正量であるところの工場法の結果と、資本主義に固有なそしてそれは負量であるところの、勞働階級の社會的境遇の惡化に對する傾向との代數學的總和が如何なるものであるかに在る。マルクスは、この代數學的總和は正量ではあり得ないこと、即ち勞働者の社會的境遇は、工場法から流出する利益にかゝはらず、惡化することを斷言してゐる。正にこのことを――そしてこのことのみを――今日まで彼の『正統』追隨者達は主張し來つたのである。が謂ゆるマルクスの批判者達は反對を言つてゐる。彼等は、有名な『社會改良』がすでに勞働者の社會的位置を向上せしめた、時と共に尙ほ一層それを向上させるであらう、何となれば時と共に、次の地質學的時代において、資本主義的生産方法は何時か知らない中に、社會主義的なそれに移行するであらうから、といふことを證明しようと努力してゐるのである。誰が正しいか？　我々が今日までに知ることの出來たところの全べての事實および現象は、斷然マルクスおよび『正統派』の有利を證據立てゝゐる、經濟關係において、プロレタリアートとブルジョアジーとの間の懸隔は增大した、勞働者階級は相對的に貧困化した、何となれば國民的生産物における彼の分前が相對的に減少したからである。工場法およびその他の『社會改良』の姑息手段が如何に勞働者階級にとつて重要であつたらうとも、それらは全くこの階級にとつて不利益である所の發展しつゝある資本主義のプロレタリアート隷從化の傾向に打勝つことは出來なかつた。プロレタリアートは强力な潮流に逆らつて泳ぎつゝある人の狀態にあつた。若しも彼が抵抗することなしに水力に身を任かせたならば、彼は非常に遠くへ押し流されたであらう。しかし彼は抵抗した、彼は前方へ突き進まうと努力した、そしてそれ故に潮流は當然押し流し得たほどには遠くへは彼を押し流さなかつたのである、しかしそれは矢張り彼を押し流した、何となれば依然としてそれは遙かに强力であつたからである。[2]

註1　『ブルジョアジーの異れる層の相互的不一致に乘じて、それ（プロレタリアの組織）は法律の側からの勞働者の或種の利益の承認を獲得する。イギリスにおける七時間制がそれであつた。』（『宣言』第一章、ブルジョアとプロレタリア）。

註2　ロウントリーはヨーク市に關する材料の注意深い研究に基づいて、次のやうな結論に到達した、（一）この市の人口の一〇パーセントは一週二一シルリング八ペンスを受け、それ故第一等の貧困と彼が呼んでゐる條件の中に生活してゐる。（二）同人口の一七・九三%は第二等の貧困の條件の中に生活してゐる、即ち二一シルリング八ペンス以上の賃銀を獲てはゐるが、しかし副次的な各種の――生産的若しくは不生産的支出を持つてゐる (Poverty. A study of Town Life, Second edition, p. 298) ロウントリーの意見によれば、全市人口の二五パーセントから三〇パーセントまでは貧困である (Ibid., p. 30)　これが『自動的社會主義』なのである！　ロウントリーは、かゝる貧困は、國民的富の增殖にかゝはらず、また『未曾有の好景氣』時代にも存在したことを附言してゐる (Ibid., p. 304)。然り、ゴーシエンは正しい。『數字は嘘をつかない。』

これまで我々は勞働者の狀態の相對的惡化について語つて來た。しかし我々は、或種の『批判者たち』――ペ・スツルーウエ氏もその一人である――が、マルクスは決して相對的ではなく、絶對的な、それの惡化について語つたのであるといふことを立證しつゝあることを忘れなかつた。若しもこれらの諸君の言ふ通りであるならば、相對的惡化に關する『正統派』の一切の言說は、打負かされたことを感じながらも、それを意識することを欲しない負惜しみの强い論爭者の詭辯以上ではないといふことになる。實際それはさうであらうか？

周知のごとく一八四七年にブラッセルのドイツ人クラブにおいてマルクスの試みた、講演を基礎とした『賃勞働と資本』なる小冊子において、マルクスは、資本の急速なる發達が、勞働力に對する需用を增大しつゝ、賃銀を昂騰せしめるやうな、勞働者にとつて最も有利な場合にさへも、勞働者達の境遇は相對的に惡化することを證明してゐる。『生產資本の急速な增加は、――と彼は言つてゐる、――同樣に急速なる富、社會的欲望および社會的享樂の增加を喚び起す。それ故に、勞働者にとつて近付きうべき享樂が增大したにかゝはらず、彼等によつて獲られる滿足は、增大せる、勞働者にとつては近付きえざる、資本家の享樂の結果として、社會發展一般のより高い段階から見る時は、低下したのである。我々の欲望および享樂は社會によつて創造される、それ故我々は彼等に社會的尺度を當嵌め、それを滿足させる對象をもつては測定しないのである。我々の欲望および快樂の性質は彼等を相對的なものたらしめる。』

勞働者階級の地位の相對的惡化の理論でなくして、これは何であるか？

更に、『若しも、從つて、資本の急速な增殖と共に勞働者の收入が增加するとしても、それと同時に勞働者と資本家とを劃する社會的深淵も增大し、資本家の權力が增大し、勞働に對する資本の權力、勞働の資本への依存が增大するのである。勞働者にとつて資本の急速な增殖が有利であるといふことは、それは唯だ次のことを言ふことを意味する、勞働者が他人の富を增加することが速かであればあるほど、それだけ脂つこい碎片を彼自身が獲ることが出來、それだけ多くの勞働者が賃銀を受取ることが出來、それだけ勞働者――資本の奴隷の數を增大することが出來るのである、と……資本の急速な增殖に際しては賃銀は、或は、昂騰するかも知れない、しかし、如何なる場合にも、資本の利潤は、比較にならぬほど急速に增大するのである。勞働者の物質的狀態は改善される、しかし彼の社會的境遇に應じて改善されるのである。資本家から隔てる深淵は擴大する』[1]。

註1　同所、三九頁。

これらの引用は明かに、マルクスが決して、『批判者』諸君が我々に信じさせようとしてゐる如くに

は勞働者階級の地位の相對的惡化の概念に無關係でなかつたことを示してゐる。これから見て同樣にまた、マルクスは勞働階級の貧困化について、この階級の境遇において絶對的改善が認められるやうな場合にさへも、語ることを止めないであらうことは明かである。しかし、我々によつて引用された小冊子においてマルクスが、資本主義社會の發展の眞實の行程を分析しつゝ、資本の增殖が決して常に勞働者階級の境遇の絶對的改善と結付いてゐるものでないことを言つてゐるのは眞實である。『生産資本が增殖すればするほど、——と彼は言つてゐる、——それだけ勞働の配分および機械の適用が發達し、それだけ勞働者間の競爭が强まり、それだけ彼等の賃銀は下落する。』[1]更に、彼は、資本主義の發展は賃勞働者の隊列に常に新しい住民の層を追込むことを指摘し、そして次のやうな一般的結論をもつて自己の小冊子を終つてゐる、

『資本の急速なる增加は比較にならないほど急速なる勞働者間の競爭の强化を惹き起す、換言すれば、勞賃の源泉、勞働者階級の生活手段のより大なる相對的減少に導く、しかるに資本の急速なる增加は賃勞働にとつての最も好都合なる條件として現はれる。』[2]

註1　同所、四七頁、原文の傍點。

註2　同所、四八頁。

同時にマルクスは、明かに、勞賃の源泉の相對的減少は必ずや賃銀の下落に導かなければならないと考へてゐた。それ故に彼は、資本主義の發展と共に勞賃が下落に向つて進むと考へてゐた。これは當時の多くの社會主義者達の共通の見解であつた。[1]

註1　譬へば、ルイ・ブランの、《Organisation travail》, V éd., p. 40 を參照せよ。

しかし『賃勞働と資本』なる小冊子においてはマルクスの經濟的見解はまだ未完成なる形において我々の前に現はれてゐる。彼はまだそこでは利潤を剩餘から、賃銀を勞働力の價格から區別してゐない。それゆゑ我々は彼の生著、『資本論』に向ふことにしよう。

『資本論』の第一卷においてマルクスは、勞働の生産性の發達のお蔭で、勞働力の價格が、勞働者の處理の中に入る生活手段の分量の同時的增加にかゝはらず、下落しうることを語つてゐる。[1]こゝでは、從つて、勞働者の地位の相對的惡化とそれの絶對的惡化とが區別されてゐる。同卷の他の場所において、マルクスは、イギリスの社會的富の『癈疾的な』增殖が貧しい者をより少く貧しくしたといふグラッドストーンの意見を引用した、そしてから言つてゐる、『若しも勞働者階級が依然として『貧しく』唯だ彼等が有產階級のために富と權力との癈疾的な增殖を生產した程度に從つて「貧困」の度を減じたとすれば、』相對的には彼等は從前と同樣に貧しいものとして殘つたのである。貧困の極限は減退し

なかつたとすれば、それは增進したのである。何となれば富の極限が增進したからである。[2]

註1 『資本論』第一卷、四五四頁。
註2 『資本論』第一卷、五六三頁。

これは、勞働者階級の相對的貧困化の理論でなくして、何であるか？

成程、マルクスは『資本論』においても、賃銀を下落せしめる原因を指摘してゐる。しかし、勞働者によつて受取られる賃銀と、彼の力の價格との間の極めて重要なる差違を設定した後、彼は最早、勞働者の搾取の程度の增加は必ず勞賃の低落に導くとは言つてゐない。否、彼の完成された教義の直接的なそして明瞭な意味によれば、勞働力の價格の下落と勞働者の境遇の相對的惡化とは彼の賃銀の昂騰によつて伴はれうるのである。[1] それ故、勞銀が十九世紀の後半において昂騰したことを指摘することによつて、マルクスを反駁しようと欲してゐる人々の頓智には驚かざるを得ないのである。彼等の頓智は、この指摘が、——それが正當である限りにおいて、——特に謂ゆる熟練勞働者に關するものであり、それに反してマルクスは『資本論』において主として不熟練勞働者の生活から例證をとつてゐたのにおいて、一層の稱讃に値するのである。[2]

註1 上掲書、五五六頁。同樣にペ・スツルーウエ氏によつて引用されてゐる『ノイエ・ツアイト』の第九卷。五七一頁の『註』を參照せよ。
註2 譬へば、イギリス勞働者の住宅および食物について語りながら、彼は次の如き但し書をなしてゐる、『この著述の範圍は私にこの關係において工業および農業勞働者の單に最薄給分子のみを研究することを許す。』『資本論』第一卷、五六三頁。

一一

ペ・スツルーウエ氏には、『資本論』において、マルクスが勞働の生產性が高ければ高いほど、それだけ勞働者の職業手段に對する牽引が强く、そしてそれだけ彼等の生存條件は絶望的であると言つてゐる箇所が非常に氣に入らない。讀者は有名な行句を記憶してゐる。

『最後に、人口の相對的過剩若しくは產業豫備軍を絶えず蓄積の程度および力と均衡せしめるところの法則、この法則が、勞働者を資本に、ヘフエーストスの斧がプロメシユースを岩に打ちとめたよりも固く縛り付ける。この法則は富の蓄積に照應して貧困の蓄積を條件づける。一極における富の蓄積は同時にその對極において、卽ち自分自身の生產物を資本の形式において生產しつゝある階級の側において貧困、勞働苦、隷從、無智、粗暴、及び道德的頽廢の蓄積を作出する。』

ペ・スツルーウエ氏は、これらの行句は現代社會の眞實の狀態に一致してゐるものでなく、また若し

も彼等がそれに眞實に一致してゐるとしても、マルクスの『終局目的』は完全に不可能であらうと考へてゐる。

わが『批判者』のこの意見を考察しよう。

勞働の生産性の發達と共に勞働者の生存條件が益〻絶望的になるといふことは正しいかそれとも正しくないか？

この問題を注意深く研究せる、そして、我々が知つてゐる限りにおいては、誰にもまだ『獨斷論』の嫌疑を受けたことのない人々は、それが正しいことを語つてゐる。

現に、産業不振の問題の研究に從事しつゝあるイギリスの委員會の意見を想起せよ。委員會の多數は、今日文明諸國民は世界市場にとつて必要であるよりも遙かに多くの生産物を生産することが出來ると考へてゐた。[1] 生産力と消費能力との間の杆格は産業不振と利潤の低下を惹き起す。社會的生産諸力の高度に發展せる狀態によつて惹き起される、かゝる事態が勞働者の生存條件に對して如何に影響しなければならないかの判斷は讀者自身に委せることにしよう。

註1　すでに我々によつて屢〻引用されたこの委員會の最終報告、XVII.

が少數派は一層斷然たる決定的な意見を發表してゐる。彼等の意見によれば、最近四〇年間において（報告は一八八六年に出た）文明諸國民の生活に極めて大なる變化が起つた、彼等の勞働の生産性は發展の非常に高い程度に達し、今や主要なる困難が物價騰貴若しくは生産物の稀少にあるのではなくして、それなくしては國民の大多數が一切の生計手段を奪はれるところの職業を自分のために見付けることにある程である。[1]

註1　同所、LIV.

再び讀者自身、果してこれが上に引用されたマルクスの言葉に矛盾するか、或はまたそれらを反駁するかどうかを判斷されたい。

委員會は勞働の生産性の發展によつて惹き起される困難の性質に關して疑問の餘地を殘さなかつた。それは、委員會の意見によれば、勞働者階級にとつての勞銀の源泉の減退の中に、即ち、從つて、相對的過剩人口の作出の中にある。これは丁度またマルクスが言つたことゝ全く同じである。

かくて、資本主義の發展に從つて、勞働力の販賣條件はそれの賣手にとつて不利益なやうに變化する、それによつてまた充分我々によつて指摘されかつ證明されたところの勞働者階級の國民所得における分前の減少が說明される。しかし、さうは言つても、我々は決してこの場合或種の生産部門における賃銀の昂騰を否認するものではない。我々は唯だ、この昂騰が勞働力の價格の下落によつて伴は

れること、またそれのみならず、それが決して、資本主義の代辯者達が主張してゐるやうにそれほど著しいものではないといふことを言ふのである。

ギツフエンは、一八三三―一八八三年の期間において勞賃の水準が、イギリスの産業における或種の部門において一〇〇パーセント及びそれ以上すらも昂騰したことを確言してゐる。[1]これは――すでに種々なる方面から指摘されてゐるところの、甚だしい誇張である。一八三三年の數字と八〇年代の數字との比較は、一八三三年、即ち貧民救濟法の改正以前においては、多くの家持勞働者が自己の救區から補助を受けてをり、それは、疑ひもなく、勞賃の水準の人工的な低下を惹き起したといふ簡單な原因によつてほとんど何物をも證明しないのである。[2]のみならず、この、科學的な意味においては許すことの出來ない比較さへも、必ずしも常に『イギリス第一の統計學者』の喜ばしい結論を確證するものではない。すなはち、譬へば、優良船員の勞銀は一八三三年に一箇月六〇シルリングにまで達した。八十年代においては、それは同一水準に立つてゐた。一八三三年においてはロンドンの植字工は平均して一週三六シルリングを稼いだ、八十年代においては彼等の勞賃はそれ以上でなかつた。[3]しかし主要の問題はそこにあるのではなく、勞賃の昂騰がイギリスにおいて勞働者にとつての有利な結果を著しく弱めたところの多くの現象によつて伴はれたことにある。觀察されつゝある期間において都會生活は非常な發達を遂げた。その結果として勞働者の支出は著しく増大した。家賃が高くなつた。[4]勞働者は以前には僅かな距離を徒歩で通つてゐたのに反して汽車または電車によつて通勤すること

とを餘儀なくされた等々。その上、止むを得ざる缺勤が今や從前に比してより多くなつた。鐵工組合の書記の一人であるヘイ氏は、彼が保管してゐた組合の書類を基礎として、彼の同僚たちが餘儀ない缺勤の形において自己の勞働時間の二〇パーセントまでを喪失してゐると計算した。[5]この數字は勞働豫備軍の大さを示すものであるが、この勞働豫備軍の存在を實は我が『批判者』は否認する傾きを持つてゐるのである。[6]ホブソンは、『イギリスにおける一般狀態は就業の極端なる不安定の狀態である』また『時間および勢力の喪失はそれが半世紀前若しくは十八世紀に見られたよりも現在において遙かに大である』と考へてゐる。[7]これを、云ふまでもなく、資本主義社會の自動的社會主義について講釋をなしつゝある『學者たち』は、考慮に入れることを忘れてゐるのである。

註1 《The Progress of the Working Classes in the last Half Century》統計學會において行はれ、Essays in Finance, second Series に再錄されたる演說。ロンドン、一八八六年。彼の《Further Notes on the Progress of Working Classes》を參照せよ。Journal of the R. S. Society, March, 1886. これらの覺え書も財政論考の中に再錄されてゐる。

註2 これに關するビー・ジョンソンの意見を參照せよ Discussion on Mr. Giffen's Paper, Journal etc., March, 1886, p. 96. 一八三四年の法律の發布以前における勞賃の水準の人工的低下が大であつたらあつたほど、この法律の發布以後、勞賃が勤勞大衆の生計の唯一の源泉たるに至つた時代の勞働者の物質的狀態の改善

はそれだけ素晴らしいものに思はれなくてならなかつたことは自明である。

註3　同所、同頁のピー・ジョンソンの指示。ギッフエンに對する多くの非常に斷然たる反駁は、Industrial Remuneration Conference においてもなされた。ロイド・ジョンはこの會議において他の二三人のイギリス統計學者の詩的破格を曝露した。この會議の報告書三五頁を見よ。

註4　チエドウイツクは、ロンドンにおいては家賃が二倍になつたと言つてゐる（Journal to the R. S. Society March, 1886, Discussion Mr. Giffen's Paper, p. 97）。エ・シムコツクス夫人は、住宅料の騰貴が、賃銀の水準の昂騰の結果として勞働者の勞賃に生じた增加の五分の三までを吸ひとつたことを發見してゐる Industria Rem. Conference Report, p. 92.

註5　上揭書、三〇頁。

註6　勿論、この傾向は彼一人に固有であるのではない。レワツショールは慰め顏にかう言つてゐる、『平時においては漠然とかう言ふことが出來る。失業者は工業勞働者の十分の一以下、そして多分賃銀勞働者（婦人および少年勞働者を含む）の二十分の一以下だと』（L'ouvrier américain, t. XVIII, p. 584）。しかしこれは決して僅少ではないのである、敎授よ！『十分の一以下』は社會の財產關係の矛盾によつて、社會の生產力の狀態によつて結果されるところの、巨大なる恢復すべからざる損失なのである。

註7　貧困および失業問題。エス・ベテルブルグ、一九〇〇年、二三九頁。

ブルジョアジーの『最も尊敬に値する』代表者たちは、彼等が勞働者達の『富裕化』について講釋を

始め、すでに我々に知られてゐるゴーシエンの例證を上げる時、如何に輕率なものとなるであらうか。彼によつて案出された『自動的社會主義』の爲めの論證として、ゴーシエンは一八七五―一八八六年の期間において、一〇フント以下の家賃の住宅數が一〇以上二〇フント以下を上下する家賃の住宅數よりも遙かに緩漫に增加したといふ事實を指摘してゐる。彼はこの事實を、勞働者階級の著しい部分がより大なる幸福を獲得するに至つたところから、より高價なる住宅に對する需用を見せてゐるのであるといふことで說明してゐる。しかし彼自身も、すべての者に知られてゐる住宅の騰貴を彼に指摘しうることを豫見してゐる。

この不可避的な反駁に對して彼は豫めかう答へてゐる『從つて、勞働者たちは自己の住宅に對して高い家賃を支拂ひうるのである。』[1]かゝる『客觀的なる』研究者は論駁しえない！

註1　《Journal of the R. Society》 Dec., 1888, p. 602.

『心掛けのよい』經濟學者たちは我々に劣らず、勞賃の水準の上昇はそれだけでは決してまだ勞働者の生活の改善ではないことを知つてゐる。しかし彼等は屢々これについて、恐らくは『社會平和』の利益のために沈默してゐる。しかるに他のさして面はゆくない場合には彼等は何も彼も言つてしまふのである。その適例として世界的に有名なレワツショールは上げよう。彼は自著《La population de